醫又西道百用綱目

安永九年版　本郷升之允編集

禁帯出

研医会図書館蔵和漢書整理票

書名	医道日用綱目.
撰・編・著	本郷介之允正豊編集
訳述・筆録	
原本年代	安永9年　1780年
再・復刻年代	
写記年代	
巻・冊数	1冊
刊・写	刊行本.
形態	縦 10.5cm 横 16cm
登録番号	原簿第　頁
備考	

ケ・ワイ 31.



千書之摘英

悉采群書要領爲初學啓蒙者

醫道日用綱目

如欲探本求源端別考諸全書

長生軒藏

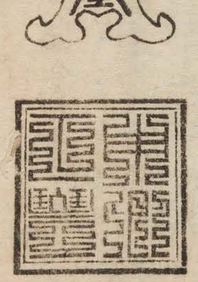
增補

醫道日用重寶記序

夫醫道之玄妙之ること浩々乎として測ぐ〳〵さて醫道重宝記の片郷の庸醫あるひは醫道に志ある俗家乃ち始めふ古人此書に著を始めふ脈を診をる大法とのべ藥性の樞要と纂めて中ふ病因と論じ寒熱虚實と辨じて方とひらゆる意と記し并に加減乃剛と出して要劑數種と載せ又經驗乃丸散煉藥數品の名方雜かごとぐ末ふ日用調菜食性能毒又灸の要穴わるいふ五臟六腑うち解ふいふもれまで悉くこれと記せり手裏小冊の中に許多の至寶を收藏し傍邊の素生のさとりの深き

いくら問津ふり但剞劂人と千はし
摸寫手と百ふに肯て謬誤多くと
あさいず予僭踰なんとをるこゝ
ごと止に忍ど即これを校正し粗
増益して書肆にさゞく廃幾ばこの
書に頼て藥と用ゐる者の誤るをん
こゝ我欲と豈民と救ふ一助ならん
さらんや乎
旹
寶永己丑季秋吉日
浪華　芳菊堂李卿正豊序





醫道重寶記　目錄
△按摩導引の法　十丁目
○五藏獨按摩の圖解
遺精自身按摩れ法
△包紙の法式　十三丁
藥銘の作法指南　十三丁
○醫家之訓　四知の法
○診脉の法　并三部九候　十五丁目
脉と診の大綱と述諸脉の狀と
註して壬病と知死生と決を
二十四脉の要訣　十六丁
○七表の脉　○八裏の脉
○九道の脉　○七死の脉
○死証の視様　十八丁
○藥性要訣付　制製法　十九丁目

香蘇散
藿香正氣散
十神湯
行氣香蘇散
升陽發表湯
升麻葛根湯
小柴胡湯
小承氣湯
黄連解毒湯
△中寒 四十七丁
五積散
四逆湯
△中暑 并霍乱 四十九丁
五苓散
清暑益氣湯
理中湯
回陽救急湯
十味香薷飲
生脉散
參蘇飲
人參敗毒散
八解散
九味羌活湯
疎邪實表湯
不換金正氣散
大柴胡湯
大承氣湯
白虎湯
△中風 三十七丁
八味順氣散
防風通聖散
大秦艽湯
加減潤燥湯
△傷寒 付 傷風
烏藥順氣散
小續命湯
加減除濕湯
勻氣散
感冒 四十

茶百二十五種諸家の本草と考へ其要を摘て氣味功能修治に至るまで盡く是を記と

分量

○六陳 八新

藥方要解 五十五方

病門と分ち論を立て病因を辨じ脉を擧て病の吉凶を知しめ且寒熱虚實を明らめ察して方と用ひたるにおいて誤らざることを示す

△中濕 一冊一丁
羌活勝濕湯
獨活寄生湯
△火証 五十二丁
凉膈散
升陽散火湯
清上防風湯
△内傷 五十四丁
補中益氣湯
升陽補氣湯
七味白朮散
參苓白朮散
△食傷 并痞滿 五十五丁
平胃散
香砂平胃散
葛花解醒湯
△泄瀉 五十六丁
胃苓湯
理中湯
中寒の理中湯とい別方なり
胃風湯
△痢病 五十八丁
行和芍藥湯
調和飲
參苓芍藥湯
真人養臟湯
倉廩散
△瘧疾 五十九丁
九味清脾湯
七味清脾湯
人參養胃湯
△諸氣 并欝証 六十丁
分心氣飲
正氣天香湯
沉香降氣湯
六欝湯
△痰飲 六十二丁
二陳湯
△咳嗽 せきとりぐさ 六十二丁
清肺湯
杏蘇散
風蓼枳實湯
寶鑑瀉白散
△饋雜 六十四丁

消食清鬱湯
△嘔吐 付反胃
順氣和中湯
丁香柿蒂湯
△諸虛 付虛勞 六十六丁
四君子湯
四物湯
十全大補湯
加味逍遙散
△諸血証 吐血 衄血 咳血 便血 下血 五十九丁
犀角地黄湯
△積聚 七十丁
七氣湯
△水腫 七十一丁
分消湯
補中治濕湯
加減益氣湯
加減四物湯
獨參湯
滋陰降火湯
八物湯
六君子湯
清鬱豁痰湯
呑酸 厄逆 五十八丁
化痰清火湯
△黄疸 七十二丁
清熱除濕湯
△疝氣 七十二丁
吳茱萸湯
△汗証 三和散
當歸六黄湯 七十三丁
黄芪建中湯
參芪湯
△眩暈 并健忘 七十四丁
清暈化痰湯
歸脾湯
△消渴 七十五丁
黄連地黄湯
△小便大便閉結 七十五丁
潤燥湯
△淋病 七十六丁
五淋散
八正散

△遺精　付遺濁　七十七丁
清心湯
△頭痛
半夏白朮天麻湯
川芎茶調散
加味調中益氣湯
△心痛　付腹痛
清熱解鬱湯　開鬱導氣湯
△脇痛　付腰痛　肩背痛
疎肝湯
補陰湯
△痛風　付痺証
羌活湯
羌活導滞湯
△脚氣　八十二丁
當歸拈痛湯
通氣防風湯　八十二丁
大防風湯
△眼目　八十三丁
洗肝散
益氣聰明湯
滋腎明目湯
△口病　并牙齒　八十四丁
清胃散
玄參升麻湯
清胃保中湯
△咽喉　八十五丁
清涼散
通関散
牛蒡子湯
△耳痛　八十七丁
滋腎通耳湯
蔓荊子湯
△痔漏　八十八丁
秦艽防風湯
△脫肛　八十八丁
參芪湯　汗証遺濁　并二此方

升陽除湿湯
△癲癎 八十九丁
養血清心湯
△養老 一方
外科
△瘡疽 并諸毒 九十二丁
荊防敗毒散
千金内托散
△下疳 并便毒 十六味流氣飲
托裏散
龍胆瀉肝湯 楊梅瘡 九十二丁
△疥癩 九十三丁 搜風解毒湯
升麻和氣飲
△瘰癧 九十四丁
五香連翹湯
△損傷 并金瘡 益氣養栄湯
破傷風 九十五丁
道滞湯
白朮湯
婦人科
△經脉
四物湯方八諸虚門ニあり
△崩漏 九十八丁
膠艾湯
△帶下 九十九丁
升麻滲湿湯
△産前 九十九丁
驗胎散
催生飲
△産後 百二丁
芎歸調栄湯
小兒科
羌活防風湯
大芎黄湯
△經閉 九十六丁
八物湯方八諸虚門ふあり
紫蘇和氣飲
芎歸湯
芎歸調血飲

△面部形色并圖 百四丁
△虎口之脉并圖 百六丁
△小兒之脉法 百六丁
△初生通用
甘連湯
△急驚風 百七丁
加味敗毒散
△慢驚風 百八丁
醒脾湯
△疳疾 百九丁
消疳飲
△癖疾 百十丁
消癖湯
△痘瘡 百十一丁
十神解毒湯
透肌散
神功散
起死回生散
回天甘露飲
△麻疹 百十五丁
犀角解毒湯
九散 付雜方
常に用ひて効あること
雜方と出して急卒の用ふ備ふ
△丸藥 百十六丁
六味丸
木香槟榔丸
參朮肥兒丸
返魂丹
錦袋子
△散藥 百十九丁
保元湯
內托散
消毒飲
十仙湯
八味丸
紫金錠 万金丹 下七云
養胃丸
豐心丹

安神散　桑蕭散
延命散　和中散　百二十丁
△氣付爛藥の方
藴合香圓　延齢丹　百二十丁
丁子圓
△　△
目藥　百二十七丁
家傳明目膏　洗眼散
膏藥　同丁
△　△
萬病無憂膏
△　△
藥湯　百二十八丁
五木湯
十全湯
△　△
日用食性　百七十五種　百二十九丁
菜蔬瓜實魚介鳥獸に至まで
各〻能毒
を詳ふして諸病の禁宜を記す　百四十一丁
△鍼灸の要論
○撚針の手法
○鍼法の補瀉
手法の補瀉あり虚實の補瀉
あり
○大推を定る法
○分寸を定る法
同指寸あり同身寸あり
○五臟六腑内經の圖
○五臟六腑の圖解
仰人之圖
伏人之圖
側人之圖
△鍼灸の要穴　百四十九丁

穴を求むる法をそうく記し
鍼灸病を治をるの効能を詳ら
かを
○
加減之例　百五十六丁
氣血虛實風寒濕熱乃諸証を
分つて盡くこれを記し加味する
者の規矩こん
目録畢

五臟之色體
肝藏膽木青酸眼筋怒溫
心小腸火赤苦舌血喜熱
脾胃土黃甘口肉思濕
肺大腸金白辛鼻皮憂燥
腎膀胱水黑鹹耳骨恐寒
臟腑　五行　色　味　五根　五主　五志　氣

壽保按摩法
夫按摩ハ人虛損して血氣のめぐ
ざるゆゑに病をなすゆゑ常に手足
身體を動搖をすることハ食物消
やすく血脉めぐり病生ずることな
張介賓の云く按摩ハ氣血を順すと
要ずん傷と作さんことを欲せず節
と緩して筋を柔げて心を調和とす
りのハ其病を治をもつともとす今按
摩乃流を見ればその利害を知らす
もつともりそこ手にカと極め人と困
關節をひしく人の元氣と損ずこと
內經乃旨按摩ハ道理を知ざるハ也
後よもろく処の自己按摩ハ自
身こんとをすべきのみにして尚上の助ハ

肝の臓の積聚風邪毒氣と
さゝ脇痛ふよ」
平ふ坐して
兩の手を相
又相引て反覆
して胸に向ふこと
三五度をべし



膽の腑の風毒邪氣と
平に居て兩の
手ゐて兩の足を
持かゝらと叩き
次小兩の手にて
足腕と持ち挽て
搖動をこと三五度をべし



心乃藏のまづ〳〵ひとさ
しつゝふ坐して
兩の手こゝん
拳となして
力を出して
左へと右へと相
突こと各六度をべし



心胸の間の風邪を去り諸れ疾を除く
兩手を相又て
脚ふて手れ
中を踏こと各
六度良久して
目を閉て三たび津を
のこ齒をやしてやむる



肺の藏の風邪積聚を去ふ
平ふん坐して兩の手を
膝にとつけ身を
縮め脊中を
曲めて向上る
こと三たび
をべし



肺の藏胸膈の閉れ風毒をさるよう
平ふん坐して拳を反し脊中を
槌こと左右
各三五度
して後か氣を
閉目を閉ぎそ液を
呑三たび齒を叩てよう



腎の藏のやまひを治るよう
平ふん坐して
兩の手を
あげ耳れ
左右より
脇へ引こと
三五度をべし



腎腰脇腰の間乃ち
風邪を去かい
足の前後を
ひらて左へ
踰し右へ
踰をこと二三十
度もすべし



脾の藏れ積聚風邪を去食をくむ

大坐して片足をのべ又片足をば屈め



両の手を後かて相叉て脊中を反抱して各三五度をべし

○遺精不禁を治るには臥時ふ身を屈め弓の如く挽でくゝみて臥兩の膝を脇の所か縮めあひ左あひ右に側ち臥て一の手を用て陰嚢をひき一乃手かて丹田を脇の下三寸分覆ひて心を寧おちく靜か卧べし是精を固して洩さど身を保つ妙術なり

○包紙法式

藥箱れ蓋を仰け其上に小包紙を左よう右の方へ折かけ合ふてを置べし



常の包やう

道三家是を九茉散茉い此のごく色べし

半井流

五雲子流

○藥銘作法指南

包紙か藥方の銘を書て其病の品ようそれ〳〵乃理よかるる銘を作る

なり古來ようり付來る銘をば書べう

ど何湯何飲なべ〳〵三字の五字に書べ

四字ハ嫌ひとかる左は記をこころの

二十れ字を銘のりらに付下かは

湯の字飲の字とを中に相應の字を夾そへ銘とするべし中ゟ夾む字もあるは是ゟ作りそこなふものなり

益〈元―脾―思　黄―心―血―津〉湯
養〈氣―血―中―肌　元―心―肺―筋〉湯
寛〈虫―中―脹―胸　痛―急―腸―臑〉湯
平〈氣―順―中―養　和―虫―聚―痺〉湯
快〈心―欝―臑―積　痞―塊―腸―淋〉湯
消〈痞―聚―穀―毒　瘀―凝―虫―腫〉湯
安〈神―虫―榮―聚　胎―中―氣―全〉湯
清〈暑―金―心―胃　神―涼―源―燥〉湯
驅〈邪―風―濕―熱　痰―毒―瘧―寒〉湯
補〈脾―腎―真―元　血―氣―陰―陽〉湯
順〈氣―血―通―生　解―經―腸―和〉湯
通〈滞―腸―氣―經　秘―仙―臑―痞〉湯
保〈和―中―養―元　兒―童―嬰―精　安―命―神―心〉湯

中ー經ー胃ー脾
調ー氣ー血ー養ー營ー湯
溫ー中ー腸ー
肺ー養ー和ー腎
中ー解ー
和ー虫ー痛ー毒ー堅ー飲
痰ー毒ー膿ー中
化ー癥ー虫ー積ー塊ー湯
志ー心ー
定ー神ー氣ー源ー喘ー湯
悸ー怔ー
神ー仙ー聖ー授ー靈ー散
機ー攅ー
金ー玉ー德ー
勝ー鉄ー
寶ー石ー丸

右湯を飲ても又丸ても散ても書べし

醫道日用重寶記

本郷介之允正豊編集

醫ハ乃生死の寄ころ敬まざるべからず人身の病苦我ことなるべき者あらば急ぎ去べし貴賤親疎を擇ばず藥料の多少を論ぜず專人と救ひ療治するふい假みを戲ことの女を療治するふい假みを戲ことの辭を出ことなくして心ことすべし又若き所ある時ハ脈を診ことも近き易き人ゐ頼するこころべし又いふ心藥などゝ調合ことも胎を墮ことも四知ハ望聞問切是也

病と治をるふい先病人乃形色と望見て次ゐ音聲を聞き扱病訳

病因をよく〳〵尋問ひ其後脈を
診切して其病を察べし
縦ひ色赤ひ熱也白ひ寒血虚肺弱き
なり黄ひ脾胃の虚也青ひ痛なり
黒ひ腎の實也聲かろきひ氣虚聲
重濁ひ風邪なり尿黄ひ熱清ひ寒也鼻
塞ひ熱清潟ひ寒形痩ひ虚肥ひ實の類
と詳に見聞し又飲食の多少二便の
通塞婦人ひ月經調や否や必問之べし

診脈の法并二部九候

醫者の中指と病人の掌後よりある
高骨のそこにあてゝ是を関部とす
左ひ肝と膽と主どり右ひ脾と胃と
と主どる食指のあたる所を寸部と云左ひ
心と小腸と右ひ肺と大腸と候ふ無
名指のあたる所を尺部といふ左ひ腎と
膀胱と右ひ命門と三焦とを診を
寸関尺の三部に各浮中沉ひ三あり
あるとて三部九候とふなり
浮ひ輕く浮めて六府を候ふ病表に
あること沉ひ強く按し沉めて五藏を
候ふ病裏ひあることひ中ひ浮をよ
沉やゝず中よりして診す病半表半
裏かあるこをいふなり



七表之脈

浮脈 重く按べば不足指を舉ぐるが如く有餘病表にあり力有ハ風無力ハ虛兩邊實し中間なし蔥葉を按ずるが如し

芤脈 諸の失血と主ごり血熱ごくに動て珠の貫て絕ざるが如ごし

滑脈 血多く氣少し痰と吐逆と主ごる

實脈 大ごくて長く堅ごくて力あり下利と主ごる熱喘痛氣塞ごる按じさるなんど弓の弦のごごし

弦脈 拘急と主ごる寒と瘧とごす

緊脈 實數にして力ありてさびごし諸痛と疼さごり寒邪ごくに舉按ごるふ極めて大きごるごし

洪脈 熱と主ごる陽盛ごるごし

八裏之脈

微脈 極て細にして有が如く無が如し氣血不足ごし痞とつさごる

沉脈 輕く按べ弱く重く按で有餘病裏に在冷氣水病濕泄と主ごる

緩脈 浮大ごくして軟ふ微し遲し

風結ごくん麻痺とつさごる

細ごくして遲し竹皮を刮ごごし

濇脈 精涸と血滯るごくん多ハ痺とつさごる

遲脈 一息ふ脈來ごくこと三至ごる極て慢し陽虛ごくん痛力ごくん冷也

伏脈 輕く按べ極て重く按べあり痞塞とつさごる物聚ごるごくん

濡脈 極めて軟りふ浮細ごくして力裏ごくん元氣虛ごくこと

弱脈 極めて弱く爛綿の如く力なし
虚して筋痿風熱自汗
九道之脈
長 引ぐこと竿の如し三焦の熱を主る
促 數ありて時ふ一止む氣血痰食滯
短 ちぢまること也氣壅り食消
虚 遲大にして軟に力なし氣血虚
結 遲にして時ふ一止む氣血痰積痛
牢 強にして鼓皮を按ずるが如し氣壅り骨肉疼
動 大さ豆の如し微動く虚勞無利
細 線の如くにして精神氣血ともに虚
代 中止て還らずして復動く壯は死
七死の脈
彈石 彈丸石を擊ごとく息數次第なし
解索 藤の漬らざるが如く散亂して次第なし
雀啄 數急にして連來て鳥の啄ぐが如し
屋漏 雨漏の二三滴にして絶ぐが如し
蝦遊 蝦浮て動ぐが如く暫くして去て復來
魚翔 魚の遊ぶの頭定まらず尾を搖ぐが如し
釜沸 釜の湯を煮て沸涌て珠の浮ぐが如し
死証察視
肝絶 眥陷入盲の如く泣汗出て流ぐ
舌卷卵縮 舌卷き卵縮て爪甲青黑く自精光なく
齒齦黑 齒齦黑く心絶て肩を縮めて息し直視手足
の裏腫て紋なく熱ありて忘語口張
舌青 毛髮乾竪て麻の如し脾絶て浮
腫泄利して無度唇反人中滿唇口乾き
焦 唇青く體冷遺尿食を見て背む
肺絶 口を張て魚の如く氣出て不反
胸中氣滿喘息皮毛乾焦て髮直毛折

腎絶スル歯枯熟豆ノ如ク耳口鼻ノ
黒色起ツ腰重ク痛ンデ折ルルガ如ク
冷汗出ツ流ルヽ大小便通ゼズ失音
面ノ精彩ナク土色ヲ呈シテ食ヲ受ズ一切ノ
不言衣乃縫ヲ循床ヲ摸ス空ヲ撮
戴眼ニ尸臭ク項ノ筋舒ズ久病虫下
神氣不守声嘶大骨枯槁シ大肉脂
下リ動作ナヽク衰ヘ破胭ニ目人ヲ
見ザルヽ如キハ死ヲ也九病人ノ色青キ
ヽ翠羽ノ如ク赤ヽ縹ノ雑冠ノ如ク黄ナ
ルヽ雌黄ノ如ク白キヽ豕ノ脂ノ如ク
黒キヽ黒漆ノヾトク光澤アル生ベシ
若青キヽ藍ノ如ク赤キヽ赭ノ如ク
黄ナルヽ梔實ノ如ク白キヽ枯骨ノ如ク
黒キヽ炭ノヽトク精彩ナキハ死ヲ

藥性付製法

(い)蔵灵仙　苦ク温腰膝冷テ痛ム
積聚痞癖風湿乃病ヲ通ジ久
用ユレバ芦頭ヲサラ剉ヲ用ユ沙火ヲ忌
○茵陳　苦寒黄疸ノ主薬ヲ湿
ヲ去水ヲ利シ熱ヲスヾクス根ヲ
サラ葉ヾケヲ用ユ火ヲいむ
(ろ)鹿茸　甘温氣ヲはシ陰ヲ滋シ
泄精尿血崩漏帯下ニ主シテ火乃
上ヲ下シテ毛ヲ焼テサヾむ
(は)麥門冬　甘寒渇ヲやめ煩悶ヲ去
心ヲ補ヒ肺ヲ清シ虚熱ヲ解ヲ内
乃心ヲさラ剉ム鉄ヲいむ
○貝母　微寒咳ヲ止燥痰ヲ化シ
肺癰肺痿ニ鬱ヲのゾキ煩ヲ除ク

心と蕾とを去り刻み姜汁を灑ぎ
日に干て少し
りのに大毒あり用ゆべからず
○薄荷　味辛し頭目を清うし
風とさの痰とを化し骨蒸にも
葉ともろ〳〵日に干て揉砕き砂と
うるひ去て用ゆ火をいむ
○防風　甘温頭暈を除き骨節の
いさゝかに諸風口噤して用ゆ米泔
に一夜ひたし土氣をあらひ芦頭と
黒き皮を去刻み乾て少し焙る
○半夏　辛温脾を健うし湿を燥
〳〵痰厥の頭痛に嗽吐して用ゆ脾
胃の湿痰を主どり熱湯かひし
ようよく洗ふこと七八度ゆて滑の

うるさを去少し乾して刻うよく
生姜の汁と四分一入て拌せかして
をそよ〳〵あぶるべし
○白扁豆　甘微涼轉筋吐瀉氣を
ぐし中を和らげ酒毒と化を水に
侵し皮とそぐり去て刻み炒る
○麥芽　あまく温宿食を消し心
腹膨脹に血を行し滞を散ずよく
炒て揉芽をとりさりて去て刻み團み
てあぶきて皮をとさる
○破故紙　辛温腰膝酸痛に陽を
與し精を固を枝皮と擇さうよく
塩酒か一夜ひたし刻み少し炒る
⑫人參　甘く温大か元氣と補ひ
津液と生じ渇と止氣と養ひ血と

調ふ芦頭と去剉て火炙し焙る鉄を忌
○肉桂 辛熱血脉を通ず腹痛み
瘀血を行し虚寒を温め補ふ
欠べし〳〵粗皮を去剉む火をいむ
○乳香 辛苦微温諸の悪瘡を療
ず肌を生ずるみを止よく諸經
乃痛を治す木の皮石ぞ〳〵擇去
そのまゝ剉む火をいむ
○肉豆蔻 辛温中を温め食を消
し嘔を止虫を殺し瀉痢の久く
休ざるを治す麪の粉とゝのて包
熱灰に埋み炮して麪を去打砕き
用ゆ銅鉄ともいむ
㊟牡丹皮 苦寒血を涼し血を行
ら經を通し血分に熱あるに汗
を發し骨蒸にくれて煩ゆ米泔
一夜浸してよく洗ひ剉て焙る鉄
を忌若心のさゝぬぞあるを去べし
○牡蛎 微寒精を澁とめ汗を斂め二便とかくくそ
渇とやめ汗と斂め二便とかくくそ
火炙て煆水に入て冷し取出し
乾して粉こ
㊀鼈甲 酸平労嗽骨蒸瘧を散
腫を去瘕と除く酒に浸し炙ること
六七度をれべ脆くなるを打砕き用
㊁獨活 甘苦頭項鈍痛筋骨緩弱
足濕痺し諸風とよく除く土氣と
あらひ腐をさり剉こゝをむづる
○杜仲 辛温筋を強し骨と壮ん
を足腰のいたむ小便淋瀝を用

粗皮をさり刻と塩と入うる酒小
侵一干て糸れ尽るうて炒る
㋑知母 苦寒熱渇と除き骨蒸汗
あると治と陰火と瀉一痰咳と療
ど毛こ皮ことを去刻こ焙る鉄を忌
胃火と瀉をるれい生すて用ひ腎
火と瀉するれい酒よて炒る
○陳皮 辛微温氣と順一膈と
ゆるし脾と和げ痰と消を米泔
お一夜浸一瞬と裏め白こと成去
刻こ日れかー妙り
○猪苓 味淡一水と利し淋と通
ど腫と消ど湿と除く黒き皮と去
米泔お一夜ひたし刻こ乾を鉄を
火ともひ

○地骨皮 苦寒肌熱を退け汗有
骨蒸に陰を強一血と涼を土氣と
洗ひ心とさり刻こあぶる鉄といむ
○沉香 辛微温氣を降一胃を温
め邪と追腐と削去その後刻む火を忌
○丁子 辛熱寒嘔と除き眼
痛に胃を煖む花と角こと去其後
刻こ火といむ
㋩龍膽 苦寒肝経の熱を除き眼
腫と除き膀胱乃火と瀉す土氣と
洗ひ髭と去て刻む鉄火こと忌
○良姜 辛熱氣と下一中と温め
轉筋霍乱冷積と破つ酒壺宿食
と解と毛と芦頭こと去きざこと炒る

㊧遠志・菖辛温神を安じ驚を止
心を鎮め志を強し健忘を治をく
洗ひ芦頭を去槌かて碎心を去剉
甘草湯に浸し乾して焙る鉄を忌

㊨黄芪甘温肺氣を補ひ表を固
汗を收め瘡を托し肌を生じ渇を止め
膚熱を解し蜜に水とまぜてあぶり
灸つゝ剉こ乾し又腎を補ひ下焦
へ通ずるれい塩水に浸して右の如
ふくろくなり

○黄連苦寒心火を瀉し痞滿を
除き目を明かにし安ど驚悸を止
安ど痢疾心腹痛に大腸を清を
瘡瘍を治を芦頭こ毛ことさり
酒に浸し剉こ焙る

○黄芩苦寒肺火を瀉し痰熱
嗽と止腸胃の熱を清し胎を安す
腐とさり剉こ洒に浸し乾して焙
○黄柏苦寒腎火の有餘を瀉し
小便を利を火を降し陰を滋下焦
乃濕熱腫痛して下血小骨蒸を治
を粗皮とさり剉こ洒にひたして炒る
乾し色の付ぬ程

㊀甘草甘温脾を補ひ中を温め
諸藥を調へ和ぐ生にて用ひべし火
熱を瀉し炙用ひべし裏寒を去粗皮と
削去て剉こ焙る○葛根甘平肌と
解し表を發し呕吐頭痛の胃を開
こと疹を散ず渇を止め酒毒を解す
土氣を洗ひ剉こ焙る○蒙本氣

温寒濕と祛風邪と屏け太陽の頭
痛と治を總て痛の巔頂にうる
療すよく洗ひ芎頭と去對こ焙ろ
○香附子 甘苦溫氣を快し鬱と開
き痰と消し表と發と痛と止め宿
食と消し山嵐瘴と止め經と調ふ石
乃臼ふて碎き鉄といむ○厚朴 苦
溫中と溫り胃と平げ脹と消し滿
と除き痰と化し氣と下し食と消
瀉痢と治と粗皮と削こう洗ひ對
こ生姜の汁ところう合うぐれ入て
日に干て黙くなる程炒る○香薷
辛溫暑に傷らんく小便ころ霍
乱水腫と治と
熱と解と枝と

火と忌○乾姜 辛溫中と溫め脾と
補ひ風寒濕痺腹痛と治す腰の冷
て痛ふ風寒と
後大熱にうれと用ゆ水に浸し能
めうい對こ焙ろ○訶子 苦溫腸と澁
ら一痢と止肺と斂め嗽と止麪乃
粉とこねて訶子と包こ熟灰ふて
炮しうく包こうる粉と校こそう
對こ焙ろ○莪朮 苦溫積聚と破て
心腹の痛と治し經と通じ瘀血と
消と皮と削去水に浸し對こ酢と
うけ干て焙ろ

(よ)薏苡仁 甘平溫痺と除き筋脈
乃拘攣と治し肺と保ち敗と止め肺
癰肺癆と治と水にて洗ひ外の交

つりのと擇去て刻み焙ろ鉄と忌
⑦當歸 辛温心を補ひ血を生じ
瘀を去新血を生じ中を温め腸を
潤を土氣を洗ひ芦頭を去刻み焙
○大黄 苦寒瘀血を消し積聚と
除き結熱をとり腸胃を通じ宿
食停痰を治をそのまゝ刻み酒に
浸して炒る○大腹皮 辛微温一切
乃氣を下し水腫悶脹を消し胄を
開き中を調ふ水に浸しよく洗ひ
内の堅き皮外の黒き皮を去毛ご
ろと黒豆の煮汁をよくく
洗ひ又酒にて洗ひて刻み用ゆ
澤瀉 甘鹹微寒水道を通じ林
歷腫脹を治し温を除き熱を泄

を皮と去刻み焙る○桃仁 甘寒大
腸をうるほし瘀血を破り經を通じ
血瘕を治を湯に浸し皮と尖を
去て刻み焙る兩仁と用るてよろし
⑧連翹 苦寒癰疽の腫毒を消し
六經の邪火を清し氣聚り血凝
諸瘡ようく痒き皆よく治す瘡
家の要薬なり枝〳〵實の中に心あり
さう刻む火を忌○蓮肉 甘平脾を
健にし胃を理め心を清し神を養
ひ瀉痢を止め遺精を治を堅はして
二つにさう湯にてもぐ〳〵漬てもぶ
皮をさう刻み干てあぶる
⑨烏藥 辛温心腹痛脹を小便滑
にして頻りて脚氣痛氣々厥の

頭痛婦人乃血氣七情の鬱結を治す
氣を順をの要藥也跡さらの細く
堅き所を去判こ焙ろ○茴香辛平
脚氣疝氣腹腰の痛こ氣を下し
胃をあくめ命門の不足を補ふ其
まく判こ塩水に浸し乾と○烏梅
酸溫肺氣を飲め嗽を定め渴を止音
を清し痰を去蚘を安ぜ熱を退
け酒盡を消を水れをもまぞよく
洗ひ蒸て核をさろう判む
㋕滑石甘淡寒小便を利し煩渴
を解し心火を降し黄疸水腫脚氣
を治を九竅を利をるれ主薬なり
○藿香辛微溫中とあくめ胃と
開き嘔吐を止心腹痛を治し氣を行
し風寒を發散す霍乱して是を主と
を土砂れ尽るまで洗ひ判こ乾
火を忌○瓜蔞仁寒肺燥をうる
痰結を除き咳嗽を安じ火を降し
渇をやめ傷寒の結胸を治す竪に
してすり皮を去判こ炒る鉄を忌
○瓜蔞根天花粉と同しうの也
功能天花粉の所みをうる米泔に
浸し洗ひ皮を去判こあぶる鉄を忌
㋖益智辛溫神を安じ腎を補ひ
脾を扶け食を進め遺溺遺精を治
を皮を去布の袋に入て押揉障
子を去をこう炒る
㋷麻黄辛苦溫表を解し汗を出

○荊芥

一風寒頭痛身熱一脊強口噤喘逆と治を根節とも去り水よて煮て沫と去日に干て焙る○蔓荊子苦寒目の痛に赤く腫涙出るに歯の痛に頭痛み頭昏く脳かるに拘攣濕痺と治し諸經の血と涼し頭目と清す布の袋に入て揉白きと消と婦人血風乃要茉也枝と去て穂ともに用ゆ火と忌○玄参苦寒腎と補ひ熱と清し骨蒸燥渇と治し癰瘰癧疽と治す水に浸し白く強き所と去り炙て剉む○桂枝辛熱汗と發し皮膚の風を治し手臂に入筋と舒る也粗皮と去て剉火と忌

㊇茯苓甘淡胃と補ひ小便と利し濕と去痰と消し肺と保ち神と安ど皮筋と去剉と焙る○茯神心を補ひ神とやしなひ智と益怒と除き驚悸健忘と治を制衣法茯苓に同ど

○附子辛熱藏府の沉寒四肢厥逆心腹の冷々痛寒濕痿躄を治し小児慢驚胃寒蚘動と治を敗陽と回し虚陽と補ふ紙に包濕して熟灰中に炮し皮臍と去四に切甘草水に一夜浸し剉とかわす

◎紅花 辛溫 痰血を除き痛を止多く用ゐれば血を破つて經閉を通ず少く用ゐれば血をやぶらず産後血暈を是と主ること交互りのと去酒とうちをにし焙る○五味子 酸温 肺氣を收め腎經を滋し津と生じ久嗽を止め陰を強くし精を澁し熱を除き渇を解す枝蒂と去對こと鉄といひ嗽苯にい炒て用ゆ○呉茱萸 辛温 疝氣を調へ臍腹の寒痛と治し中を温め氣を下し嘔を開き食を消し虫と去呑酸を治す枝を去熟湯に浸し採洗ふこと六七度してあり○牛膝 苦平 筋骨と壮はし腰膝と利し寒湿痿痺と治し精を益し陰を強くし諸藥を引て下行ること甚だ捷なり土氣と洗ひ對こと乾し酒に浸し焙る○牛房子 辛平 瘡毒を消し咽の痛と治し疱瘡の毒と解す實の輕く虚なるを簸て去洗ひ對こと微し炒る

◎天門冬 甘寒 燥を潤し肺と保ち喘を定め嗽を止め燥火の痰と治し肺痿肺癰と治し湯に浸し所こある皮と去二ヶ月引さ心と去苦しむ○天南星 辛温 風痰を除き中風麻痺口噤身強ると治し小兒の驚搐及び破傷風と治し

と熱湯めて洗ひ浸し皮を去剉き
姜汁と拌乾り炒焙る○天麻辛温
風虚乃眩暈麻痺を治し小児乃
驚癇拘攣を治し酒に一夜浸し
剉き焙る○天花粉 性寒渇を止煩
と去熱を退け痰を化し腸を利し
腫毒を消す塵を去そのまゝ用ゆ
鉄をいふ
㊀阿膠 甘温労損虚羸を治し崩
漏尿血經水の調ざると治し燥と
潤し咳を止肺痿肺癰肺癰を治し剉
き土器に入て炒王となして用ゆ
㊁山梔子 苦寒肺熱を清し三焦
乃遊火を瀉し鬱を開き淋を通ず
熱と小便より泄し吐血衄血を治

し熱厥の心痛を治す跡さゝれと去
剉き黒く炒る○柴胡 苦微寒肝火
を瀉し傷寒瘧疾寒熱往來を治
し肝労を治し熱れ血室に入と治
と土氣を洗ひ芦頭と黒き皮とを
去剉む鉄火くをもひ忌○細辛 辛
温風寒湿痺少陰の頭痛を治し氣
を下し痰を破り歯乃痛み涙の出る
に窮を利し關を通す水に一夜浸し
よく洗ひ芦頭を去剉み火といむ○
蒼朮 苦甘温脾を健ふし湿を燥し
汗を發し邪を散し痰を消し氣
を下し瘴氣を除き瘟疫を辟く米
泔ふ浸をて三日よく洗ひ剉き乾
うて焙る毎日水を替てよく洗也

○酸棗仁　酸平煩心ニシテ眠ざるを治シ虚汗を斂メ、皮を去剉む膽實シテこく眠りのふい生にて用ひ膽虚シて眠らざる者ふい炒て用ゆ○草果　辛温瘧疾を治シ瘴瘟を辟穢を消シ食を化シ嘔吐を止酒毒を解す麪に包こ炮シて殻を去剉こ用ゆ○山査子　甘平肉食を消シ飲食を化シ痞滿を治シ小疝氣を療シ痰飲疾を消す湯乳積こ消す湯ふひと和けて核を去剉こ用ゆ○三稜　苦甘積聚を消シ血結を利シ心腹痛を止撲損の瘀血を消す制衣法裁木と同シ○桑白皮　甘寒肺の火邪を瀉シ嗽を止喘を定め痰を消す日に干て搥みて打和げ細く引さけば粗皮は皆落る也引さきたるを繩にゆひて剉む鉄に忌○犀角　酸寒心を清シ煩熱をさまし驚を鎮め邪を辟毒を解シ吐血衄血下血を治シ瘡癤の餘毒を治す白き所をさり剉む○山茱萸　酸温腎を補ひ腰膝の酸痛を止め精を斂め髄を益腎虚耳鳴を治す水にて洗ひ枝核を去乾シ酒に浸シて蒸剉こ焙る○山藥　甘平脾を理め中を補ひ腎を益精をかたくし熱を退け瀉を止む米泔に一夜浸シて洗ひ剉こ焙る鉄ていむ

㊂桔梗　苦平咽の腫痛を治し鼻
乃塞るを通じ胸を開き痰を消し
風を散じ膿を排某と載て上升を
苦ノ頭を去そのまゝ剉て焙る羌活
甘微温風寒濕を除き頭痛身乃
痛ム筋骨の痺て痛ム頭旋るを
掉眩ヨ項伸ざるを治そのまゝ
剉て焙る○杏實苦寒食を消し痞
と除き結實を破るに墻を沖倒るの
と化し積を破るに水に浸し核と穰とを
功ありこゝろ水に浸し核と穰とを
とれるを剉て麪乃粉と霜の降るが
ごとく拌まぜて乾し炒る○枳殻苦
微温咳とやめ喘を定め氣を快く
腸とゆるし胸中れ氣結と消し水

氣脹滿を治し食を消じ重墜後
重を治す水に浸し内をすに剉
こ麪の粉を拌せ乾し炒る○
金銀花甘温温とさう諸の腫毒
悪瘡瘻疽を治し熟を散じ毒を
解す蔓葉を去剉む○杏仁苦温
風痰喘嗽を治し大腸を潤し氣
逆便閉を治し湯ヨ浸し皮尖を
去剉とよく炒る雨仁ふい毒のり
用ゆべうらず○菊花甘微寒頭面
乃風熱を清し目を明し涙を
とゞめ眼の赤を除き胸中の熱を
さる陰干にして剉む火といむ
㊃芍藥酸寒肝を制し肺と斂め
血熱を去腹痛とやめ瀉痢を治す

能飲み能補ふ虚寒には用ゐること
と水に浸し去芦頭と去對て乾り
酒に浸し一日に干て焙る鉄といむ
○生地黄甘微寒血を涼しく陰を
補ひ瘀血を去新血を生じ骨蒸
煩労を治す水に浸しよく洗
ひ對て乾り酒に浸し一日に干く
焙る銅鉄ごとしもに忌○熟地黄甘微
温腎水と滋精髄と填血脉と通じ
直陰を補益を竹刀ふて對て用ゆ
○紫蘇辛温風寒を散じ表を發し
中を温め氣を行り痰を消す葉を
去日に干て揉砕き土砂とふるひ
去火を忌い青皮苦温氣滞を散
結積を破り食を下し痰を消し

肝と平げ脾と安じ水に浸し蒂と
内乃白こと去對て焙る○車前子
淡寒水を利し眼赤きを除き瀉を
とめ熱を解し催生ま用ゆ水ふり
て洗ひ土沙とり去日に干て砕き用ゆ
○沙參苦微寒肺熱を除き腫を
消し膿を排肺癰肺癆を治すの
米泔に浸し對て洗ひ焙る○縮砂仁辛温
その油を對こと焙る○神麹甘温水穀停食
胃とやわらひ食を進め氣をくだし
痛とやわらひ食を化し酒毒を醒を
搗砕き布の袋に入押揉て漿子を去
少し焙る○神麹甘温水穀停食
と化し脾胃と健うめ結と破つて
痰を逐ひ中と調へ氣を下を其促

砕き炒用ゆ古を良くす
○紫蘇子 辛温氣を下し痰を去
咳をやめ喘を定め寒を除き腸を
潤し五臓を消を塵を去そのまゝ
用ゆ火を忌○秦艽 微寒風を去
湿を除き血を養ひ筋を舒ぶ節
乃風痛を治し骨蒸を治す米泔
洗ひ去刻み酒を洒き乾し少し
あぶる
㊁延胡索 辛温心腹の痛を治し
血を破り經を通じ血中の氣を行
血暈血崩を治そのまゝ或は刻み
炒ゝ醋ぐる
㊂白朮 甘温脾を健にし胃を補
ひ穀を消し食を進め湿を除き瀉
とゝめ痰痞を消ト胎を安ず製
法若木と同ト
○白芷 辛温風とさう眼涙の出る
に歯の痛小陽明の頭痛を治し
金瘡乳癰痛とゝめ膿を排婦人の
血風血暈を治を水にひたしよく洗
ひ刻乾を火を忌○白豆蔻 辛温
霍乱を治し冷積を消し胸をひる
くし食を進め嘔吐反胃を治を皮
と去袋に入押揉で障子とさう微
炒る○拱棟子 辛温氣を下し滞を

破つ穀を消し・瘡瘍を癒て衛ぐ後重
を治そること神の如し皮蒂をさり
剉む火を忌○白附子 辛温面の
諸病を治し風痰をさり血痺風瘡
中風の諸證を治を炮して剉を
用ゆ○白姜蚕 辛鹹中風の諸証
を治し諸瘡の瘢痕を去癮疹諸
瘡を治し小児驚癇を治を米泔
に浸し洗ひ蚤を去剉を少あぶる

㊆木通 甘平五淋を通じ腫脹を
除き竅を利し経を通じ熱を泄
を皮を刮つ節を去剉をあぶる
○木瓜 酸温一切の筋病を治し湿
痺脚氣を療じ霍乱轉筋足膝力
なきを治を枝と攘とさり剉を陰

銕を忌○木香 辛温脾を健よく
胃を和し肝を行し滞氣を散じ
鬱を開き食を消し瀉痢をとゞめ
諸氣を調へ虫を殺し邪を辟土氣
とさり剉て火を忌○没薬 温金瘡
打損諸瘡を治し瘀血をさんじ
痛をとゞむ交つるものを去そのほく
剉て火でいむ
㊆川芎 辛温血を養ひ経を調へ頭
痛面風を治し鬱を開き血中の氣
と行を芦頭をさり剉て熱湯に浸
しかきたてゝ洗ふこと二三度して
日に干用ゆ火をいむ唐いそのまゝ剉
りも○石膏 大寒胃火を瀉し
消渇を治し肌を解し三焦の熱

皮虚れ熱燥て治し陽明の頭痛を
治を火みてようく煆甘草水にて水
飛してかるく用ゆ○前胡 微寒
嗽て寧し痰て
風邪て散ず土氣て洗ひ芦頭て去
きさむ火て忌○升麻 微寒胃て清
く毒て解し齒の痛口中の瘡て療
ト陽明の風邪て散し下腊の氣
て升提げ及び痲疹て治て米泔
に浸し粗皮と毛ことを去剉む火
て忌○川烏頭 辛熱風の骨に入
み冷を除き積聚て破て腹臍の
寒痛て治し風痺血痺半身遂
へざるを治て甘草に一夜ひたし
炮して剉こと

○蟬退 鹹し寒頭風眩暈て治し
皮膚の風熱て除き瘖嗌乃痒て
治し驚熱て除く米泔の湯ふ
浸し土氣とよく洗ひのら足
翅とさう剉こと

○全蝎 辛平風痰て退け口眼喎
斜中風の諸證小兒の驚癇搐て
治す水にく洗ひ足と尾とて去
剉こと

○六陳 狼毒 呉茱萸 半夏
陳皮 枳實 麻黄 此六色を
陳きて用べし

○八新 薄荷 款冬花 桃花
槐花 澤蘭 赤小豆 菊花
紫蘇 此八色の新きて用ゆべし

▲含藥秤量之例

一分とハ十釐也○一字とハ二分五厘也○一銖とハ四分の一ノ○一錢とハ十分の一ノ○一兩とハ十錢ノ○一分とハ二錢五分也○一斤ハ百六十目也○方寸匕とハ一寸四方のヒノヘラくひ也○刀圭とハ方寸匕の十分一ノ○一撮とハ四刀圭也○十勺ハ一合也○千合ハ一升ノ○古方の一升ハ今の一合半ノ九藥に細末の如とハ胡麻の大さ〳〵ハ胡麻三粒の大さ也○胡豆の大さとハ今の豌豆也○梧桐子ハ豆二粒よりあるく○彈丸の大さとハ梧子四十粒ふくむ也○蜜一斤ハ七合有凍く煉と去て十二兩半にあり

○

醫道日用記

○藥方付病論脈論

中風

上古ハ外邪の風を主こして云河間ハ火乃亢るといふくらひの東垣ハ氣虛と主と丹溪ハ濕を主とん然もごごを元よう内く虛をろこころのるに依て此諸證となる也

○脈　浮遲ハ吉也急疾ハ惡ノ

八味順氣散中風を治るふハ先此藥と服して其氣とゆるゞヒ次に風と治をるゝ藥を用ゆ

陳皮　白木　茯苓　青皮
烏藥　白芷　人參各二分　甘草二分

右煎ノ服を○氣と順ノ風と

去の神也真氣虛する者ふ用ゐ
烏藥順氣散 中風遍身痺を言
語蹇ぢづり口眼ゆがみ喉の中氣
ぉ〳〵〳〵して痰ある物のと治を
麻黄一ゑ烏藥 陳皮 各二匁 白姜蚕五分
川芎 白芷 枳殻 桔梗 各一匁
乾姜 甘草 各五分 右十味姜棗三
と入煎ず ○もし邪氣實ー初發
乃病人氣滿ぞ風ある者ゐ用べ
防風通聖散 中風一切の風熱ふさ
ぐ盛こもりて大便結ー小便赤
く澁ぢ頭面よ ゝ瘡と生ー譫妄驚
狂三焦こもる實をるものと治を
防風 川芎 當歸 芍藥 大黄
芒硝 連翹 薄荷 麻黄 荊芥
白朮 山梔子 各五分 石膏 桔梗
黄芩 各一匁 滑石三匁 甘艸五分
右十七味生姜を入煎を二方うは
芒硝とさう牛膝人參半夏と加ふ
積熱瘡腫氣血實ー盛いもそ大
滿大實のりのゐ用ゆべ胃乃氣
虛をるにあ〳〵ざうず
小續命湯 中風半身のなりぐ口眼
ゆがぐこ言語ぢづり身痺ぢ筋挛ぢ
骨節煩ぢ痛むて治を
麻黄 防己 桂枝 黄芩 防風 一匁
芍藥 川芎 人參 各五分 附子 甘草 各五分
右十一味姜棗を入煎ぢ一方ふ當
皈石膏を加ふ中風の初發汗ぁく
邪氣表實ぬりのと治を類中乃

りのごとく用ゆべし
大秦艽湯 中風手足かるへからず
まて言語しかるへざると治す此
くをもうと用て血と養ふことにより筋
おのづから栄ふ 秦艽 羌活 獨活
防風 白芷 白朮 石膏 黄芩
芍藥 生地黄 熟地黄 各二匁 茯苓一匁
川芎 細辛 甘艸 各五分 右十五味
煎ど天陰つ雨ふらば生姜を入て
煎ず一方に當皈と加ふ○外よ六
經の證とあらざるとなく只血弱
して筋を養ふことを能いざる者を
治を血とやしなひ氣を通ずるの
方なり
加減除湿湯 右半身遂ひ手足
る〻筋骨のくるしむと治を 白朮二匁
茯苓 當皈 陳皮 半夏 赤芍薬
葛根 黄連 黄芩 烏薬 枳殻
羌活 各一匁 白芷 九分 人参 川芎
桔梗 防風 甘草 各八分 右十八味
姜と入煎ど○湿にそんして痰と生
ド半身遂ひ手足のゆる証とな
を以治を
加減潤燥湯 左半身遂ひ手足
る〻噎つ欠ー眼口ゆがみ目暈痰
火さうんに筋骨時々いたみ心悸
そると治す 芍藥 二匁 當皈 一匁二分
川芎 白朮 茯苓 半夏 天南星
天麻 各一匁 陳皮 塩して炒る 生地黄 熟地黄
酸棗仁 黄芩 牛膝 各八分 羌活

桃仁 防風 肉桂 各六分 黄柏三分
紅花 甘艸 各四分 右二十一味煎ト
竹瀝 姜汁 ヲ入服ヲ○血虚シ痰
ヲ治ス○火ヲ挾ソテ此病ヲ等者
ハ宜シク左右ノ字ニ拘ラス
療治ヲ誤ルコトナカレ
勻氣散 腰腿疼ミ手足伸屈ヲ
ルコトヲ得ズ半身遂ニ眼口
ゆうむヲ治ヲ風氣中風ノ
風藥ヲ用ヒテ愈サルヽ此方ヲ用
ヒテ即ち効ある也
天麻 各一匁 人參 白朮 四匁 烏茉
青皮 甘草 各五分 沉香 白芷
各三分 右十味姜棗ヲ入煎ズ 紫蘇 木瓜
氣ノ道ヲ調ヘ順ヒノ劑也

○
補中益氣湯 中風ノ證内ヨリ傷
らるゝものゝ外ヨリ來ル風邪ヲ
あしゝ労役ヲスルヲ甚シクそ
真氣ヲ耗シ此證ヲなすなり
○方ハ内傷門ヨアリ左右ノ
ふハ防風羌活天麻半夏南星
木香ヲ加ヘ○言語ヲヘ澁ルハ石
菖蒲竹瀝ヲ加ヘ○眼口ゆがむハ
姜製ノ黄連羌活防風荊芥竹
瀝姜汁ヲ加ヘ

傷寒附傷風感冒

冬ニ寒氣ニ傷られて即ち病ト
正傷寒ニテ寒肌肉ノ間ニかゝリ
伏シテ春ニ至テ發スル者ヲ温病ト

夏に至て変じて熱病こゝの汗
なきを傷寒こゝ汗ある仮陽風
こん感冒は風寒に感ずること乃
浅きをいへり常にがいきこといひ
風と引ふくつゝ皆感冒なり
○脉熱盛こゝして脉浮大のも
古かう沉小のも凹一已ゐ汗して
脉沉小のも吉浮大のも凹なり
香蘇散　四時乃風邪に感ト冒
さん頭痛發熱さむけのうと治ひ
紫蘇　香附子　各二　陳皮　甘草　五分
右四味生姜葱白と入煎ど○此方は
六經の證あろひんど風邪ゐ感をる
こゝの淺きを治す氣と順をる乃
ちひ風邪の經きの治ざこゝに解

ゐ氣之一く血虚そるにも宜ろび
○参蘇飲　四時の感冒熱こ發一頭
痛こ咳嗽一声重く痰あるりのを
治と労倦の人のうひも妊婦の感冒
ろゐこれゐ宜し　陳皮　茯苓　各一
紫蘇　半夏　桔梗　前胡　葛根　各一
枳殻　九分　甘艸　五分　人参　木香　各五分
右十一味姜棗を入煎そつ感冒乃
發熱咳嗽を治そる妙劑也ちろ
ごこを肺の虚咳労嗽そゞに此藥
と頼で人乃壽を縮ることなり
○藿香正氣散　四時正一かろざる内
氣に感ど或ひ内傷に外感と挟こ
腹いたこ吐利頭痛こ惡寒こ發熱
あるこ汗なひこを治こ　藿香　三匁

陳皮　白朮　厚朴　半夏　桔梗
各二匁　大腹皮　紫蘇
各一匁　甘艸　五分　右十一味姜棗を
入煎ぜ○腹痛吐瀉風寒暑湿正
邪の感じ〳〵ると治をる
要方ゆう正傷寒と治をる某よい非
人参敗毒散　四時乃傷寒瘟疫
寒おほく熱ほう項強て身疼
と治を羌活　獨活　前胡　柴胡
枳殻　川芎　桔梗　茯苓　人参
各一匁　甘艸　五分　右十味姜を入
煎ぜ○薄荷と少〳〵加へ○熱
ほうく身疼のと治する妙方
ゆう又天行時疫と治を表虚氣
弱きものゝ如きは用ゆべからず

○

十神湯　瘟疫妄に行ると或ハ風寒
乃感冒熱ゆう寒と憎ミ咳嗽頭
痛身痛ミ汗ゆきのと治を
麻黄　葛根　升麻　川芎　赤芍薬
香附子　紫蘇　陳皮　白芷　各等分　甘草
少　右十味姜と入煎ぜ○感冒表
實ー汗なきのと治を傷寒太
陽の証ゆ〳〵ごとくと与ることを
八解散　脾胃虚弱ーて飲食とて
まず或ハ食消ぜ及び風寒の外
邪と挟こなるとを治を
陳皮　半夏　厚朴　藿香　茯苓
各一匁　甘草　二分　右八味姜棗を入
煎ぜ○外邪ゝ感じ食と挟こなる
と治を脾胃の虚弱重く外邪軽き

○

とゝのへ補中益氣湯を以て加減をべし
行氣香蘇散 内生冷の厚味の
傷らるゝ外風寒温氣に感ゝ惡寒
發熱そゝ脹いらゝと治を 紫蘇
陳皮 烏茎 羌活 香附子 各一匁
川芎 麻黄 枳殻 各七分 甘草二分
右九味姜を入煎を○もつて一外風
寒に感ゝ内生冷を傷らるゝを治
そる要方なり
ゆゑに斟酌すべし
九味羌活湯 春乃中比より秋ま
での間ふおいて傷寒傷風と治
そるゝに此茎と用ゆ冬も又用べ
羌活 蒼木 各二錢 防風 川芎 各一錢半 白
芷 生芐 黄芩 各一錢半 細辛三分 甘草

○

三ノ分

右生姜束を入煎ぜ○汗
なくゝ紫蘇を合すゝ汗あらべ桂枝
芍茎と加よ○太陽の証ふい蒼本を
加へ羌活を倍を○陽明の証ふい升
麻葛根と加へ白芷を倍す○少陽
乃証よゝ柴胡半夏と加へ厚朴枳實を
倍を○太陰の証ふい厚朴甘草を倍
くゝ蒼木を倍す○少陰の証ふい
桔梗知母黄柏と加よ○此茎四時
乃傷寒瘟癘を治をるゝ穏當也
とゝゝ陰虚ゝ氣弱きゝのふい必
ず禁ずべし
外陽發表湯 冬乃月れ正傷寒頭
痛ゝ發熱惡寒身いたゝ項強ゝ
脉浮緊にして汗るゝのを治す

此太陽經の証なり　麻黄　杏仁
桂枝　甘艸　川芎　白芷　羌活
防風　升麻　右九味生姜棗ヲ入
煎ゼ汗いづまべ茉ヲ止ム○冬月即
病乃傷寒汗ルヽものヲ治ス春
夏の月及び陽虚れ者ヨ用ベからず
疎邪實表湯　冬乃月の正傷風頭
疼ミ發熱風ト惡ミ項強リ脉
浮緩ニシテ汗出ルものヲ治ヲ是
大陽の經乃傷風也　桂枝　芍茉
甘艸　防風　川芎　羌活　白朮
右七味姜棗ヲ入煎ゼ○汗止ざる
ハ前ノ春夏の月及び
脉浮緊ニシテ發熱シ汗ルき者

升麻葛根湯　傷寒自痛鼻乾く
眠らず汗ふくして惡寒發熱ヲ
ルハ陽明經の證ヲシテ惡寒發熱ヲ
主ル又風寒乃感冒口渇リの及
び瘡疹已ヨ發シいまざ發せび
疑似ハしくヲ宜シ　葛根
三ヌ　升麻　芍藥　甘草　各二ヌ
右四味姜ヲ入煎ゼ○これ陽明經發
散の藥ヲリ太陽の證ヒまヲ用
ゆレバ邪ヲ引ヲくシ裏ヘ入ル賊ヲ引テ
家ヲ破ルの誡ありヲ

不換金正氣散　四時乃傷寒瘟疫
及び深山山嵐の氣海邊の瘴氣
ヲ感ジ寒熱往來霍乱吐瀉或ヲ
遠方ヨ出水のかるヲ中ルヲ治ス

蒼朮 厚朴 陳皮 半夏 藿香
各二匁 甘草 五分 右六味姜棗を入
煎ぜ○此脾胃の濕邪をさる要方
なり旅の途にて邪氣に感ずる
事多へ此方を主とし加減み
ようべし併なべし氣血の虚弱るへ
此例とあらす

小柴胡湯 傷寒四五日寒熱往
來し胸脇痞滿心煩を喜で呕し
頭疼耳聾ぞこれて少陽經の証
こいへ邪氣半ば表ふあり半ば裏よ
あり此方こしと主とし雑病乃
肝膽に屬をるものを亦こしと
治す 柴胡 二匁半 黄芩 二匁
半夏 各八分 甘草 五分 右五

味姜棗を入煎ぜ脾胃の氣虚せ
ざるのにに人參を去○こし少陽
經半表半裏の主方ゆへ表裏陰
陽と分ぜ皆此方を以て傷寒を治
を大なる誤つて罪とのがるゝ所
陽氣虚寒れりのに与まべ立ごこ
ろにて死をべし慎まざるべんや

大柴胡湯 傷寒表證いまざ除り
ざるに裏証又急にして寒熱往來
脇いつみ口苦く大便ろく通ざざ
るを治を 柴胡 四匁 黄芩 芍薬 各
二匁半 半夏 二匁 枳實 一匁半 大黄 二匁
右六味生姜棗を入煎ぜ大便通
ぜれべ茶を止む○此方へ小柴胡
湯の證ふして大便燥實し通せ

さほうのを治を大便順に通ずる者ようやく用ゆべうしず

小承氣湯 傷寒腹脹滿時を定て熱を生じ狂言し喘すると治す

大黄七ヌ 厚朴 枳實各三ヌ半 右三味煎ぜ○凡下すべきの證そなわるといえども卒爾に大承氣湯を用ゆべうしず先小承氣湯と用ひて病人轉失氣をるゞ或ひ鞕き屎來て後來らざるりの内か燥き屎ありその時よ大承氣湯と用ひて裏を攻べし若又小承氣湯と用ひて轉失氣ぜず或ひは初鞕き屎來て後よ溏りのを裏熱いまだ甚しからざる也大承氣湯を用ゆべうしず

○

大承氣湯 傷寒陽邪裡よ入痞滿燥き實し堅き全く備るりの又少陰經の病を兼て發熱し脉沉實るりのを治す

大黄七ヌ 厚朴 枳實各一ヌ 芒硝半合

右四味先枳實厚朴の二味を煎じ滓を去大黄を入再び煎じ滓を去芒硝を入一二沸煎じて服す○痞滿燥實堅の證全く備るりのを用ゆべし若ろぐ用ゆる方ふおおびふるれ後熱をうぞうび諸の積熱實火を治を黄連一ヌ 黄芩 黄栢 山梔子各二ヌ 右四味煎ず○汗吐下

乃後實火ヨ屬ヲル者ヲ治ヲト虛
火カハ一味トシテ胃ヲ傷テ惡寒セ
○白虎湯　傷寒傳テ裏ニ入悪寒セ
ずシテ反テ熱ヲ汗アルヿ
渴ヲ」脉大カシテ長アルノヿ
治ス又傷寒汗吐下ノ後心胸煩
悶渴シテ水ヲ飲マヿヲ欲シ脉
洪大ナルノヿヲ治ヲ　石膏二ヌ六分
甘草四分知母一ヌ二分　粳米一撮右四
味煎ヲ人參白虎湯トシテ老人
小児及び虛弱ナルノヿアルヿ
人參ヲ加ヘテよシ其証ヲ考ヘ
て用ユベシ脉虛ヲルノヿ
うるヿとなり」

補中益氣湯　傷寒内傷ヲ挾ヿ

ある者ヲ治ヲ○方ハ内傷門ノ
見ヨシ○大陽ノ証ヨリ羌活藁本
桂枝ヲ加フ○陽明ノ証ヨリ葛根ヲ
加ヘ升麻ヲ倍○少陽ノ証ヨリ黄芩
半夏川芎ヲ加ヘ柴胡ヲ倍○太陰ノ
証ハ枳實厚朴ヲ加フ○少陰乃
證ヨリ生甘草桔梗ヲ加フ○厥陰
乃證ヨリ川芎ヲ加フ○変証發斑ヨ
リ葛根玄參ヲ加ヘ升麻ヲ倍○痰ヲ
挾ヿアルニハ半夏ヲ加ヘ竹瀝姜汁
ヲ入ル

○九傷寒邪氣已ヨ去ヲヨリ正氣
ノ虛ヲルノヿヲ也八解散六
君子湯異功散補中益氣湯八物
湯十全大補湯ノ類ヒ其証ヨ從テ

用ひ元氣を保ち養ふべし○早く酒を飲べからず○愈て後百日鯉鮒と食をくらふべからず

○中寒

夫寒氣の人を中るに陽氣の虛するにより寒邪虛に乘じて入る夏冬のけぢめなく皮膚より卒ふ臟腑に入る其證中風に相似たり齒緊く手足動ざるを異とすること○脉緊濇○寸尺ともに上下皆寒と受るなり

五積散 寒邪を感ト冒されば頭痛み身疼み項背拘攣り急り惡寒吐瀉腹痛を治し寒濕を治るなり

蒼朮 桔梗 厚朴 當歸 川芎 陳皮 白芷 半夏 枳殼 白芍藥 茯苓 各肉桂 乾姜 各五 麻黃 甘草 三分 右十五味姜葱白を入煎ず○寒氣少陰腎を犯し口燥き舌動うがく此方これを主る○冬月寒氣甚しき時風寒に感冒なるに此方を用ゆ○産後の感冒も麻黃葱白を去てこれもちゆ

理中湯 寒邪を中て口噤て語言こゑのがく手足強て直こと中脘いたみ自利して渴せず或ハ咳て嗌乾て治す

乾姜 炒 甘草 炙 各二 人參 白朮 右四味等分

と入煎ず○寒甚き者ハ附子
を加へ附子理中湯と名つく○寒太
陰を犯し腹滿ち時よいてこと吐利
して渇せざるを治とる妙方なり
虚せざる者ハ藿香正氣散ハ乾
姜を加へて用ゆ併なが〳〵熱内ゐ
ありて咽渇き水と飲りのにハ用
ゆべからず

四逆湯　即病太陰の傷寒自利
して渇せず及び寒三陰よ中を
脉沉細よりて凝身痛こ手足冷
上る者と治を
甘艸炙　六分　乾姜五分　附子生一枚
右三味煎ゑ○利止て
脉出ざんバ人参を加へ○九此證
にして此方を用ひんとおもはゞ

先理中湯と用ゆべし寒甚ハ陰經に中身冷
附子を加へ又已こと得ざんバ此方
を用ゆべし手足燥まらぬまこハ茱萸
止む辛甘大熱の劑輕々〳〵用ゆ
べき方にあらず

回陽救急湯　寒陰經に中身冷
手足冷て腹痛こ吐瀉し脉伏し
て無ものと治を

茯苓　陳皮　半夏　乾姜　肉桂　人參　白朮
附子　五味子　甘艸炙各　右十
味姜を入煎ゑ○氣海關元乃一
穴こ於て灸をべし尤も卒して
藥なき時こと捷法し元陽
虚する者と治を田艾穀を消し
實熱のものハ用ゆるこなかれ

○中暑付霍亂

暑邪の氣先心包絡に着肺を傷て中暑の証となる中熱中暑れうらあり靜にして得ると中暑と陰証也重て是を得る又暑湿の氣に中られ或中熱と陽証也吐利瀉つゝ手足攣乱舌ひきつゝと霍乱といへ吐せず瀉せず悶乱をる乾霍乱と治しがたし○脈虚みて微弱或は浮大にして散或は隠て見へず身熱をる者を傷暑といつ五苓散 暑氣にて傷られ身熱煩渇き心慌惚と小便赤く澁る大便瀉りのと治す 澤瀉一名 猪苓 同白朮 赤茯苓各一名 肉桂 五分

右五味散藥にして清米飲にて服をる也多く湯と飲で汗を出し或は姜棗と入煎じ○小便よく利をるりの或は内津液を亡して小便利せざるりの并に用ゆべし

十味香薷飲 暑氣内に伏し身倦き神くく頭重く吐利をると治す 黄芪 人參 白朮 茯苓 陳皮 木瓜各五分 香薷一錢半 扁豆 甘草各三分 右煎ず○こは陽氣と散ず直陰を道導の劑也元氣虚ー房と犯とこの過るりのよろ用ゆべからず

清暑益氣湯 長夏の溫熱大ゐに行ゐれ人ことに感じて手足困

倦心氣短く動作ゐ懶く身熱ー
氣高ぶり心煩ろと治を 人參
白朮 陳皮 神麯 澤瀉 各五分
黃芪 蒼朮 各一升 麻一丸 麥門冬
當歸 青皮 甘草 各三分 五味子九粒
黃栢 酒 三分 右十五味煎ぜ
○氣虛の人暑に中られ食と挾
こ濕と兼さると治と若食と濕と
と兼どんべ補中益氣湯と升麻
柴胡と去ゐて五味子麥門冬と黃栢と
くゐくへて用ゆべー
○生脈散 暑氣に中て暴し目眩
息絕んこすると治を 麥門冬
人參 五味子 各 十五粒 右三味煎ず
○神久ー氣虛ー脚弱き者

○

ゐ黃栢と火ー加へて用ゐ或ゐ諸
方においてこれを加へべー
○藿香正氣散 暑氣にるてざー
時納凉過ーて外と傷ゐ或ゐ寒入
ゐる間ゐ風と感ー生の冷ゐる物
と食ーて內をやぶり頭痛ゐ發
熱惡寒ゐ吐瀉ー腹痛む者と治す
○方ハ傷寒ハ吐瀉ゐ內生冷ゐ傷
られ外風寒に感ーて霍亂とゐる
ゐの藿香正氣散これと主ゐる熱
あるゐのハ姜ゐて製ゐる黃連を加
ふ○寒甚ーきゐのハ乾姜と加ふ○
此方ハ陰証の者と治す日中暑ふ
傷られ內外皆熱とゐるゐのにハ
ゐらやべーずず

○中濕

夫濕ㇾ内外の二ありㇾ里く濕ある
地ㇾ居或い道中において風雨ㇾ
犯さゝれ又い汗出て衣ㇾ濕ㇾる
と其ㇾ侭ㇾて着て濕ㇾ受ㇾこゝ皆
外ㇾら濕ㇾ中ㇾらしむる也又酒漿水
ぞくと多く飲或い瓜菓ㇾ類ㇾ食
して濕証ㇾとるこゝ皆内ㇾら
濕ㇾ傷らるㇾ也○脉浮ㇾして緩へ
濕表ㇾあり沉ふㇾして緩へ濕裏ㇾ
あり濡緩ㇾ濕ㇾ傷らるㇾ一身悉
く痛ㇾ治ㇾ

羌活勝濕湯

羌活 獨活各一
藁本 防風 川芎各五 蔓荊子三分
甘艸五分右七味姜ㇾ入煎ず○風

濕ㇾ表散どるらば淡ㇾ以てㇾ滲ㇾとべし此方ㇾ治
ㇾる所ㇾ獨活寄生湯腎氣虛しㇾるㇾ
濕地ㇾ臥腰せるㇾ拘急り筋骨痛
ㇾ或い半身遂ㇾ冷痺るゝものㇾ
治ㇾ

獨活三兩 牛膝 杜仲 秦艽
細辛 肉桂 川芎 芍藥 桑寄生
茯苓 人參 當歸 防風 熟地黃
各二兩 甘草 同右十五味姜ㇾ入煎ず
空心ㇾ服す○若桑寄生なくい續
斷ㇾ替べし○風濕腎ㇾ傷て腰痛
ㇾ治るㇾ要方なり

不換金正氣散 內外濕ㇾ中ㇾ惡
寒發熱吐瀉腹痛ㇾ治す○方

○傷寒ニ見ヘシ
○五苓散 渇シ煩シ傷リシ身重ク小便利セズ口渇リノヲ治ス○身痛ミ羌活ヲ加ヘ○方ハ中暑ニ見ヘシ

○火証

外邪經絡ニ入リ熱ト臟腑ニ積ルヲ實火トス一ニ真陰虚シテ相火ノ動ズルヲ虚火トス又飲食情欲ニ因テ氣盛ンニシテ火ノ似タル者アリ其証ヲ明ラカニシテ治ヲ誤ラザルヲ要ス○脈浮ニシテ洪數力アリ沉ニシテ實大アルヲ實火トス浮ニシテ無力沉ニシテ實大ナラザルヲ虚火トス○面赤ク舌ニ潤ヲ生ジ煩渇小便赤ク大便結ストキハ治ヲ誤ル

○連翹 黄芩 山梔子各一錢 薄荷 桔梗各八分 大黄一錢半 甘草八分 芒硝一錢 右八味煎ジ或ハ散藥ニシテ用ユ○一方ニ黄栢ヲ加ヘ○爵熱實火ヲ治スル神方ナリ但シ芒硝ヲ去ク設ケヲ加ヘテノ穏當ナルヘシ

○升陽散火湯 冷ヤス物ヲ多ク食シ陽氣伸ビ一身悉ク熱シ肌燥ガワシクカユキヲ治ス 柴胡三錢 羌活 人參 升麻 葛根 獨活 白芍各五錢 防風二錢半 生甘艸 炙甘草各一錢 右十味姜ト入前ニ同ジ○陽氣の鬱火ト散ズル要方ナリ但シ多ク用ユベシ

真陰を耗し燥熱を益なり

清上防風湯　上焦の火を清し頭面の瘡を生ず風熱あつて腫痛を治す

防風一　薄荷　山梔子　黄連　枳殻　荊芥各　連翹　白芷　桔梗各　川芎　甘草三分　黄芩各七分

右十二味煎ず食後に服す○上焦の熱をとるのを治とし虚火の衝上るのを治とし虚火の實火內外焦の鬱熱頭面の諸証實火の屬をとるのを治とし虚火の衝上るのを治とし如きこれを用ゆ

黄連解毒湯　三焦の實火內外寒に見へあり熱をとるの治とす○方は諸虚門にみあり

六味地黄丸　腎水衰へ相火乃動くを治とす○方は諸虚門にみあり

補中益氣湯　飲食勞倦の虚熱を治とす○方は內傷に見へあり

飲食勞倦の因て內脾胃の氣を傷つて氣たらざり身熱し手足怠惰の諸証となすなり○脉浮大ふして力なく或は氣口の脉人迎より大なるは內傷なり

補中益氣湯　形神倦つかれ飲食に傷られ身熱し手足怠り頭痛汗出でて力なきを治とす　甘草炙　人參　陳皮　白朮　當歸各一錢　黄芪蜜炙各二錢　柴胡　升麻各三分　右八味

○

姜棗と入煎ず○諸病陽氣下ゟ陷て升せ提ぐるの神方又一切の病の後調へ理るの妙劑也外感ゟ氣血虛弱ゟるゟのゟ加減ゟく

用ゆべゟ

升陽補氣湯　飲食時ゟ關ず飢飽勞役胃の氣たゟ發ず手足ざるく食後ゟ昏悶ゟ手足のゟゟに熱ある治す

厚朴 五分　升麻　羌活　獨活　防風　白芍　澤瀉各一錢　生艾 一ゟ五分　甘艸 一錢　柴胡 二ゟ五分

右十味姜棗ゟ入煎ず○脾濕の氣下に溜ゟて伸發ゟ能ゟず〳〵ゟて困倦煩熱するの諸証ゟゟす風藥ゟ元氣ゟ損ど病ゟ益ゞ

ゆゟゟ

○

七味白木散　脾胃ゟ氣和ゟず津液ゟゟび肌熱ゟ或ゟ吐瀉ゟ口渴ゟと治ゟ

人參　白朮　茯苓各六分　葛根一錢　藿香　木香　甘草炙各 右煎ゞ錢氏ゞ白木散ゟゟ是ゟのゟ

○小兒肌熱ゟ吐瀉ゟるゟのゟ治ゟ大人ゟも亦ゟれを用ゆ氣實ゟ氣滯ゟて實火ゟ屬ゟる者ゟゟ与ふべゟゟず

參苓白朮散　脾胃虛ゟて飲食進ゟず嘔吐瀉利ゟると治す人參　白朮　茯苓　山藥　白扁豆各一　桔梗　蓮肉　縮砂　薏苡仁各七分　甘草 五分

右十味煎ど○此方脾胃虛弱ゟ人

食進まず常に瀉やすしと治す又
大病の後まこれと用て脾胃を保養
○傷食 付痞滿
飲食飽まざるを消〳〵
腸胃こゝろよからず傷られ腹いつ
吐瀉乃諸証となる」食積ざるも又腹
腹飽悶て舒ざるを痞滿とするなり也○
脉氣口の脉緊盛ありて傷食〳〵
食消ざるに浮滑ありて疾
平胃散 脾胃化ざれば飲食進まず
或は食滯となるものと治す 蒼朮
二錢 厚朴 一錢 陳皮 一錢 甘草 八分 右四
味姜棗と入煎ず○宿食消ざる
ふへ神麹麥芽を加へ加味平胃散
といふ○世乃人平れ字に誤られて

常に服とる者あり大なる非なり
此方は宿食脾濕の有餘を平げ
除の藥にて胃を平うふ補ふ
とゝろなきゆゑず
香砂平胃散 宿食消ざれば飲食
れのにく〳〵倍とると治をとられ脾胃
乃傷ふり香附子 蒼朮 陳皮 各
枳殼 藿香 各
甘草 各五分 右八味姜と入煎ず 縮砂 木香
○氣實〳〵る人の宿食消ざる
を治を此氣を破るの劑ふ〳〵て胃
虛久病れりの〳〵服をべき茶に非ず
萓荀花解醒湯 大ふ酒と飲呕吐〳〵
心煩ま乱ま胸塞ま不食〳〵小
便利ざるを治を 葛花 砂仁

白豆蔻各五　茯苓　陳皮　猪苓　人
參各二錢半白朮　神麯　澤瀉　乾生
姜各二錢　青皮　木香　各三分　右十三
味煎ゼ○治ス濕熱ヲ上下ヨリ
分ち消シテ酒毒ヲ解ス此茶ヲ
特ミテ日日酒ヲ過シテ天年ヲ
損ゼザルヨシトナリ

○藿香正氣散　食傷寒熱頭痛吐
瀉腹痛ヲ治ス○方ハ傷寒ニアリ
六君子湯　脾胃弱キ人ノ食傷ヲ
治スルニ香附子縮砂藿香ヲ加ヘ
香砂六君子湯トス○本方ハ諸
虚ニ見ヘ

○泄瀉ゼザルヲ
風寒暑濕ニヨリテ人トシテ泄

瀉ゼシムザルヲ飲食ヲ過シ脾
胃ヲ傷ツケテ此病ヲ生ズ○脈浮ト
風ニ遅ト寒ト濇ト暑ニ洪ト傷ラル
ノ脈微濕ハ緩ト大抵沉細ハ
治シ易シ洪大ナルハ治シ難シ

○胃苓湯　暑濕ヲ中ツテ或ハ食ヲ傷
ラレテ泄瀉スル者ヲ治ス蒼朮
厚朴　陳皮　猪苓　澤瀉　芍藥
白朮　茯苓　各三錢　甘艸　各五分　肉桂
右十味姜棗ヲ入煎ズ○水ヲ
瀉スルニハ滑石ヲ加ヘ○脾ト燥ト
濕ト滲スノ劑ナリ氣虛津液乾
キテ小便少ク又ハ
者ニ用ユベカラズ
理中湯　寒瀉ノ証腹痛瀉止ト

なく色青く脈沉澁なる者を治す
人參 白朮 乾姜各一錢 肉桂五分 甘艸
五分 陳皮七分 藿香 茯苓 良姜各七分
烏梅一个 右十味姜棗を入煎ど
○此方尤も脈証とよく察して
用ゆべし濕熱の瀉よき與ふべからず
怒ち危きに至る慎しべし
胃風湯 風冷虛に乘じて腸胃に
に客て泄瀉す腸鳴腹いたく濕
毒下すこと黑豆の汁の如く或ら
瘀血膿血と下すことを治す
人參 白朮 茯苓 當歸 川芎
肉桂等分 右七味粟一撮を入煎す
○此方脈弦緩にして浮るもの
是れ主る腸胃に風証にて食

積實熱のものゝみに用ゆべからず
參苓白朮散 脾胃虛をるゝを治す
○產後の泄瀉久しきこれあり
補中益氣湯 泄瀉此方を用ひて
元氣かゝやく虛を此方共に内傷に見へ
補ふべし ○右の二方共に痢病にも用ゆべし
○痢病
濕熱食積に因て痢病こゝう裏
急後重き證とみえ赤きの血が屬
ちく小腸ようの來つて白きの氣に屬
して大腸ようの來る古へより腸澼と
いひ滯下こゝいへ皆今の痢病なり
○脈微小に宜し浮洪に宜しからず
滑大に吉ふして弦急に凶なり
行和芍藥湯 赤痢白痢初て起

頻ヨ圊ニゆきて重裏急忍又残ゆうめて
少〻ー腹痛ヲ治ス芍薬二銭當皈
黄連苗芩各一銭大黄七分梹榔子
木香肉桂甘草各五分右九味煎
ー空心ヨ服ヲ〇一方ニ大黄肉桂ヲ
去枳殻ヲ加ス〇湿熱積滞行ヲ初
發ノ者ヨ用ベシ然レドモ多ク用ユ
ルトキハ氣先虧陽氣下陥
ルノミカ積滞ハ却テ愈ざる者ヲ
調和飲痢病久ー〻ク愈ざる者ヲ
治ス芍薬三銭當皈桃仁各一銭黄
連黄芩各二銭升麻五分右七
味煎ジ〇湿熱ノマヽ除ざる者ヲ
治ス脾胃虚ー氣弱きヨリノミ
用ユルトキハ反テ死ヲ招ク

参皈芍藥湯痢去テ多ク久ー〻ク
愈ざるヲ治ス當皈二銭茯苓
芍薬白朮各一銭半砂仁七分山茱萸
皮各一銭甘草五分右烏梅燈草蓮肉ヲ
加ヘ共ヨ十二味煎ず〇痢久ー〻ク止
ざるヲ治スル要方也モシ又ぐるぐる
腸ヲ鳴シ或ヘ虚脱ヲ發スル者ハ適當也
トモニ別ヨ治ヲ設ベシ
直入養臓湯痢病久ー〻ク愈ず赤
白ノ下ナおきのれの已ニ尽ルヒハ未
尽ず虚寒ヲ脱肛ノモノヲ治ヲ人參
當皈各一銭肉桂八分木香二銭訶子一銭
甘草炙芍薬炒各二銭粟殻蜜炒三銭白朮六銭
肉豆蔻麺煨一個生姜三片棗二枚ヲ煎ず〇元氣虚
脱ー自收ルコトなくば圊ヨ行テ後

みは後重減ざる者と治と初痢
積滞の者みはかるべし用ゆべし
○倉廩散 痢病發熱退ぐべし風邪熱
毒ある者と治と又一家或は一郷皆
時行病と疫痢と主る○人參敗毒散
米と加へよると倉廩散こゝ〳〵○方ハ
傷寒に見へたり○表邪と發散する
の劑なり表証なき者ハ用べからず
補中益氣湯 痢久〳〵愈ず陽
氣下陷とる者と治す○方ハ内傷有
○瘧疾 おこり
風寒暑濕外と犯し飲食内と傷
つゝて此病とをこす凡瘧邪の営衛
ハ舍る正に少陽半表半裡ハ傷す

○脈瘧の脈ハ弦なり弦數ハ熱多
く弦遲ハ寒多し
九味清脾湯 熱多く寒少く口苦
く咽乾き大便結し小便赤く澁る
脈弦數なる者と治と 青皮 厚朴
白朮 黄芩 半夏 柴胡 茯苓 草
果各一ゟ甘草二分右姜と入煎ず○
壯ょ實したる人の熱多きものゝよ
用ゆ久〳〵用ゆまじ他の病に變
じて救ひがたくなるなり
七味清脾湯 食脾と傷るに因て
痰飲とこゝめ發して寒熱とをなすと
治と 厚朴 青皮 半夏 烏梅 良
姜各二ゟ甘草五分右姜棗
を入煎ず○飲食飢飽節をうず

○

して胃瘧となす者を治す虚弱の人あるゝ縦ひ食積停痰あるゝとも用ゆべからず

人參養胃湯　脾胃虚弱き人の瘧を發するを治す

陳皮　藿香　草果　半夏　厚朴　蒼朮　各八分　烏梅一個　甘艸少　右十味姜棗を入煎ず○外風寒に感じて瘧となすを治すと雖ども内生冷に傷らるゝ者ゝ宜からず

補中益氣湯　瘧久しく愈ざる標を治すと雖ども本方には邪實なるを少く元氣虚をる者を治す

乾姜　人參　白朮　甘艸　黄耆　當歸　各等分　右六味煎ず○壯實の者の瘧と雖ども此藥を用ゆべからず

○壯實の者の瘧と雖ども此藥を用ゆべからず

○

脾湯を挾椰子を加へ煎ず一夜露して發日の朝服をべし

○諸氣付爵証

風寒暑濕の邪外を侵し喜怒つゝしまざる悲驚の氣内を爭ひて留滯結留滯て病となす爵結の諸証となるは氣和せず爵を治す

肉桂　半夏　茯苓　各三錢半　桑白皮　青皮　大腹皮　陳皮　羌活　各二錢半　甘艸　二錢半　赤芍藥　三錢半　紫蘇二両　右十二味姜棗燈心を入煎ず○もし氣を散じ爵を宣るの劑也正氣虚をる者には用へからず

正氣天香湯　婦人諸の氣痛を治す

或ハ寒熱往來シ眩暈嘔吐等ノ証ヲ治ス　烏藥一匁半　香附子大ナル者一個　陳皮　紫蘇　乾姜各六分半　右五味姜ヲ入煎ジ○真氣イマダ虛セザル人ニ先此方ヲ用テ病ヲ導クベシ

○虛スルモノハ六鬱湯ヲ宜シカラズ

六鬱湯　氣血食痰濕熱ノ六鬱ヲ解シ火ヲ清シ痰ヲ化シ氣ヲ順ラシ胸膈ヲ開ク　陳皮一匁半夏　蒼朮　川芎各一匁半山梔子　赤茯苓　各七分　香附子二匁甘草　砂仁各五分右九味姜ヲ入煎ジ○此鬱病イマダ深カラザル者ニ設ノ氣耗血衰ヘ病已ニ入テ深キ者ニハ用ヘカラズ

沉香降氣湯　陰陽雜ヲ滯ル胸膈痞塞心腹脹痛ヲ治ス　香附子炒七分半　沉香六分　砂仁二錢半　甘艸　五分　右四味塩少ゞヲ入煎ジ○鬱ヲ解シ雜ヲ開キ氣ヲ下シ滯ヲ散ズル方ノ氣外ヲ降ヲヤズ胸膈痞塞心腹

耗ノ者ヲ治ス○方ハ健忘ノ下ニ

○痰飲

脾氣健ナラズシテ飲食ヲ消セズ津液ヲ化セズ胃中ニ滯ヲ生ジテ濕痰ヲ成シ或ハ肺燥キテ痰ヲ生ジ或ハ腎水上ニ泛ンデ痰ヲ為ス稀ナル飲ヲ痰ヒ稠ナル痰ヲ飲ト云ヒ○脈弦ニシテ沉滑ヲ兼ルヲ痰ト

二陳湯　凡諸病痰飲ある者を治す
陳皮一ヌ半夏二ヌ茯苓一ヌ甘艸五分
右四味姜七入煎ジ○脾胃乃濕
痰を治る要方也脾腎虛ー肺
燥くものゝみ用ゆること勿れ
瓜蔞枳實湯　痰結ことし吐ざる出
ど胸痛こ滿悶へ喘促等れ証を治
す　瓜蔞仁　枳實　桔梗　茯苓貝母
陳皮　黃芩　山梔子各一ヌ當皈六分砂
仁　木香各五分甘草三分右十二味姜
を入煎ト竹瀝姜汁を加ル○此方
痰結ことけざるを出ざ胸痛むを治
す然れども脈滑數めて實
なる者にあらざれバ斟酌すべし
○咳嗽

風寒暑濕乃邪外皮毛の間ふ客て
內肺氣を傷て脾濕を動じて咳
嗽となる声あると咳ことし○脈浮濇に
して痰あると嗽
參蘇飲　風寒に感冒ー頭ていた
發熱ありて咳嗽をると治ス○方ハ
傷寒に見ゆ○咳嗽久ーく愈ざる
肺氣虛ろる者ふハ用ゆるこゝろ
清肺湯　痰盛みーて咳嗽止ざる
を治す　陳皮　茯苓　桔梗　貝母
桑白皮各一ヌ　黃芩半ヌ　杏仁　天門冬
麥門冬　山梔子當皈各七　五味子
七粒　甘草二分右十二味姜棗を入
煎ジ○此方痰を消し熱をさるの
劑なり陰火衝上ていて肺を傷る者

ふへ用ゆべし〳〵ず
杏蘇散　上氣痰喘咳嗽し面目
浮腫る者を治す　紫蘇七分　杏仁
五味子大腹皮烏梅各五分　紫菀三分
桑白皮阿膠　麻黄陳皮桔梗各二
甘艸　二分右十二味姜ゑ入煎ず○肺
を調へ燥を潤をれ剤也痰多脾濕ふ
属そうのあは用ゆべし〳〵ず
寶鑑瀉白散　咳嗽して口乾き煩
熱し胸膈利せず喘促るものを
治す　桑白皮二匁　杜
地骨皮各一匁　細辛　青皮　黄芩　甘艸
各二分右九味姜を入煎ず○こゝを肺
火を瀉そるの剤也肺寒を喘るき者
あへ用ひべし〳〵

○
○鬱雜
夫鬱雜乃証い飢さるに似て飢ず
痛よ似て痛まず悶悩て寧かざる
あり胃中に痰あり火さゝれと動す
み因て此病となす○脉弦滑と胸
中に留飲あるそれ鬱雜こゝろ
おこる
消食清鬱湯　鬱雜悶へ乱れ悪心
發熱し頭痛むと治を　陳皮半夏
茯苓　神麹　川芎　麦芽　山楂子　山
查子　黄連　蒼朮　蘆薈　香附子　枳
殻各等分　甘艸　少右十四味姜ゑ入煎
ど○此宿食痰熱ゑ因て鬱雜と
なすと治を尤も實人ゑ用ゆべし
食鬱あるも虚人あへ用ゆべし〳〵

○化痰清火湯 鼈雜痰あつて火乃動をく因りのと治を陳皮 半夏 天南星 黄連 黄芩 石膏 知母 山梔子 蒼朮 白朮 芍藥各等分 甘艸 少右十二味姜を入煎す○痰火乃鼈雜胃實をる者に用○或ハ石膏知母れ二味と去○虚人或ハ胃寒のものハ用ゆるこゝろなり○二陳湯 火痰と動して鼈雜をなし或ハ眩暈するのを治す 黄連 黄芩 山梔子を加へ用也○方ハ痰飲門に入なり○痰火併せ上りて面赤きのと治を老人ハ速うふ其火を降をべうず虚人ハ盡くその痰を去るべうず

○嘔吐 附 反胃 呑酸 呃逆

胃中く寒ありて或ハ熱ありて且生冷寒硬きのとをふく声ありて物を吐出すと嘔吐ふうく脈虚細ハ吉實大ハ悪し食して後一日或ハ半日ゐて吐と反胃とい脈浮緩ハ吉沉濇ハ悪し胃寒れ氣逆して上るを呃逆と云ちやくてれ支ふる脈浮緩ハよし弦急ハあしく胃ハ宿食ありて酸味とゐすと呑酸とい脈多ハ弦ニして遅

順氣和中湯 嘔吐反胃鼈雜呑酸て滑或ハ沉

酸噫氣噎膈等の証と治を

陳皮 香附子 山梔子各々 白朮 茯

苓 半夏各キ匁 黄連 神麹各六分 枳
實五分 縮砂三分 甘草二分 右十一味
姜ヲ入煎ジ竹瀝姜汁ヲクワス○
宿食痰火乃ものヲ治ヲ血液ヒ乾
キ脾胃虚ヲルふい与ズうゝず
清劑豁痰湯 噯氣吞酸乃ら胃
中ヒ熱あり臍の上ヘ痰あつて清
水ヲ嘔吐ヲる ヲ治ヲ陳皮 半夏
茯苓 黄連 蒼朮 川芎 山梔子
縮砂 神麹 木香 香附子 山査
子各等分 甘草少右十三味姜ヲ入
煎ジ○宿食ヲ消ジ濕熱ヲ去
痰ヲ化ヲるの剤ゆえ胃寒の者
ハこれヲ禁ジ
丁香柿蒂湯 胃口冷手足冷て

呃逆ヲる症治ヲ
良姜 肉桂 丁子 柿蒂
藿香 厚朴 半夏 沉香 砂香
甘艸 半減 縮砂 陳皮 木香各
乳香 末ル入 右十四味姜ヲ
入煎ジ○胃中ヒ寒ある者ヲ治ス
大病乃後ヨ呃逆ヲる ハ危シ此症
乃及ヘ所ではあらず大ヒ胃ヲ暖ヲ
元氣ヲ補ハベシ

○諸虚付虚勞
禀賦素ヨり弱ク又寒ヲ暑ヲ労
役ヲるどのためヒ傷られ或ハ色欲
ヲ過シて皆ヨ虚乃証ヒヲるもの
恐ヲ驚ク等れ七傷ヒよりて内五
臓ヲ傷りて虚労ヒ証ヒヲる○

脉氣虛ハ細緩ミノ〻テ力ナク血
虛ハ大數ニシテ力ナキ虛勞ノ脉
ハ浮大ノ〻ヒハ弦數

○四君子湯　脾胃虛ニシテ飲食進
マズ〻〻リノ〻ト主ル

乃者此方ヲ主ル　人參　白朮
茯苓　各二分　甘艸一分　右四味ヲ粗ウ
棗ヲ入煎ジ○諸虛ヲ補ノ功加
減佐使ノ因テ至ラザルノ所ヲ
然ヲ〻ジ〻ヲ大便秘結ヨク食ヒ
或ハ外邪盛ニ實熱ニ屬スル者
ハ云ヲ〻ク用ユベカラズ

六君子湯　氣虛シテ痰アル者ノ
脾胃衰ヘテ濕アル者ヲ治ス
人參　白朮　茯苓　甘艸　半
各等分　右六味姜ト棗ヲ入
煎ジ○脾ヲ益胃ニ補ヒ痰ヲ化シ
濕ヲ去ノ妙劑ナリ痰ナキ人ニモ
亦用ユ又虛弱外感ノ此方ヲ
主ニシテ加減ヲ〻ク用ユベシ

四物湯　諸病血虛ニ屬スルヲ
治ス　當歸　熟地黃　各三錢　川芎　半
芍藥　各二錢　右四味煎ジ○凡婦人
乃調經山崩漏產後ノ諸証或ハ金
瘡血弱キ等ノ此方ヲ欠ベカラ
ズ血ヲ補ヒ調ヘ血ヲ生ジ血分ヲ導
クノ要方ナリ然ルニ上下ヨ
リ血ヲ出ヲトヽ多ク元氣大ニ虛
スル者ニハカラズ用ユベカラズ
八物湯　氣血ヲトヽモニ虛スル者ヲ

治ヒ當皈川芎芍藥人參
白朮茯苓各等分甘草
少ノ右八味姜棗ヒ入煎ジ○大病
乃後氣血虛ヒ
血氣虛弱ノ
治ヒ又氣虛ニ四君子湯ヲ用ヒ
氣周ラス血虛ニ四物湯ヲ用ヒ
ク血盈ザル者ハ共ニ此方ヲ用テ
ヨロシク治ヒ
十全大補湯氣血ヲ兼ネ虛シテ
寒ザル者下元ノ氣裏ル者ヲ治ス
當皈川芎芍藥人參黃芪
白朮茯苓甘草熟地黃各等分
肉桂少右十味姜棗ヲ入煎ス○
素ヨリ元氣弱ク或ハ飲食勞傷

ル傷ラレ或ハ心ヲ用ユルコト太ダ
過ギテ氣血ヲモニ虛シ名付
ケ狀ドウガラレ乃諸證ヲ兼ネ內ハ
眞ノ寒ニシテ外ヘ假ノ熱證ヲ
ヲヒ皆此方ヨロシク治ヒ
滋陰降火湯陰虛シテ火動キ
發熱咳嗽盜汗口乾ク等ノ証
ヲ治ヒ當皈二錢白芍二錢
天門麥門白朮各一錢
黃柏蜜炙知母各五分生苄八分
甘艸炙五分右十一味
ヲヨウガ棗ヲ入煎ズ○色慾ニ過ギ
人熱時ヲ定テ來リ盜汗咳嗽スル
ハ先ヅコレヲ用ユ病久ク脾胃
傷ヌヒヲ受元氣衰ルヲニ用ル
ヒコレヲ用ル

加味逍遥散　肝經血少き者脾胃
虚労して肝火動くのを治す
當歸　芍薬　白朮　柴胡　茯苓各
甘艸三分　牡丹皮　山梔子各六分　右
八味姜を入煎ず○牡丹皮山梔子
乃二味を去て原の逍遥散あり○
頬赤く口燥き煩熱し盗汗
咳嗽肝脾乃血虚より屬する者を
治す直元虚する者ふい用べからず
歸脾湯　心脾虚し耗て諸証とる
ことを治す○古い原の健忘にあり○虚
熱を挟まば牡丹皮山梔子を加ふ加
味逍遥散に同じ
○
獨参湯　陰虚し陽暴に絶し
脈伏るを治す　人参二支水一合

入半合に煎じ服す○或ひ姜五分を
加ふ○手足冷え元陽虚するを
附子五分を加ふ○真陽虚し脱け
んとして○太だ多き者ふい諸病ともふ
のべ獨参湯を用ゆべし口開
き手撒す時に至つては百金乃
人参を費すといへども益有べ
からず
○諸血證
諸の血証ふ多くは熱妄ふ行て
此證をなす尤を実ふ虚實あ
つてよく辨へ知べし吐血ふ胃より出
る咳よりして血を出し唾ふ血と
出すと血と口より來る咯
つて血の出るふ腎に屬し小便

血ゐ小腸し膀胱大便血ゐ大腸よ
り來る○脈諸の血證ゐるよれ
脈となるゐん洪細よ宜し浮大
ようろしかるぞず

○

犀角地黄湯　血熱姜より行あ
ろひゐ吐血鼻血下血を治を犀角
牡丹皮各二匁半　赤芍
藥一匁半　玄參黄連　黄芩各一匁

右七味煎ど○咯血ゐゐ山梔子麥
門冬黄栢　知母當皈を加へ○唾
血ふゐ山梔子麦門冬黄栢　知母
當皈熟地黄とくわへ

○

加減四物湯　吐血を治を當皈
生地黄芍薬　山梔子貝母　知母
牡丹皮　黄栢　麥門冬陳皮白朮

幼參　甘艸　各等分右十二味煎ど
○咳血ゐ黄芩を加へ○小便
血ゐ車前子小劑を加ふ○右の二
方ゐ血熱内よ積脈洪大弦長よ
て力ゐるの血氣強く盛なる者
ゐ用ゆべし内傷乃吐血或ゐ虚
火上升の者ゐ用ゆるてゐるまい
かるべし救ひぐるてゐるまい

○積聚

氣の五臓乃内に積るを積といふ
その發るとこ常れ處ゐ痛を
又其處と外へ移らず聚ゐ氣の
六府に聚るとゐ其發るとこ
上よ下よるして留る所ゐ痛を
亦常れ處なし○脈實大ゐの沉

小ハ宜ーく
大七氣湯 積聚氣ハさゞりて上
ヘ升ゑ心腹痛こゝ小腹脹滿ろ者
と治す 三稜 莪朮 青皮 陳皮
香附子 藿香 枯梗 肉桂 益智
各等分 甘草少 右十味姜と入煎
ど○指迷七氣湯といよも此方
乃ことも也○此方いまざ虛せざる者
の積聚と治をべー脾胃弱ーく氣
血衰ろ者ふハ用ゆべーく座中
こな君子ありと雖ども白ここ
ある居こころなきこと小人自ここ
如き堅きを磨ろ教へあり此方乃
小人のわざあめて君子ハ德ふあ
らざるあり

加減補中益氣湯 積聚或ハ上ゟみ
あり下ハあり或ハ左或ハ右いあろて
痛とゐ面黃肌瘦手足困倦飲食
と思ハざること治と○補中益氣湯ふ
升麻と去茯苓牛夏山査子枳實厚
朴と加へ共よ十二味ーゆうが東と入
煎ど○元氣大よ虛とるものふハ
枳實厚朴ーいこと用ゆべうず

○水腫

腎を水そうー脾土と堤ーん故よ
脾腎虛そるこれハ水腫とこのす
通身面目手足こるの浮て腫と水
腫し腹ぐんく大にして鼓の如く
面目手足腫さゐと脹滿こいい蟲
脹ととをいよ○脈洪大ろる者ハの

微細なるものを治し或は
分消湯　水腫脹滿を治し或は
脾虛して腫滿ところ飽悶を治す
蒼朮　白朮　茯苓　陳皮　厚朴
枳實各一錢　香附子
大腹皮各八分　砂仁七分　木香三分　右
十二味ともに燈心を入煎ず○此
方は實脾飲ことを云○飲食の傷
らんして因こと腫ことを治すと氣
血虛弱して腫滿をるかに用べし
補中治濕湯　腫脹
急なるに氣血の虛
これを治と
蒼朮　茯苓　陳皮　當歸　麥門冬
木通各九分　黃芩厚朴　升麻
各三分右十一味煎ず○氣血の虛
ふ屬をると治す脾肺大に虛し
或は下元虛寒れ者ふ用べからず

○黃疸

濕熱脾胃に鬱し蒸て面目手足
通身ともに黃ふるを黃疸とい
尤も虛實あり一概に治べからず
ず○脈洪數と實熱とは
と虛弱とす
清熱除濕湯　濕熱脾に鬱蒸
て五疸ともなすを治と
黃連　黃芩　茵陳　猪苓　澤瀉
蒼朮　青皮　龍膽各等分　右九味
煎ず○黃疸ともに五のごとからわりと
いへども濕熱ふ屬をる者ゆへ

此方こんと主ごを脾胃傷ると氣血虛とを者ふい用ゆべし○脾胃虛寒して黃ろにい理中湯を用ひ諸病の後ち黃と發とろにい四君子湯小陳皮黃芪白扁豆を加へ用ゆ諸の失血して黃をるすふい十全大補湯を用ゆべし

○疝氣

內濕熱あり外ろ寒氣と受て疝氣と病とるす此證多くそ厥陰經よあり○脈牢急いよ弱急い込ー

呉茱萸湯　疝氣腹中冷痛ち積氣上つ迫ー陰囊冷ると治を

呉茱萸五分　川烏頭　細辛　各七分半　良姜　當皈　肉桂　乾姜　各二分半

右七味煎ぢ○是寒濕小屬そるものと治を濕熱氣滯れ者みよ用ゆべし

三和散　疝氣脚氣上つ攻肢節痛ち腹滿大便通ぜざると治す

沈香　紫蘇　腹皮　羌活　各二分　木香　白朮　枳殼　陳皮　甘艸　各二分　川芎　各一錢　木瓜一分半

右十一味生姜ち煎ぢ○腹筋寧急大便通ぜず氣乃滯つ屬そるものと治を津液乾き血虛とを者ふい用ゆるよろしうと

五積散　寒濕乃疝氣と治す又冬月寒氣いよて發ろふい是

と用ゆべし本方に延胡索をくわ
○方の中寒よりあり

○汗證

動揺勞役してをせずして時こ
うく汗乃出るを自汗と云陽虛
ふ屬を盜汗いふ寢さる中に通身
よく汗出て覺て後ふと智と云陰虛
に屬す○脉大ふして虛あるひい
浮はして軟すこと盜汗とくす
尺部にあると寸口ふあると自汗と

當皈六黃湯 陰虛して盜汗を
ると治す 當皈 黃芪各二錢 黃柏
生地黃 熟地黃 黃芩 黃連 各
七分 右七味煎ど○苦寒れ某ハ胃
虛ふ宜しからず火實して氣強き

のに用ゆべし

○參芪湯 自汗を治を

當皈 人參 黃芪 白朮 茯苓
各一ゐ 甘草二分 白芍 牡蛎 酸棗仁
各一ゐ 陳皮七分 烏梅二分 浮小麥二分
右十三味棗を入煎ど○無血を調
へ理め汗を飲る方ゐり自汗盜
汗とりふこれを治を

○黃芪建中湯 自汗及び盜汗を
治を 黃芪 膠飴 肉桂 各二ゐ 芍薬
三ゐ 甘艸一ゐ 右五味を棗を入
煎ど○陰氣損じ陽虛をるりの
皆此方と用いて自汗盜汗を治す
○眩暈付健忘怔忡
風邪上リ攻痰壅りて眩暈をる

或ハ氣虛失血或ハ陰虛火動皆
ク此証ヲナス心脾虛シ耗意
思寧カニズシテ健忘ヲナシ怔忡
トナル○脉浮ト風シ弦ミ
滑ト痰ヲ兼ル健忘怔忡ノ脉ハ大
ミシテ結

清暈化痰湯　眩暈ヲ治ス陳皮
半夏　茯苓各一匁　枳實二ツ　黄芩
川芎各八分　白芷　羌活各六分　防風
細辛　天南星各六分　甘艸三分　右十
二味姜ト入煎ジ○強ク實ル者
風痰上ツテ攻テ眩暈スルヲ治ス
若虛証ノ眩暈ニ用ヒバ立ドコロ
ニ危ウシ

歸脾湯　思慮シテ脾ヲ傷ヒ

或ハ下血血心虛シテ怔忡
驚キヨク鍵忘ヲ治ス

人參　黄芪　白朮　茯苓　龍眼肉　酸棗仁
各二匁　遠志　當歸各一匁　木香　甘艸
各三分　右十味姜棗ヲ入煎ス

○心脾虛ヲ治スルノ
結ホレヲ用ユベカラズ

○消渴

上消ハ邪熱肺ヲ燥シテ多ク水ヲ
飲食スルヲ大小便常ノ如シ中
消ハ胃熱シ脾陰虛ヲ飲食共ニ
多シテ小便赤シ下消ハ腎虛
水乾ク多ク水ヲノミ小便膏ノ
ゴトクニシテ渋ル○脉實ハ堅大
ナルヲイヒ細ニシテ浮短ナルヲ

○黄連地黄湯　二の消渇を治す
黄連　生地黄　當歸　人參　葛根
茯苓　麥門冬　五味子　天花粉各
等分　甘艸少　右十味生姜棗を
入煎ど○血熱と除き液を生ど
渇と止るの剤なり下消腎水甚ざ
虚ー津液上らざる者よへ仲景
の八味丸と用べー此方如へ其治あら
ず

○小便閉大便閉

小便閉へ寒熱膀胱よ客ど氣閉て
通ぜざる也大便閉へ風寒温氣皆
よく腸胃の間よ壅ど滞ど氣渋
て大便秘結ど
証とりあ或へ諸虚失血のちるく
あり誤って治すべらず○脉小便
閉へ浮弦にして濇大便閉へ多ら
沉伏を

○

閏燥湯　大便閉結して通ぜざる
を治す　桃仁　紅花　升麻　大黄
麻仁　當歸各一　生地黄　熟地黄
甘艸各五分　右九味煎ト挽椰子の
粉五分ど入て服す　少腹痛むと
燥て通ぜざる者ど治す　元氣虚弱
ある用ひべからず

○

八正散　小便通ぜざる
治を○方へ淋病にあり○湿熱下ど
に注ぎ小便通ぜざる勢あり
卒に通ぜざるど治ど脾胃弱く
腎虚とるものよへ用べらず

○淋病

脾土傷まして受飲食の氣を運
化をろこと能ず肺金助るゝして
水道清〳〵ず或ハ色欲を過し
及び七情の爵結又ハ濕熱の雍ざ
滯るによりて此証をとる〳〵○脉盛
大にして堅ハ吉虚細にして濇ハ凶
五淋散 氣砂血膏労れ五淋を治
す 赤芍薬 山梔子各十両 赤茯苓
六両 當帰 甘草各五両 黄芩二両 右
六味燈心七入煎ぜ○一方に生地黄
澤瀉 木通 滑石車前子を加へ共よ
十一味○強く盛るものを用ゆべし〳〵ず
らずして熱淋をとるなすと治す虚
をる者ハ与ふべからず 渋を閉て通

ぜず及び熱淋血淋のものを治
大黄 瞿麦 萹蓄 滑石 木通
山梔子 車前子各等分 甘草少々 右
八味燈心七入煎ぜ○熱淋實証の
りのを治ると通薬ハ腎氣を瀉
多く服すべからず況や虚をる者てや
補中益氣湯 老人虚人及び陽
氣下陥して淋をなすと治をる
肺氣熱を受て不足をる者ハ
五味子 麦門冬 右加人方ハ内傷のの
○遺精付遺溺
夢ふ交合して精を泄と夢遺と云
又思ひ願ふて遂ざして心疲ると火
動き或ハ色欲を過して腎虚をる
りの皆よく遺精をなす又膀胱脱

乃氣約るゝをしり覺をして小便を
うる〳〵是を遺溺とす○脈左右の
尺脈洪數るを遺精こゝ寸脈短
小るを心の虛〳〵ら
清心湯　遺精夢遺を治を黃連
生地黃　當皈　人參　遠志　茯神
酸棗仁　蓮肉　各等分　甘艸　山
九味煎ぢ○心動き火ちからうて
遺精するを治を腎虛し肺氣
衰ふるのよい此例ふあらうす
參苓湯　氣虛ちて遺溺るを治
人參　黃芪　陳皮　茯苓　當皈
熟地黃　白朮　各五分　益智仁分　升麻
肉桂　各五分　甘艸三分　右十一味生姜
棗七入煎す○遺溺の脈細の虛に
屬を此方ことを主〳〵ふ急病元氣
虛脫る者ふ四君子湯を用ひ
茯苓を去黃芪を加へ此方れぐ
〳〵治をる所よあらず

○頭痛

風寒暑濕ら浸され或ふ氣血の虛
弱よりう氣逆上して頭痛を作
後ふ常に發して頭風とする痛
偏ふあるを偏頭痛こゝ又腦の內盡
く痛こ手足冷て節に至るのを真
頭痛と云かるべし死す莖のかよ
者にあらず○脈浮滑ふ吉短濇ふ治
し難し
半夏　白朮　天麻湯　痰厥つて頭痛
眩暈するを治を　半夏　麥芽

陳皮各七分半　白朮　神麹各五分　人參
蒼朮　茯苓　天麻　黄芪　澤瀉各三分半
乾姜三分　黄柏一分半　右十三味
姜棗を入煎じ○脾胃素より弱く多
飲食に傷られ脾濕痰と生じ或の
頭痛又眩暈をおこし者を治すべし
外邪の頭痛及び氣血虚とをろ〳〵の
みに用ゆるときは却て風上せ目昏く
川芎茶調散　諸風頭痛に皆塞ぎ声重きを治す
薄荷四匁　荊芥　川芎各二匁　羌活
白芷各五匁　細辛五分　防風五匁三分　甘草
五分　右八味好葉茶と二匁入煎す或は
右乃八味を散藥かして煎茶乃
薄き湯にて用ゆるも妙なり　風氣に感じて

頭痛そるを治す又風邪いまだ悉く
去ず尚上部に留まりて口頭痛そる
ものを亦用ゆべし氣血虚弱の人風氣
あるそも此方宜き也
加味調中益氣湯　氣血そりみ虚
し頭痛そるを治す
蒼朮　川芎各六匁　當歸　五匁　升麻
柴胡　陳皮　蔓荊子各三分　細辛　黄柏
甘艸各二分　右十二味水煎ず○氣虚し
血弱き者の頭痛そ治を或は補中
益氣湯れこゝひ宜き
ゝ隨つて用ゆべし
○心痛付腹痛
痰食中に鬱し七情の結滞にて
て心の痛そなにて又内外の邪氣心

と犯し大ゝ痛こゝ手足冷て節に至
るものゝ必ず死と此と真心痛とい
療治の及ぶ所にあらず腹痛ゟ寒
あり熱ゟり死血あり温疫あり食積
あり皆よく腹の痛こととなり○脈沉
弦細動かゝる痛の証あり寸口にあ
らべ心痛と関部にあると腹痛とを
清熱解鬱湯心痛多くハ氣鬱し
熱となりて痛むものを治と山梔子
黒二匁 川芎 香附妙 枳殻 黄連
各一匁 陳皮 千姜各五分 甘艸三分 蒼朮
七分 右九味姜を入煎ど○壮ある者
氣鬱よう痛と治す痩ゟ因と
痛ゟゝ二陳湯に枳實縮砂と加へ用
ゆ虚人内傷のゝゝ補中益氣

湯と用ゐ草豆蔻と加ゟ熱痛ゟハ
又山梔子とく
開鬱道寸氣湯 一切の腹痛と治す
蒼木 香附子
ゟゝ總司ざる也
川芎 白芷 茯苓 滑石 山梔子
神麹各一匁 陳皮 乾姜各五分 甘艸
少ゝ右十一味煎ず○此方諸の腹痛
と總治とるゝ藥也ちゝしどこと諸
菜雜ず乱てその功となすこと專
一ゟゝ難ゝ寒にゟて痛ゟゝ食積ゟゝ者
散熱ゟゝ小柴胡湯食積ゟゝ者
砂平胃散を用ゆ一概ゟ此方とゞめて
總治とゝすべからず

○脇痛 附 腰痛 肩背痛
厥陰肝經ゟ兩の脇と行ゟ故ゟ風

寒痰飲此経に多く或は肝の實
火或は死血あり一切の皆よく腰痛こ
とごとく腎を侵すの皆腰痛をなす肩
背の手の大陽經の主ごる処なり
氣滞して行ざるこれ痛をなす○
脈左右こうふ弦うるこれ脇痛と沉
弦こ腰の痛くなす

○

蹉肝湯　左乃脇の下痛は肝積也
或は怒て此証になり或は物に撃まて
痛こ治す　黄連　呉茱萸○煎じ汁に
浸し焙二匁　柴胡　當帰各一匁半
青皮　桃仁　枳殻各一匁　川芎　芍薬
各七分　紅花五分　右九味煎ず○右
乃脇痛こんの姜黄往心陳皮甘

草を加へ共に十三味姜こ入煎ず○
肝積瘀血或は怒よりて痛をなし
實証の者に用べし肝腎の虚ふへ用
べからず

○

補陰湯　腎虚して腰痛と治す
當帰芍薬生地黄熟地黄陳皮
茴香牛膝破胡紙杜仲茯苓
人参各一匁　黄柏知母各七分　甘艸三分
右十四味棗を入煎ど○腎虚常に
腰痛ものを治すこ腎元大こ虚こ
ふへ與へべからず

○

獨活寄生湯　風湿腎こ傷つきて腰
痛を治す○方へ中湿こ見へよう
通氣防風湯　肩背痛で首乃動
き難きを治す　羌活　獨活各一匁

葛本 防風 川芎各一 甘草 蔓荊子各六分 右七味煎ㇾ○氣爵一大陽經行ㇾ實証ㇾのㇾ治す氣血虛弱内傷ㇾのㇾ補中益氣湯あくまでいへ物湯に黄芪を加へ用ゆ

○痛風付痺證

風寒濕の氣に侵されて痛ㇾ痺ㇾ云ㇾ是ㇾ痛痺ㇾ云虎乃咬が如く小此彼痛ㇾよりて又是ㇾ白虎歷節風ㇾ云ㇾ○脈弦ふして緊ㇾと痛風ㇾ云ㇾ痺ㇾ浮濇ふして緊羌活湯 遍身骨節痛ㇾのㇾ治を羌活 蒼朮 黄芩 當皈 茯苓 芍茉 香附子 半夏各五半 木香 陳皮各七分 甘艸三分 右十一味姜ㇾ入煎

○風濕ㇾ

虛ㇾて痛ㇾ者ふ用ゆべㇾ反ㇾ病ㇾまㇾ與ふべからず

大防風湯 一切ㇾ乃麻痺痿軟風濕虛ㇾ挾ㇾたるㇾ治す

熟地黄 防風 當皈 黄芪 芍茉 杜仲各一ㇾ川芎 附子各七分半 人參 羌活 牛膝各五分 甘艸三分 右十三味姜棗ㇾ入煎ぜㇾ○もㇾ虛証ㇾの者ㇾ治をㇾ宜ㇾ外邪の風痺實証ㇾのㇾ宜ㇾ外邪ㇾ侵ㇾ

○脚氣

脾胃虛弱かㇾて外邪ㇾ侵ㇾされ濕熱下ㇾ注ぎ發ㇾて此病ㇾをなㇾ脚腫ㇾ濕脚氣ㇾいひ腫ざるㇾ

乾脚氣ニ〇ト古ヨリ皆云ヒ慣レタレト厥後ヨリ又緩風トイフヘキ脚氣ノ一種アリテ虚ト実トノ二証アリ虚ト実トヲ分ツ事ハ脈ノ微滑ヲ以テ分ツ事ハ前ニ云ヘルカ如シ

羌活導滯湯　脚氣初メテ發リ一身悉ク痛ミ手足腫痛大小便滯ヲ結スルヲ治ス

羌活　獨活　各三匁　當歸　防己　各二匁　枳實二匁　大黄四匁

右煎服ス〇風濕ヲ去リ二便ヲ通ズル乃劑也久病ノ者及ヒ二便順ナルモノハ用ユヘカラス

當歸拈痛湯　濕熱ノ脚氣手足ノ節骨煩疼痛ミ肩背ヨリ重遍身痛ミ膕ヨリ赤ク腫或ハ瘡ヲ生ズルヲ治ス

羌活　當歸

白朮　澤瀉　各六分　人參　苦參　外麻　葛根　防風　蒼朮　各四分　茵陳　黄芩　各五分　甘艸三分　右十五味煎ず〇脚気腫痛ミ濕熱内ヨリ壅リ黄ヲ發スル者ヲ治ス

寒濕ヨハ五積散ヲ用ヒテ木瓜檳榔子穿山甲ヲ加ヘ風濕乃脚氣ヨハ香蘇散ヲ加ヘ用ヒテ氣道ヲ通ズルヲ氣滯ヨシトス

木瓜檳榔子　右二味煎ず〇脚氣腫痛ミ血虚ヨハ四物湯ヲ用ヒテ加減スヘシ

〇眼目

眼ハ血ノ養ヲ得テヨク視ルコトヲ作ルモノニシテ血不足スレハ眼病トナル然ニ血餘アルモ亦ヨク病ヲナスヿ或ハ風熱上ヲ侵シ辛熱ヲ食

そろこと多く或は色欲を過して腎水を耗し労役こと〳〵を以て氣と傷るこれ皆よく眼病諸証をなす○

脈洪弦數なると眼病をなす

洗肝散　風熱上攻して赤く腫痛こと隱澁淚多きを治す

當歸　川芎　薄荷　羌活　防風　大黄各等分甘艸少　右八味煎ず○肝熱を去風毒を除く方也又病目を治す血虚労倦の者ふい用ゆべからず

滋腎明目湯　神と労し腎虚して血少く眼痛こと物を視ることを欲せず及び内障黑華を見るものを治す

當歸　川芎　芍薬　生地黄　熟地黄各一匁　桔梗　人參　山梔子　白芷　菊花　甘艸　各五分　右十三味好葉茶燈心を入煎じ食後ゝ服す○血虚して火熱ゝ屬する者を治す脾胃の氣虚する者ふい用ゆべからず

益氣聰明湯　飲食労役ふ因て脾胃不足し内障耳鳴を治す

黄芪　人參　各五分　升麻　葛根　各三分　蔓荊子　一分半　右七味煎ず○眼常に昏して物を視難きもの元氣大ゝ虚せざるに用ゆべし元氣大ゝ虚せる者ふい補中益氣湯を用ひ人參黄芪を倍す久しく病で形氣こともに虚損せる者及び血虚の者ふい十全大補湯ゝ

白豆蔻沉香附子と加へ用ゆ

○口齒

舌は心の苗也齒は骨の餘ゐして腎氣これを主どる熱により虛ゐ因て舌齒の諸証となす胃熱ゆえ〳〵此病となるもの又多し○脉洪數と熱と微弱と虛と尺ゐ

ようて心腎と診む

清胃散　胃熱ゆえ齒痛ゑ齦腫或は口中に瘡を生ど齒痛を治す

膿爛て痛と治を　石膏　生地黃　當皈　黃連　升麻　防風　牡丹皮　荊芥各等分右八味煎ず○齒の痛胃熱ゑ屬そるものと治す火の有餘ゐ涼膈散を用ゆべし脾胃虛

そるもの及び齦爛れ者ゐ共ゐかるべからず用ゆべうべ

玄參升麻湯　舌の上に瘡を生ど或は舌腫て痛と治を

玄參　升麻　赤芍藥　桔梗　枳實　黃芩　犀角各等分甘艸少右八味生姜と入煎ず○心脾に熱蘊そる此証とるものと治を虛熱ゐ用るてこるもの

定痛散　虫蝕齒痛甚しきと治す

當皈　生地黃　細辛　干姜　白芷　連翹　黃連　山椒　苦參　桔梗　烏梅各等分甘艸少右十二味煎ど○瞤下ゑ後ゑ嗽ぎ先口に嚙ゑ漱ぎて虫齒を病ゐ腸胃ゑ中に濕熱ゑ有て齒ゑ者と治を上齦ゑ胃經の分ゑ行る所

下歯ハ太陽經乃絡脉ゟ總て牙
歯の病を療ずゝのへ上下を分つ
て治をべし此方れ如き虚弱乃
者かハ虫歯ありとも用ゆべゝ
清胃保中湯 虚弱ゟる者歯痛
で忍らしざると治を補中益氣
湯ゟ生地黄黄連牡丹皮とゟ
ゟ方ゟり○心脾の虚熱にゟて
舌腫痛發熱口乾き食少きゟの
ゟハ加味飯脾湯を用ゆべし方諸虚ゟ
あり

○咽喉の病

喉ハ気と通じ肺ふ繋る咽ハ物を
嚥胃に通ぞ五藏熱ゟるときハ
腫塞つて通ぜず六府寒ずるとき
ハ縮を硬くして物あるが如し或ハ虚

火上升し或ハ風痰上つて壅つゝ
腫痛ゟとゟなす○脉實滑ハ
微にして伏ゟる者ハ治しゞゝ
清涼散 一切乃實火ふて咽喉腫
痛と治す
連翹 黄芩 防風 枳殻 黄連
當帰 生地黄 各一ゟ 薄荷 五分 甘
草 三分 右十一味燈心細茶と入煎
ぞ○咽喉腫痛或ハ閉塞つ或ハ瘡
と生ぞ實熱の者ゟり皆ゝ是
と治をべし虚火ふハ用ゆべゝ
死と招く
牛蒡子湯 風熱上つ咽喉腫痛
或ハ瘡と生じ言語ゟり難きと治
す 牛房子一ゟ 玄参 犀角 升麻

黄芩 木通 桔梗 各一匁 甘艸 五分
右八味煎ぜ○風熱腫毒乃ものを
治を○風痰上つ逆りて咽痛ものみ
ゐ二陳湯ゐ桔梗荊芥薄苛を
加へ用ゆ○虚弱労倦ものみゐ補
中益氣湯を用ひ桔梗玄参黄栢
を加よ○相火亢るものみゐ四物湯を
用ひ知母黄栢天花粉桔梗甘艸
玄参をくわよ
通関散 候痺腫痛言語ゐざる
と治を 人参 白朮 茯苓 各一匁
防風 荊芥 薄苛 乾姜 各五匁 桔
梗 二匁 甘草 一匁 右九味附子を加へ
前ぜ○こし候痺腫痛と治をも
從治の法也驗て寒涼の薬を用ゐ

○

こゝろこし必らず死を急ぐの時そ
腫ゐる処を突破つて血を出をゞし
血をとると妙ゝ候痺ゐ急症也
早く治をくべ遅緩ゐ救ひざる至
極のやまひ

○耳病ゐ
耳ゐ腎の主ごゐ窮也多くゐ腎虚
ゐゐて耳ゐ病となす或ゐ氣逆上
ゐ或ゐ労傷する者又ゐ風痰湿熱
皆ゝ耳病ゐものゝ○脈左乃尺
脈とゐて是を候ゐ浮と風ゐし洪
と熱ゐゐ腎虚すゐ濇脈を見す
滋腎通耳湯 腎虚ゐて耳聞す
鳴と治を 當帰 芍薬 生地黄
川芎 知母 黄栢 黄芩 香附子
柴胡 白芷 各等分 右十味前ぜ○

腎虛火亢るうめを治を中氣虛
弱みハ用ゆべからず
○蔓荊子散 上焦熱ー耳内ようう膿
汁と出ー及び耳鳴て聞へざるを治
す 蔓荊子 升麻 木通 赤芍某
麥門冬 生地黃 赤茯苓 桑白皮
前胡 菊花 甘草各等分右十一味
姜ど入煎ど○風熱上れあるてこの
証となるのを治と實証れのく風
熱甚ーきハ防風通聖散と用ゆ
○氣鬱ー逆上ろれハ沉香降気湯ハ
るひハ十六味流氣飲○血虛ー火あ
るものハ四物湯と用ひ山梔子柴胡
と加ハ○中氣の虛弱ハ補中益氣
湯○腎水虛ー火動者ハ六味地

黃丸と用ゆべし

○痔漏

內辛熱乃物を多く食ー及び色
欲を過ー憂思ひ傷らるー外風
熱温燥ハ侵されて此病をなし肛
門の邊ゟ瘡と生じて破ざるを
痔と破ぶて膿血の出るを漏とす
○脈沉小にして實ある者ハ吉浮滑な
ーく軟弱なるものハ治ーがさ
秦艽羌活湯 痔漏堪を或ハ垂
下ゟ頻ゟ痒きを治を 羌活一ゑ二分
秦艽 黃芪 各一錢 防風 升麻 麻黃
柴胡 甘草各五分 藁本 細辛
紅花 各少 右十一味煎ド服す
秦艽防風湯 痔漏毎日大便の時痛

とるすと治をと　秦艽　防風　當皈
白朮各五分半　沢瀉　甘草各六分　黄栢
五分　大黄　陳皮各三分　仁二十个　紅花少　柴胡　升麻各二分　桃
れ二方ハ風と去つ濕と除き熱と清
くし毒と解をと虚証ニハ用ひざし
○痔漏久〳〵く愈ざ氣虚するもの
及び老人氣弱きもの或ハ痔を攻
る茶と誤つ服しそ血大ニ下るもの
ふいころる四君子湯を用ひ黄芪白扁
豆穂花と加ふ○内熱の痔漏下血
をる者ニハ四物湯ニ黄芩黄連槐
花とくすく用ゆべし

○脫肛
脫肛ハ肛門の脫出ると云肺氣虛
寒し大腸の氣提る力のゐ時ハ此
証とるし或ハ痔漏下血久痢の後
或ハ産婦の努力小児の叫號こゝる
よく脫肛とるつ○脈小にしく緩
なる者ハ治易しし是に反そるものを
治しがさし

參芪湯　脫肛を治ると　人參　黄芪
當皈　芍茶　白朮　生地黄　茯苓
各一匁　升麻　桔梗　陳皮各五分　甘
草三分　右十一味姜棗と入煎ご○
虚寒ニハ乾姜と加ふ○脾肺虚寒
ぞる者の脫肛を治と濕熱外邪
ろりのるニ宜しかるず
升陽除濕湯　大腸ニ濕熱有て脫
肛する者と治す　柴胡　升麻　羌活

防風　猪苓　澤瀉五分　蒼朮麥陳皮各三分　神麴五分　麥牙甘草各三分　右十一味煎ぜ○大腸に濕熱ありて虛をる者ゐ用ゆべし○風邪によろく脫肛し實証の者ゐ用ゆべし○敗毒散を用てよし○血熱かい四物湯を用ひ黃栢升麻を加へ○脾肺弱く元氣虛をる者ゐ補中益氣湯を訶子棒根を加へ用ゆ○氣血ともに虛せべ八物湯或ハ十全大補湯と用ゆべし

○癲癎

夫癲い或い狂ひ或ひ靜也泣笑ふと常のごとく言語と頭あろて尾なき志し大よりて願て遂りに心血不足して此証となるに癎い時々に發て又止ろ其發ること或ハ驚にろ或い怒にろて痰火と動ろ目眩仆ると麻痺抽掣かろず涎沫と吐これ大よ驚き恐ろに因ると神氣守らずして此証となす又幼少ろより大ゐ驚ろ感じ觸ろ後よ此病と成ものあり○脈大滑ろ吉沉小緊急ゐ凶し

養血清心湯　癲い心血の不足ろと治ろ

人參　白朮　茯苓　遠志　酸棗仁　當歸　川芎　生地黃　石菖蒲各ホ分　甘艸火　右十味煎す○これ心の氣血と補ふ劑也實熱邪氣盛ゐして癲

ゟ似る者に用ゆるこゝろみうる」

清心抑膽湯 癇ハ氣血の虛ホ屬セ
痰火ト兼る者ト治ヲ當皈 芍茉
白朮茯苓 陳皮 半夏 香附子
枳實 竹茹 菖蒲 黃連 各一ゟ 川芎
人參 遠志 甘艸 麥門冬 各四 姜煎ず
養老一方 丹溪の母年七旬ニ〆素
ゟ痰飲多く大便結ー小便少き
ト治ヲ 人參 白朮 大生牛膝 芍茉中
陳皮 茯苓 小○春ハ川芎ト加ヘ夏ハ五
味子 黃芩 麥門冬ト加ヘ冬ハ當皈生姜
加ヘ一日ニ一二貼与テ小便長く快き
ゟにハ茶ト止む
又八旬の老人二便通ぜさるニ益氣
湯の煎湯ヲ以テ六味丸ヲ呑ー

○外科

○癰疽付諸瘡

癰ハ六腑小屬ト毒外ニありて發
るゝト暴也ゟにゝも筋骨ト傷ら
ど疽ハ五臟ノ屬ーて毒內ト攻て
發るゝ緩ー毒深くして筋骨ヲ
傷る又云く二寸ゟり五寸まで
ゟり一尺まで ト癰疽ーて內飲食の積熱ヨ
ゟり外風寒濕の氣ニ侵ー傷らレ或ハ水
耗火重き或ハ氣虛勞倦によりて
皆これト生ず○脈浮數ト疽ーレ
沉數ト疽ゟレ

○荊防敗毒散 癰疽諸の瘡毒の初
發惡寒發熱甚ーく頭痛傷寒ニ

似る者と治を○方は敗毒散み人参と去荊芥防風連翹忍冬と加へ共よ十三味也○風熱の積毒ありの實証のものゝ用ゆべし內傷の者ハ初發しくいよとを用べからず

○十六味流氣飲 名もまた諸の惡瘡癤疽或ハ乳岩と治を又氣爵して腫物と生ド或ハ皮肉の間よ核と生ぞるなどこれと用ゆ人參 黃芪 當皈 川芎 芍茱 枳殼 肉桂 防風 烏茱 白芷 枳殼 厚朴 木香 各一匁 紫蘇一匁半 桔梗五分 甘艸三分 右煎ど或ハ青皮を加○氣爵し或ハ怒によりて氣血凝滯ありて腫物と生ぞる者ハ用ゆ

○十金內托散 瘡癤或ハ瘡癰の類いまだ口開ざる者又ハ已ハ膿潰くずれを治を人參 黃芪 當皈 各二匁 川芎 防風 桔梗 厚朴 白芷 肉桂 各一匁 甘草 五分 右十味煎ぞあくひハ酒を加て煎ト又ハ粉藥にして酒ぬて用ゆ○人參黃芪あつて氣と補ひ當皈川芎血を補ふ桂枝と血と燥し氣と瀉るの藥なれかあらざるものハ用ることなれ廣ひあく腐るゝ托裏散 瘡疽氣血虛して起ら發ざることあるいハ或ハ腐つ潰へく飲ざがたく及び肌肉と生ぜざるを

して陰精中途より留りて便毒となる
る楊梅瘡は下疳或は便毒によりて
生じ又は人よりとなりて何となく
かて下疳便毒腫痛こと小便もろう
前陰痛こ痒き等の証て治を
柴胡こ澤瀉車前子各一匁五分木通
生地黄當皈各こ龍胆五分煎じ
○前陰より生じる病肝経の湿熱瘀
壅るのは皆ようくこれこ治こ虚こる
者ふは用ろこくなれ○血虚熱のは
りのは四物湯こ用ひ柴胡山梔子
こ加ふ○虚熱食少き者は加味逍
遥散○元氣虚こるのは補中
益氣湯或は山梔子龍胆こ加ふ

治す 人參 黄芪各二匁 白朮 陳
皮 當皈 熟地黄 芍薬 茯苓 各一匁
甘艸一匁 右九味煎す ○瘡疽氣血虚
る者ふは始め終こ此を用
ゆべし或は陽氣下て陥こ元氣虚
する者ふは補中益氣湯こ用てよし
○瘡疽膿大こ出て後は八物湯十
全大補湯の類こ用て調へ理むべし
虚甚しき者又冬れ寒ずる月なども
乾姜附子こくわ
○下疳 付 便毒 楊梅瘡
色欲動どこも遂こ或は交合すは
こ潔うずして玉莖こ瘡こ生ずる
を下疳といふ便毒は小腹の下腿の
縫めより生ず色欲直こ遂ることをせず

○

瘻風解毒湯　揚梅瘡を治すと或ハ輕粉を服して筋骨ひきつる痛こと身節遂ハさるを治す

土茯苓七匁　薏苡仁　金銀花　防風　木瓜　木通　白鮮皮　各五分　皂角子四分　右八味煎ず○氣虛ふハ人參を加ふ○楊梅瘡を治るに要方也或ハ下疳と病のも亦こゝを用て兼く楊梅瘡を防べし氣血虛すなりのふハ甚敗こべし

○疥瘡

風熱或ハ濕と挾こ皮膚の間ゟ客すてこれと生ど升麻和氣飲　疥瘡手足小生ー前陰の濕痛こ痛く痒く寒熱あるて

濕痒を治を　升麻　葛根　白芷　陳皮　蒼朮　桔梗　各一ゟ當皈　生夏　茯苓　乾姜　枳殻　大黄　各九分　芍茉七分　甘艸　五分　右十四味生姜を入煎ず○疥瘡浮腫前陰濕痒を治す虛人ふハ宜ー此ー

○瘰癧

痰鬱て熱生じて火散ぜず或ハ氣鬱し痰滯て耳の前後或ハ頸乃下胸腋そのほかの所も結核を生ぞると瘰癧しくハ

五香連翹湯　諸の惡瘡結核るハまきを治を

大黄三匁　連翹　丁香　升麻　獨活　木通　赤芍藥　各七分　木香　沉香　各五分　甘艸　乳香　麝香　半

少右十三味煎ず惡物大便ようを下るを度として茶を止む○是氣と導引血を通じて壅り滯るを散るの方也気血實する者の初發み用ゆべし膿潰ての後は與べからず虛する者は初發ともに共用ゆべからず

○

益氣養榮湯　癤証ありて瘰癧と生じ手足腫肉の色變らず或は日晡に熱氣さし或は潰て飲らざるを治す　黄芪　人參　白朮各一匁半　熟地黄　陳皮　貝母　香附子各一匁　柴胡　桔梗　川芎　地骨皮各五分　甘艸三分　右十四味煎ず○躰虛癤結して瘰癧を生ずるを治す氣血大に虛せば十全大補湯に香附子貝母遠志をくわ用ゆ

○損傷付破傷風　金瘡

物に撲ち或は高きより墮て皮破れ血出ざるを損ずる者と皆損傷と云傷風は金瘡の口或は腫物の口のようにて瘀血となる也破風邪を引込て寒熱發つ或は口噤み身直ぐに或は反張る金瘡へ刀かあり切破らるゝと云○脈損傷肉ふ瘀血小弱は凶し金瘡血出ること多くして

脈虚細るもの吉急數大るもの凶ー

道滯湯　打撲きて内れ瘀血あつて痛むと腫とをなすと治を

熟地黄　赤芍藥各五錢　黄芩　梔擗子　牡丹皮各五錢半　當皈尾一錢　桃仁八分　紅花　三分　右八味煎じ酒ふて蒸ある大黄ありと加へて尤も効あり○瘀血と攻下ともの方也實人を用ゐべし虚証ふハ八物湯益氣湯の類を用ひて瘀血と去の葉と加ふべしー

羌活防風湯　破傷風邪氣表にあるを治す○羌活　防風當皈芍藥川芎　藁本各一錢　甘艸　三分　右九味煎ず

白朮湯　破傷風汗大ら出て止をらざる手足搐搦を治す　芍藥　四錢　白朮　葛根各二錢　升麻　黄芩各一錢　甘艸五分右十八味煎ず

大芎黄湯　破傷風裏にある之を治す

川芎ー錢　黄芩　大黄　羌活各五錢半

右四味煎じ大便下ると度ごとに茶と止む○右の三方ハ破傷風と治す皆實証の者に用ゆべしー氣血虚弱なるのにハ八物湯十全大補湯の類ひと用て風邪と去の葉ごとくすべしー

加味四物湯　金瘡血と出をて多きと治をと○方ハ四物湯ふ人參黄芪と加へ共ふ六味煎ず○金瘡と治るふ加へ共ふ六味煎ず○金瘡と治るふ

八物湯十全大補湯の類ひ証よ隨つて是と用ゆ又血出ること大にして元氣虛脫をるふ人獨參湯と用べし

○婦人科

○經脉付經閉

婦人ハ十四ハ月水時となりて下るこれ女ハ陰にして月の盈虧有る如く月經調らざれバ後諸病をおこす愼こ治すべし○脉左の尺脉微濇或ハ浮滑にして勻かざるハ月水調らざる證治するなり

或ハ通ぜざるを治する

四物湯　經水調らざるを治す

加減をして用ゆ○方ハ此方を主とし加減の法○經水來ハい諸虛よりおこりて腹痛ひハ血實ー氣滯るなり也桃仁紅花香附子黃連延胡索牡丹皮莪朮青皮を加○經水來て後小痛とをなすハ四君子湯ハ合して乾姜を加○經水ころの時分となりて過ても來らず痛とるハ着ハ血虛ー寒ある也桃仁紅花香附子肉桂莪朮木通藕朮甘草を加○經水來ること多きハ黃芩白朮を加ハ○經水ハ澁て少きハ葵花紅花を加○瘕ハ血と行ぞかい桃仁紅花肉桂延胡索香附子青皮の類を加○痰あるハ半夏陳皮天南星を加○經水閉て通ぜざるハ桃仁紅花を加ハ痛めるハ莪朮肉桂五靈脂を加○右四物湯を主とし証ハ隨て加減ゝ用ゐ体瘦

火多く血ヵ傷とうけ氣虛せさる者
ゟ與ふべし○經水先ぢうて來るハ血
熱也脾經の血燥にようべ加味逍遙
散脾經乀鬱火小因てなさゞ皆脾湯ゟ
用ひ労役火動ふゝ補中益氣湯○經
水時に後て來るハ血虛也脾經の血虛
そるにハ人參養栄湯肝經の血少き
ふゝハ六味地黄丸氣虛し血弱きふゝハ
物湯と用ゆ○經閉脾胃虛し血を生
ぞるゝ能ハさるゟハ六君子湯と加へ
當皈と加へ脾胃の鬱火ふゝ皈痺湯
肝脾の虛熱にようべ加味逍遙散血
弱く氣虛し痩衰へ夜ゟ至て熱ふ
る者ふゝハ物湯と用ゆ虛甚しく或
ゝ寒ふるどゝ乾姜附子とくゟ

○崩漏

内血氣弱く外風冷に侵さるゝて
血大小下ゐ止ずして後ふゝ血氣虛
脫の証となる○脈小虛はして滑る
るゝハ大緊實數なるゝ悪し
加味四物湯 崩漏初ふゝ先此方
と用ゆべし○方ハ四物湯に荆芥防
風升麻と加へ共ゟ七味煎ず○血止
ぞんべ蒲黄白朮と加ふ○此方氣の
實ぞる者の初發ふ用べし多服をべ
うべ況や氣虛して血と攝ひること
能ハざる者におゐてをや
膠芥湯 崩漏止ざを小腹痛むと治
阿膠 川芎 甘草 各一 當皈 艾葉
各三 熟地黄 芍薬 各四 右七味

煎ず○血氣と労傷して血止ざる者
を治と○崩漏發熱をるゐハ物湯
と用ゐ熱甚しくく千姜を加よ○氣
虛して血と摂め止るく能ざるゐハ
補中益氣湯血の甚に出ること大に
陽氣暴に絕しく已ゐ死せんとするゐハ
獨參湯と大服ふくて用ゐべし

○帶下くく

温熱凝滯つ帶脉と過て淋き下る
故ゑ帶下と云白きゐ気に属し赤
きゐ血ゑ属す

升麻滲濕湯 經水調ゐず帶下
赤き白き共ゑ治と 當皈 川芎
芍茶生地黄 白朮 茯苓 蒼朮
陳皮 香附子 砂仁 半夏 各一匁
乾姜七分 黄柏 知母 柴胡 升麻
各五分 甘草三分 右十七味姜棗ゑ入
煎ず○血虛温瘀熱と兼る者と治
す○帶下久數愈ずくて虛ゐ且る
者ゐ用ることなり

○五積散 赤白帶下寒濕ゐ属する
りのと治す○香附子呉茱萸茴香
と加へ用ゐ○方ゐ中寒にあり
加減十全大補湯 久數帶下と病て
痩衰へて力なく身痛こ食少く日晡
ゐい煩ゑ熱しく小便渋ると治す○方
ゐ十全大補湯ゐ肉桂と去車前子地
骨皮鹿角膠と加へ共ゑ十二味煎ず
○氣虛温瘀下に注ぐ者ゐ補中益
氣湯と用ひ若木半夏茯苓黄柏と加

○産前有臨産男女精血之説
男女精血之説
摂生要訣懐胎章云男精女血合而成胎
氣與子宮之左受之男子之氣與子宮之右受之
血男乃精之勝氣女子之血乃精之勝氣
受之○脈心脈之動甚〻数按而絶せざるを
妊娠と云左の脈沉實を男と云右の
脈浮大を女と云
驗胎散 血の塊つまる胎さるの疑ひ
き時いたると用ゆ 川芎一味粉よ
して一ゟ艾葉の煎じ汁にて用ゆれ
べ腹の内少し動くと胎と動ざ
まざ懐胎よ非を○此方實人と驗べ
し 川芎の走竄の良死の誠あり

虚人ふい好酢とりめて艾葉と煎
ゞ半盞ぐろ用ゆべし腹中大よ
痛と妊とゝ痛ざれべ懐妊に非ど
紫蘇飲 産前の諸病ふ宜し
加減ゟて用べし 紫蘇 川芎 陳皮
芍薬 大腹皮 人参 當帰各等分
甘草少
右八味生姜と入煎
ず○加減乃法○胎氣和せざれむ
へ上つ心腹ぐろいつゝ
と加ふ○嘔吐止ざるハ悪阻ゟ茯苓
半夏砂仁藿香神麹丁子と加ふ○胎
氣固りゞ常ゝ小産ゟゝハ兼て
此茶と服をべし 地黄阿膠黄芩砂
仁麦寄生白木糯米と加へ用○事に
因ゝ胎動きそ安かゞゞ下血ゟゝ

胎臨とするには地黄人參白朮茯
苓黄芩阿膠砂仁を加ふ○咳嗽し
痰を吐ふへき者は半夏白皮杏仁貝母を加ふ
泄瀉ふへ白朮茯苓を加ふ○瘧ふる
梹榔子草菓青皮良姜生夏茯苓
葛根を加ふ○氣の付くやうふるき
つゞ痛むと胎痛とう〳〵阿膠延胡
索黄芩を加ふ○妊て七八ケ月の前後
ふ面目浮腫ふへ地黄茯苓沢瀉白
朮黄芩山梔子麥門冬厚朴を加ふ
○口噤て人事を省ず言語錯乱
るには生地黄半夏茯苓麥門冬
遠志石菖蒲竹茹を加ふ○胸痛ふへ
延胡索乳香を加ふ○腰痛て忍へら
もざるには破胡紙茴香杜仲を加ふ

○小便渋つそ通ぜとんに木通車
前子滑石を加ふ○大便閉結をるふへ
生地黄黄連を加ふ○懐妊ちくくよう
後氣安かゝず覚へ或ふ腹少し痛
或ふ腰痛ことには或ふ飲食ふ味な
く或ふ胎動き下血をるりの五月
六月の内ふ常に此茶を服をそ妙也
地黄黄芩砂仁人參阿膠白朮と
加へ用也○本方は川芎香附子を去
人參白朮と加へ達生散この懐妊
八月九月の後ふ此茶を服をゝ難産
乃患ふ十人ふ一人もはゝ○産ふ臨て
驚き恐るこあるに胎上つそ下ら
ざるふこへ達生散を加へ用ゆ○右諸の
加減の法よく虚實と弁へ証ふ隨て

用ゆべし虚甚しき者かゝる者は各補剤と
主どして加減を以て胎を養ふ經氣
虚實調らざる時ハ胎是がために安
らべき甚しき時ハ下血して墮るも
よく慎むべし

○催生飲 已か産に臨で産せざるを
用ゆ催生の茶ハ
大腹皮 枳殻 白芷 各二分 右五味
煎じ温服を○腰痛して甚しく胎
下ハ陷て將水破を出ると待て催
生の茶を服とべし驟て努力悶へ産門
乾き氣力竭て難産かいる瓜熟
して蒂脱るのごとし宋人苗を揠の
誡めあり慎まざるべからんや

芎歸湖散 産に臨て生まざる時
當皈五分 川芎三分半 右二味濃煎じ酒と半
分入温めて用ゆ○催生ふい此方隠
當なりこれ血成盛なる時ハ産じ易し
酒と交ざれど験る事必す酒を入べ
○胞衣下ざるふい牛膝と加へ用ゆ

○産後

産後ハ氣血ともに虚して或惡露
盡ず或ハ瘀血行ずして産後の諸証
となん○麻産後ふい沉小滑なるべし
吉し今實大弦急ハのもし

芎歸調栄湯 新産小是と用て血
と調へ氣と補ふべし諸証自ら
除く○方ハ芎歸湯へ人参紅花を
加へ共に四味煎じ○氣血を補ひ瘀

と行をの剤ろの新産みの
ろんと用ゆべし
芎飯調血飲産後乃諸病と治を
宜しく加減してこれと用ゆ當飯
川芎白朮茯苓熟地陳皮烏藥
香附便製干姜黒益母丹皮甘艸少右
十二味姜棗と入煎ず○新産みへ某を
服すべし臨て童便一盞好酒半盞
と加へて用ゆべし○瘀血と行り熱と
退くるの妙方なり○加減の法○産
後目昏く心憒と語ざるみへ荊芥
と加○口苦く咽乾べ麦門冬と加○
氣脳みへ木香烏某と加○大熱退
うざるみへ妙過しうる乾姜と加○
生腸收らざるに黄芪人參と加へ

○咳嗽みへ五味子杏仁と加へ○腑
乃脇痛みへ青皮肉桂と加へ○痰と吐
へ半夏貝母と加へ○嘔吐止ざるに
半夏と加へ地黄と去○自汗盜汗みへ
黄芪酸棗仁と加へ○泄瀉止ざるみへ
黄芪乾姜と加へ地黄と去○瘀血行
らべ心腹痛みへ肉桂五靈脂蒲黄
延胡索牡丹皮と加へ地黄白朮と
去○血と去しすぎて過多して頭暈めき
目暗く口噤むみへ荊芥人參乾姜
と加へ○胸の間脹悶ゆるみへ砂仁枳
實山査子厚朴と加へ○惡露行ざる
みへ益母草牡丹皮と加へ○血大よ
下りて止ざるに蒲黄を黒るる程
み炒て本方れ煎湯みて調へ服す

べし○物み驚き怔忡をるゝ遠志麥門冬酸棗仁を加へ○小産ありて心腹痛みへ延胡索牡丹皮桃仁紅花青皮澤蘭を加へ白朮茯苓を去○産後に大み氣血を補ふと雖ども本に雜証を治をび此方加減末となりて是を治をび減乃法の如きよく虛實を察し明らめて誤り治をべからず虛甚しき者みへ別に方を求ひべし○産後虛と補みよへ人參白朮黃芪陳皮當歸川芎甘艸を用ひ熱氣輕きときへ茯苓を加へ重き時へ乾姜を加へ○産後發熱量厥するにへ補中益氣湯と用ひこゝみて驗なくべへ物湯と用ゆべし○虛甚しく或へ寒月みへ乾姜附子を加へ小産後發熱量厥するにも此法ふ依てく治をび○産後或へ小産血大に出氣血虛脫して危く急のときへ大服の独參湯と用へし○産後ふ何の病なくくとも菜と服もちく養生をび四君子湯ふ陳皮藿香縮砂黃芩を加へ用ゆ○産後氣血大に虛して上忌の內身と慎しまず誡と守らびして發熱汗出手足痛しつゝき病となること歲労ふ云十全大補湯と用て加減をべし

○小兒科

小兒の病を治をるにへ古人皆難しこゝ誠ふ誡の一法と闕故ふ

れと啞科と云ものこゝらば脈氣
いまだ定まらずして浮沉極て変
しやすし面部の外候虎口の説のごとふ
闕べうず此等れ依れば其証と
極るに成ざるべし

○面部形色之圖



左の腮は肝の属を色青と順とし白
と逆とす赤は肝経の風熱と主ごう
青黒は驚風腹痛と主ごう淡赤ろ
潮熱痰欬とまる○右の腮は肺の属
を色白きと順とし赤きと逆とす
赤きに甚だきは咳嗽喘急と主る
その色頬へ傳るは次泄汗驚癎骨
或は通ぜざるに小便赤く澁す
を色赤きと順とし黒きと逆とす
青黒きは驚風腹痛瘛瘲と主
ごる少し黄なるは脾の属○鼻は脾に属
熱をるに主ごる深黄
す色黄なると順とし青きを逆とす
赤きは脾經の虚熱と主ごる或は鼻燥き
なるは小便通ぜざるに属す色
出るに赤のは○頬は腎に属す色
黒きと順とし黄なると逆とす赤
きは腎と膀胱とに熱ありて小便
通ぜざるごとし

小兒三歲より内へ虎口三關の紋理を見て病を知べし

虎口三關之圖



男ハ左女ハ右乃手を取人指ゆびの本乃節を風關と中の節を氣關とし第三の節を命關とこれその紋風關みあしハ病わろく治し陽氣關ハ命關ふあんしてあまこハ病重しとゐ病已ゐ深く治しがたし○紋乃色紫ハ熱し○赤ハ傷寒これ青きハ驚と主る○白きハ疳乃病○黒ゐ惡氣に中らるとそ○黄ゐハ脾乃困しと瘦るなり○淡赤きハ寒熱表れゐる○深紅ハ傷寒瘡疹を主る○紋もつれる時ハ病久しくなり○細ゐこれを腹痛多く啼乳食消でゞ氣ふて直ゐ指甲に入ハ驚風と主る惡症ゐる黒く墨の如くなるハ諸病ともふ治しがたし必ず死す○右虎口三關乃義或ハ是と或ハ非とこゝろもとく小兒を治るもの捨ざる所なり男女ともふく左右のゐろちあうことくを亦左右ともに參へ驗ぶべし左ハ心肝ゐ應ど右ハ肺脾ゐ應ど

○小兒乃脉法

小兒三歲より後ハ醫者の大ゆびぐうを用て兒のすべ關尺と按候

ふかう脉の數呼吸の間に六七至
と常脉にて。こゝによう數多きを
熱ようにて是よう數少きと寒さとに
○浮數なるは風熱ようにて。虛濡は驚
風●緊弦は腹痛●弦急は氣和せず
牢實は大便結ぼ●沉細なると宿食消せず
遲と虛と●沉實と積と●單細
い疳勞なり●右寸關尺の脉法三歲
ようにとくと浮沉遲數と辨
へ寒熱虛實とを察すべし十二三歲よ
つて以後は大人に法と同じうす
甘連湯 産出して其侭用ゆべし
黃連一文 甘草六分右二味絹ふ包こ
熱湯にて振出して用○兒生れ出る

と其侭軟なる絹又は綿と指ふ巻
て兒の口中にある惡き汁穢たる
毒を拭ひ去て此藥と用ゆべし或い
ふく水飛しなる辰砂一分ふ蜜少
入て煉用ゆ但し火あること勿
辰砂火とこれば人と殺をこれ心と
定め驚と鎭め毒と去の良法なり
加味五香湯 小兒胎毒にして頭
或は遍身に名りものき瘡と生ずると
治ず 沉香 木香 乳香 丁子
薑香 升麻 葛根 連翹各一ふ
木通 大黃各五分 右十味煎ず
○一方に黃連青皮甘草と加へ煎湯
ふて振出し常に小兒ふ用て胎
毒と正し疱瘡と遁るゝと云○此方

小児よ多く用べき某ひ非と胎毒
内み深く癪疝外に多きハ用べ
それも久〳〵服をべからず今押並
て小児ことと用ゆその誤ま来
るもの久〳〵き誠ニ戒くべし〳〵

○急驚風

古み陽癇と云ハ全て急驚風初
心膽ニ素より積熱ありて陽氣盛
るの又外風寒に感ずる時ハ陽と閉
て發せず故に神志〳〵く驚き乱
まて此証となす○急驚ハ脉ハ浮
數洪緊なり

○加味敗毒散　急驚風初て起ま發
熱〳〵手足搐搦上吉鼠〳〵支張ると治
ま○かハ人参敗毒散ニ全蝎白姜蚕
白附子地骨皮天麻を加へ共ニ十五味
生姜と入煎ど○風邪熱甚〳〵く形氣
共ニ實とる者の初發ニ用べ〳〵

○鎮驚散　急驚風搐搦掘疼嘔吐熱する
者と治ま　天南星　防風　蝉脱
薄荷各等分　甘艸少右五味姜と入
煎ず急驚風喘嗽風疹乃ものと治
とる要方なり○右の二方たゞひ實ニ
証の者といへども驚鎮てゝしべ則ち
茶を止べ〳〵過〳〵用ゆべからず況や虚
ふめ〳〵ざるとや○血虚肝火ハの四物
湯と用ひ釣藤鈎と加へ驚と鎮る
薬と多く服して脾胃虚寒するハ
六君子湯と用ひ丁子木香と加或ハ

補中益氣湯を用て調へ理すべし

○慢驚風

古ふ陰癇と称ぞるへ今れ慢驚風
くん也生付弱く心臆れ氣盛なる
ぞ〻て邪氣是よ客つて慢驚乃
証とする或へ脾胃虚し吐瀉〻を
るの後又へ急驚風久〻く愈ざる
虚そるより皆よく慢驚ごろの急驚
へ多くへ實熱〻ん治し易慢驚ろ
皆虚熱〻ん治し難し○慢驚乃
脉へ沉遲散緩なろ

醒脾散　小兒吐瀉し止ず慢驚風
と治を　人參　白朮　茯苓　木香
全蝎　白附子　天麻　丁子　各等分

甘草少右九味美姜棗と合煎ず○脾を
補ひ驚ろと治し食を進るの方なろ

虚實甚ときふの宜しのす

補脾益真湯　小兒生まれ付弱く外へ
實〻て内虚〻乳と吐〻養の色青
くもて慢驚風ところ目を見つめ手足
搐搦と治す　木香當皈　人參　黄
芪　丁子　柹子　陳皮　厚朴　肉豆蔲
草菓　茯苓　白朮　肉桂　半夏　附子
各七分　全蝎　甘艸　各三分　右十七味生
姜を入煎ど○脾を益乳食と消し
虚寒と温め補ふの劑なり元氣大な
虚そる者に用ふ○脾胃虚し肌
熱〻口乾き吐瀉して慢驚ごろの
とするに七味白朮散を用ゐ○胃の氣

和せざれば吐瀉をるの或いは吐利止て後煩渇するには七味白木散と用い木香と去黄芪白扁豆と加へ煩渇を熱すること甚だしくは再び竹葉と加○吐瀉久しく止ざる慢驚をるの黙々として語ず常に睡て睛と顫り手足遍身冷るには附子理中湯用ゆべし吐瀉して乳食と思わず虚冷するには四君子湯ル附子木香陳皮と加へ用ゆる小児の諸病に剛剤と用て後ル慢驚をるの者ル六君子湯と用ひ附子と加べし

○疳疾

甘く肥膩つくる物を多く食し脾ル停て虫を生じ変じて疳をる五疳のひら有て五臓ニ属をとのぐも其初脾虚して後四臓ニ傳へて五疳をる脾胃虚をる時ハ五臓の氣を摂ることを能ずして疳を治をる要法也○脈小児の脈ハ単て細なると疳ル消疳飲 疳の病身熱し面黄ばみ腹大ふくれ青筋いで痩弱つくると治を人参 白朮 茯苓各一五 陳皮 青皮 砂仁各七分 神麹 胡黄連各五分 甘艸三分 右十味煎ず○脾と補ハ食と消し虫と治をるの方なり初發の者ニ用ゆべし病久しくして虚甚しきふいらへべらず

生熟地黄湯 疳にて眼閉て開ず目のうちに朦霧あると治す生地黄

熟地黄各三匁 川芎 當歸 赤茯苓
地骨皮 天麻 半夏 枳殻 杏仁
黄連各一匁 甘草七分半 右十二味去
つが黒豆十粒と入煎ず○疳熱上ゟ
實ー病久ー かゝざるものと治を
脾胃虚するもの或ハ肝腎不足乃
者ゟ用ゆべし○小兒の疳疾ハ大
人の労証と同し元氣大ゟ虚さ
ハ時ゟおいて早く是と治すべし虚
極て証変ずるに至ていく名医ニ之
ごとを治ー易しことせず誤て療で
將來百年の命と折くことみ○疳
と治をるに脾と補ゟと先とゝて
兼てハ積と消ー虫と治をべし四君
子湯六君子湯六味丸補中益氣湯の
類と擇び用ひ或ハ積と磨ー虫と去の
藥と加へ或ハ参木肥兒丸と兼用てこれ
と治をべし

○癖疾ゟこの
乳食調らずしべ内ゟ積滯つ邪氣
相搏て此証となす兩の脇ゟ塊のご
癖疾ー○漸ー飲食減脾胃虚ー
て救ひ難きに至る病深かゝる時
よおゝそ是と治をべし○脉沉細のと
癖疾ゝす

消癖湯 小兒の疳の癖疾發熱口乾ご
小便赤きと治す
茯苓 柴胡 黄芩 人參 白朮 半夏
莪朮 猪苓 沢瀉 三稜
甘草ゟ右十四味姜棗と入煎ず腹
中に癖塊ありて發熱ー小便赤き

者を治す病久しく脾胃虛する
ふい用ろてこゝろうし○癖疾久しく愈ず
或ハ塊を伐氣を損ずる者ハ六君
子湯補中益氣湯の類ひ宜きに隨
ひ是を用ひて正氣を養ふ時ハ塊て
自ら除く或ハ參木肥兒丸を兼用て
その癖をこゝろべし

○痘瘡

小兒胎内にある時五臟の血臟ちて
物を食ひ其毒子れ命門に伏し隱
として生まれ出て後時の熱に遇或ハ
乳食に傷らるゝ或ハ驚き恐るゝ由
て命門に伏しる呀の毒氣外に
發することをなす是を疱瘡といふ
○脈起て緊數もぐいの浮大ゆるして數と吉

ゝん沉細よろしてて遲を惡しとす收
靨ろ後ハ脈和緩ると吉とゝん洪
數ると宜からずゝん

○痘瘡の日數

○發熱三日ゝとろ○見點三日でそろひ
○貫膿三日ゝとりる　○起脹三日やまとげる
○收靨三日かゝる　○右ハ日數の常にして病の正き者ハ
早く重き者ハ遲しゝかそ此日數
ゝ拘るべからず

外感葛根湯　瘟疫頭痛發熱痘疹いまだ出ざる傷寒に似て疑ひき
時ハこれを用ゆ　○方ハ傷寒にあり　○山査子牛房子を加てハ冬の寒ど
る月ハ紫蘇を加へべし痘瘡火ハ

みてと出るふい用ゆべし
參蘇飲　風寒に感じ熱甚しく
頭痛咳嗽する時是と用ゐ表和して
痘出易し方へ傷寒よりも
惺々散　發熱の初め疑りき時生
ま一付虛弱なる者ふい是と用ゆべし
○方ハ四君子湯よ桔梗細辛瓜蔞根
と加へ共よ七味姜薄荷と入煎ず
十神解毒湯　身大よ熱し痘未ざ
出揃ざ咽渇き水ご欲し小便赤く
澁る者と治す　當歸　赤芍藥
紅花　牡丹皮　生地黃
桔梗　木通　連翹　川芎　各等分　右
十味燈心と入煎ず○實証熱盛の
もの用ゆべし

透肌散　氣弱くして痘出盡さゞる
を治す　紫草一ゑ木通一ゑ半　芍藥
人參　蟬脫　升麻　甘艸　各五分　右七
味煎ず○熱邪を大小便よ利をる
乃方也熱なき者大便利る者ふ用ゐる
神功散　痘已ふ出て未遍身赤く血ご
遍身ご界目して或ハ吐瀉こるこ
或ハ吐血一血ご血いて或ハ
治を　黃芪　芍藥　生地黃
紫草　紅花　牛蒡子　各等分　右一胡
甘草各半分　右九味煎ず○痘毒くゞ
くゞーく熱盛なる者ふ用べし
保元湯　痘起脹ざる治す黃芪
三ゑ人參二ゑ甘草一ゑ右三味姜と入
煎ど○頭額起脹せざるふい川芎を

加ふ○面起脹せざるんべ升麻をくわふ○
胸のあたり起脹せざるんべ桔梗を加ふ
○腰膝起脹せざるんべ牛膝を加ふ○兩
乃手起脹せざるんべ桂枝を加ふ○此ノ方
内外を固し毒を解す虛証と治とる
乃要方なりよく虛實を弁へ明めて
虛証あること差ざんべ前ノ後ノ
至るまで此方を用ひ加減をべし
内托散 氣血虛損して或ハ風邪穢
毒に觸て痘陷て出ず或ハ出て
匀しく快よからざると治す
人參 當歸各二匁 川芎 防風 桔梗
厚朴 白芷 甘艸各一匁 木香 肉桂
各三分○右十一味前ノ如く煎じ○是風邪穢
毒にふれて陷て出ず或ハ出て貫膿ざる者ハ黄芪

六匁 甘艸一匁 右二味煎ノ服をべし痘
淡白て貫膿ざるに十全大補湯ノ宜し
起死回生散 痘七八日ノ至て忽ち
癒ノて黑くなり腹の内へ收ノ入遍
身を痒破て死せんとするを治す
當歸 川芎 芍藥 生地黄 升麻
紅花各ホ分 右六味煎ず或ハ酒を
水とホ分ノ入煎ずるも吉○血を活
熱を清し毒を拔の方なり○若寒に
因て色黑くなるんハ肉桂一味粉ハし
て湯かて用ゆべし○氣虛して痘の
色灰白になるハ四君子湯を用ひ
黄芪當歸肉桂をくわふ
回天甘露飲 熱毒解ず或ハ毒を
解をること經ず膿と化ず至つても

収を發熱蒸々するを治を　百沸湯二碗を用ひ白砂糖半盞を入れ立てゝ服をしばし熱退き瘡靨也

○痘湿を潤ひ有て飲ざるは内虚ゟ保元湯を用ひ白朮茯苓を加ふ

消毒飲　痘収て後餘毒れ諸證を治を　牛蒡子四匁　荊芥　甘艸　各一匁　防風五分　右四味煎ぜ熱毒瘡毒を治をゝれ黄芩犀角を加へて用ゆべし

こゝと犀角消毒飲といふ○痘瘡乃証氣血の虚ゟ因てゐんところの變証誠ゟ多し四君子湯四物湯補中益氣湯十全大補湯の類ひよく証をてゞめ加減してこれと治をゞ或ひ表裏共ゟ虚をるあり或ひ表裏共ゟ寒

ゟるあり又ひ重表寒牙と咬の証あり陳氏ゟ木香散十二味異功散附子理中湯の類ひ証ゟ隨て用ゆべし

○麻疹　そもゝ六府腸胃の熱毒肺と蒸外風寒ふ感じ或ひ乳食調ふゝざるゟ因ゟ熱ゟ外ゟ發して麻疹ゟる表ゟ疱瘡ゟみ似ゟうゟるゟも裏ゟ各別の物也是を治するゟよく出をゝとゝてはしゝ生死多くゟ餘毒又解し易ゟ發熱初りて起る者ゟ升麻葛根湯　發熱蔥白を加へて肌を解をべし○痘瘡の初熱を治をる方と参考へてこれを用ゆべし共ゟ大み

異なることなし○方は傷寒にあり

○消毒飲　麻疹已に出見られ一日にして又沒む者は風寒を觸られて麻毒内に攻るなり急み此方を用ゆべし或は麻疹退くべき後風寒に感じそうなりて亦これを宜○方は瘡瘡ふあり

○犀角解毒湯　麻疹已に出ること大小便ともに血を出し或は吐血衄血或は二便閉渋て麻疹多く出て赤く痛み熱渇するを治す

犀角　牡丹皮　赤芍藥　黄連　黄芩　黄栢　山梔子　各二錢　生地黄五分　右八味煎ず○麻毒盛ふして實熱ものに用べし虚する者或は血大に出さる後ふに用ゆべからず○血熱にうかされて諸血を出す者には四物湯を用ひ犀角を加へ脾胃弱き者には地黄を去べし○麻疹前ふる後すべて潮熱退ざる者を血虚血熱とし四物湯に地黄を去紅花黄芩を加へ用ゆ

○十仙湯　疹後の餘毒を治す　柴胡　葛根　玄參　黄連　黄芩　山梔子　陳皮　茯苓　枳殻　生地黄各等分　右十味姜を入煎ず○熱毒いまだ去ずして虚する者に用ゆべし微しても虚すべからず○麻疹を治するに豆らべ與へべからず○初熱いまだ虚せざる毒氣尚ある者に用ゆべし

○人參白朮の類を忌とす

うつざるれば敎也然ども龍氏猥に言葉を添て人の眼目を拘泥せむるの詞と頼るのみ氣血虚弱するときは毒と

消ド热ヲ除の劑ヲ過シテ死ヲ催促
ヲクニ至ル龔氏ガ筆頭ハテンニ丹ようヲ利ー又實ヲ
ヒテ害ありこいつで豈此一病のこころ
限らんや實ヲ實マーめ虛ヲ虛ニせし
るハ聖人の誡ひる所群賢乃詳ふかを
る所也仁心ある者ハんぞ是ヲ忍ぐん
や此証ヲ治ヲる者古人補瀉の意ヲ
求てこれヲ治すべし龔氏ガ劒術ヲ慕
ひてゐま兵法ヲする八誠ヲ大疵れ基也

○丸散乃茶付雜方

六味丸　又地黃丸トも云　腎虛ー
病ヲなひかへ皆用ベー水ヲ壯にー
火ヲ制ヲるの茱也　熟地黃八十目
山茱萸　山藥各四十目　茯苓　澤瀉
牡丹皮各三十目右極細末ーて煉
蜜ふて丸ど白湯ふて用ゆ又塩ゆ
或ハ酒ーて用ゆるヲよし痰あるハ
かハ姜湯にて用ゆべー

八味丸又八味地黃丸トヌ腎の水火
共ヲ虛ーるヲ補ふ者に用ゆ又命門の火
衰へて脾胃虛寒ヌる者ヲ治ス○先
乃六味丸ヌ附子肉桂各十ヌヲ加へて
六味丸ノ如ヌ丸ぞるなり

木香檳榔丸　一切の撫積胸膈快よ
からず腸胃伸ず氣滯積塊ある者
ヲ治ヲ
黑牽牛子二十目　大黃三十目
木香　檳榔子　黃連　陳皮　香附子
枳殼　莪朮　黃栢　青皮各十ヌ右十一
味水ふて丸ド姜湯ふて用ゆ○一方

に當皆十五文を加よ○實証乃人氣
爵一大便結一腹脹積塊ある者
に用ゆ虚弱かいのりらめべらず
紫金錠　又解毒丹とも云一切乃
毒をげし傷食腹痛霍乱吐瀉心乃
痛ミ喉痺歯齒痰氣小児の急驚風
その外諸証を治ること盡く述ぐ
一奇妙乃方なり
五倍子三十目　續隨子十文　大戟十五文
麝射香三文　右五味細末一正月の餅
或ハ五月の粽を用ひ糊とし丸ど此
藥と調合をくれ五月五日七月七日
九月九日此日身を清め香をたき調
合をるなり婦人僧尼鷄犬等と近
ばくべらず

參朮肥兒丸　痃ヲ消一食を化一
癖を治一熱を去肝を押へ脾を補
ひ食を進め虫を治し肌膚を潤一
元氣を養ふ　人參　黄連　山査子
神麹　麦芽　各三文半　白朮　茯苓
甘艸　各三文　胡黄連　五文　史君子　四文
廬薈　二文半　右十一味極細末一して糊
ふて丸ど丸數ハ兒の大小を見て加
減をべし
養胃丸　酒積氣鬱腹乃痛宿食
虫積不食を治をよ　木香　檳榔子
肉桂　陳皮　白朮　茯苓　香附子
莪朮　三稜　厚朴　各十文　甘草　二文
右十一味糊ふて丸ど○虫積聚を治
と虚人ふハ酧酌すべし

返魂丹　家方秘傳○心痛腹痛小
児の五疳五嘔五腸癪瘕の症を治す
壹腸くい食こゝしでる腸の病かう
その外氣付に妙のう　熊膽　陳皮　黄連　雄黄　鹿茸　木香
鶴虱　雷丸　莪朮　三稜　各一匁二分
大黄酒にひたし　胡黄連　黒牽牛　半八生
各六分　半八炒
五リ　丁子　乳香　枳殻　黄芩
青皮　各二分三リ　赤小豆二十七粒生　白丁香
赤小豆ノ重サ　甘艸二分五リ　右細末ニ麺の粉
蕎麦の粉等分に合せ丸ごて辰砂ごて衣ごす
豊心丹　家傳名方　又沉鹿茸丹ごも名
〳〵方病よは　人參　縮砂　木香
丁子　藿香　沉香　白檀　挽榔子
草撥　各匁　桔梗　川芎　各一匁五リ

鹿茸香七分五リ　樟腦　龍腦　各三分五リ
甘艸一分三年上茶十五匁　右細末〳〵
三年にるゐき餅を糊ゐて丸ご丹
と衣ごゝ
錦袋子　本方秘傳　蠲金　外麻
各十両　白扁豆　山慈根赤白　五倍子
二十目　牛黄　射香　各六両　安息香
木香　草撥　縮砂　白檀　乳香
没藥　丁子　雄黄　辰砂　甘艸　各二両
右ゐら米の粉糊にて丸ご衣ゐ干
い製法ごゝく紫金錠ふおるゞ
○一切の氣付腫物ご貼く功能悉く
ほごしごゝ
安神散　一切血の道乃氣付ゐり老
人虚人産後の氣付ゐりちゆゞ

茯苓　茯神　黄芪　遠志各一　人參
桔梗各五分　山菜　木香　辰砂各二分
甘艸一分　右十味細末〳〵白湯に二
用ゆ　神を安じ氣を正し精を固く
そるの方
香薷散　暑熱霍乱吐瀉腹痛むと
治を　香薷十匁　白扁豆五匁　厚朴
陳皮　茯苓各三匁　黄連二匁　甘艸　五分
右七味細末〳〵白湯にて用ゆ又水
ふてと用ゆ
延命散　虫積腹の痛み食傷霍
乱胸のつへ不食ふはし　○此薬諸病ゐ
よ〳〵と言傳へて用ひ來る〳〵久〳〵
然るに實証のへ一往虫積と
押ぐんこと薬味の苦きとゐなり

虚人常に用ゆべき薬にあらず
白朮　芍薬　良姜各五匁　丁子　人參
桔梗　防風　茯苓　熟地黄　山薬
厚朴各一匁　陳皮　乾姜　青皮　莪朮
三稜各三匁　川芎　木香　胡椒　蓽撥
枳殻子　阿仙薬各二匁　胡黄連七分
右二十三味細末して用ゆ
○世間よ定齊と云ひ此薬ゟ
和中散　頭痛腹の痛泄瀉むかひ
ほそくちうふよう
白朮　香附子　陳皮各十匁
縮砂　藿香　各五匁
右粉にしてさゆよて用ゐ
藿香合香圓　諸乃急病痰涎進ぐり
盛なる者を治を　沉香　安息香

麝香 柯子 木香 草撥 蘋合油
白朮 白檀 薫陸 丁子 龍腦 各
十匁 辰砂 犀角 各五匁 右十四味安息
香蘋合油の外十二味を極細末し
合油を入よく煉合せて又蜜を入ゆるく
しく丸十二味乃粉薬を入丸ぞるなり●
卒中風或ハ小児の急驚風痙攣つ
ある者を治す諸の急証乃氣付み
用ゆべし一服一久ちく用をかゞず
延齢丹 一溪老翁之秘方
第一痰みよし○氣の弱きのハ氣力
と強く氣をとりぞく〳〵○痰みて咽の
いさむやうハ○血のこもれ氣付よ
○右肺氣乃方ハ常ハ用ひくよ

肉桂 縮砂 丁子 沉香 辰砂
各十五匁 白檀 草撥 各一匁五分 木香
桔梗 乳香 訶子 各七匁 甘草 九匁
麝香 三匁 龍腦 二匁四分 右十四味
煉蜜かてこしと調へ先ま人乃十二味
と細末して龍腦麝香乃ちりとそろ
乳鉢ゑ煉蜜を少〳〵入とりて麝香
と入粒のそろひぐあいになる程よくそり
又龍腦を別ゑとりて後ゑ脳麝二味
と一ツか合てよくすり合せ蜜少〳〵
づゝ入てどろ〳〵となして右の茶末
と入をり合せ又茶の白かてよくねき
合せ練終つて塗物ゑ入封じ置也
丁子圓 此薬乃虫には腹冷痛むゑ
妙なりてよし酒と過して後むう

びけみよし其胸のつゝ積のつゝ癊ゑ
用ゆ 丁子 莪朮 陳皮 乾姜 各二匁
青皮 二匁 沉香 砂仁 各二匁 甘草 五分
右八味細末して蜜ふて務ゐ
家傳明目膏 一切の眼病を治ゑ
ゑ愈ごと云こしなし奇妙乃黙薬也
炉岩石 海螵蛸 硼砂 各十匁 辰砂
龍腦 二匁 右五味極細末して煉
蜜みてよく搗てゑ
しく水に擺出しあらのもの
洗眼散 諸乃眼病を治ゑ洗薬也
當皈 黄連 各一匁 赤芍薬 防風 各
杏仁 三分 右五味剉ゑ絹ゑ包ゑ熱
湯うそよく振出して洗ゑ
萬病無憂膏 打損切痲一切乃名

りゑき腫毒癰疔瘡節瘭瘡乃類
と治ゑ毒浅きものよく散ず毒
深きりのゝ早く膿ゑ膿又已ゑ膿潰へ
るゝゑゑ膿ゑ排ひ肉ゝ生おてよく
愈すゑ其効乃奇妙ゑるこゑ盡く述
ゞゑ
川烏頭 草烏頭 大黄 各六匁
當皈 赤芍薬 白芷 連翹 白歛
白芨 木鼈子 烏薬 肉桂 各八匁
槐枝 桃枝 柳枝 桑枝 棗枝 各五匁
苦參 皂角 各五匁 右十九味剉ゑ
胡麻の油二斤ゑ用て右の薬ゑ油ゐ
入浸そゑ一宿しそ炭火ふて煎しゞ
薬乃焦色ゑるゑ時火ゑ下しゑ
絹ふて油ゑ濾滓ゑ去そのゝちゑ又
吹ふかけて煎しゞ水飛しゑる丹百

二十丸を火で入て槻樹柳の撓を用
ひて續陸〳〵と手と住ずく小攪まぜ
よく煉もむる也油一滴を水に入れて見
まい珠となりてかゝる時よ火ようを
おろして乳香没薬各四匁を粉みして
火ようの下しゝる油れ中へ入よく攪まぜ
〳〵收貯へ火毒と退けて用ゆ

○

五木湯 中風乃痺れ或ハ半身遂には
ざるによりて 椿枝 槻樹枝 楸樹枝 楡枝
柳枝 桑枝 各等分右煎一浴とるふ

十仙湯 中風半身遂つず身をびを
疝氣脚氣腰膝痛むを治を

桃仁七丸 白芷 蒼本 稀薟 各五匁
丁子 甘松 白檀 各四匁 菖蒲根
石菖根 桑白皮 各三 右洗湯に用ゆ

○日用食性 能毒

○狗脊 平ふして毒ハ腰背痛こ
強ふ筋急ふ緩つ寒湿乃痺きれ
よふ○蕨寒ふして毒ハ熱を去水道
を利す久〳〵く食をゝれべ氣を壅き腹
脹目暗こ髪落る也○牛房寒ふみして
毒ふる〳〵腫毒と消ゞ齒の痛とやみ
風毒及び足緩つ弱きゝよし生ふて
食をゝれべ人とをちく吐をもよふ○大根
温ふ毒ハし氣を下し食と消ゝ痰を
化〳〵酒毒と解す多く食をゝれべ氣
と動ゝ生姜よく大根の毒とけそ
○蕪菁 温にして毒ハし氣と益中
と通ゞ食と消ゞ嗽とやめ腫を去
熱毒と解す○胡蘿蔔温ふう毒ハし

氣を益中と補ひ食を進め胸乃間
及ひ腸胃の氣を行〳〵五臟を安ず
○芋 平にて小毒あり熱を去渇を
止め腸胃を緩〳〵血の滞こを通を
多く食をれバ氣を滞ら脾を困
めて化〳〵ゞし○零餘子 溫あり毒
なし虛損を補ひ腰脚を強〳〵腎を
益飢ざるをしのぐ○竹筍 微寒毒なし
胸を利し氣を下し熱をさう痰て
消ど多く食をれバ冷血及び氣を
發をす○款冬 温あり毒なし咳嗽を止
喘息を定め熱を去痰を消し心肺
を潤し五藏を益す○蘘荷 溫小毒
あり諸虫乃毒を消し蛇毒を解す
瘡にはし多く食をれバ神明を薄

し菜力を損ど○土筆 温あり毒
なし風寒を散ど○地膚 寒ふして
毒なし泄瀉をとゞめ惡瘡の毒を解
し氣を和げ小便を通ず○芹 平
あり毒なし血を保ち精を養ふい
熱を去石菜ゐ毒を解を黄疸及び
女乃帶下山崩漏ふはし赤きゞい人
を害を食ふべからず○菠薐菜 冷也
毒なし胸を開き氣を下し渇をやめ
腸胃の熱を去酒毒を解を多食べ
脚弱く腰痛しむ婦人の鉄漿と大
ふ反を歯を染て直ちに此菜を食へべ
忽ちに死をもし歯を染て他物を
食ひ後ち此菜を食ふべからず

誤つて同食をくうず○雞腸草　平
みーて毒を消　腫毒を消ー遺溺を治
す常に食ふて　人を益あり○莧　冷
なり毒をー熱を去虫毒を消ー大
小便を通ど痢病みはし○馬歯莧
寒にーて毒を　血を散ー腫を消ー
大便を通ーじー毒を消ど淋病女乃
帯下にふー多く食へば人を害あり
○萵苣　冷也微毒あり　胸を開き筋
骨を堅く五臓を通ーじー虫を殺ー小
便を通ど多く食へば目を昏くす
○蒲公英　平にーて毒を　水腫を治
ー疝氣にはし女の乳癰を治す
○藜　平あり小毒あり　虫を發ー瘡
腫みはし補益の功を　多く食をくうべ

○五加葉　温みーて毒をー皮膚乃
風濕を去胸膈の痛を疝氣によ
○枸杞　温みあり毒を　風を去熱を消
ー眼病を治ー麹類乃毒を解を
○葱　温みーて毒を　風寒濕を去
中を温め毒と解を大ふ人を益有
虚氣上つて及び汗出るりのい多く
食をくうべし○慈姑　微寒毒なー
病を治をるの功少ー多く食すれ
ば諸病を発を○烏芋　微寒毒な
ー胃を開き食を下し熱を去渇を
止多く食へば腹脹痛む○蓮根　平
みそて毒を　熱を去血を去食を消
ー渇を止酒毒を解を○生姜　温也
毒を　風寒を除き咳を止ー

痰を去胃を開き毒を消ど
○天木麥冬温みて毒を風を去積
と消を女の虚労にはし○山葵温
みて毒を寒を去内を温め食
を消し痰を去心腹の痛よし
○山椒温みあり毒ある風寒を去中
を温め腫を消し温を去多く食へば
氣を損ず目を病○胡椒大温ごく
ふ氣を下し中を温め痰を去食を
消ど多く食へば肺を損ず目を昏
くす○麥冬温ふちく毒を大小腸の
邪氣を除き中を利し虫を殺を多
く食へば胃を傷る心痛○芥子温也
毒を氣を下し痰を消し肺を通ず
多く食へば○番椒温みて
毒あり疝氣を治し虫を殺を多く
食をべからず○眼笛莢子平みあり毒を
風を去熱を除き痰を消し燥を潤す
○胡麻平にして毒を補ひ氣
を強くし耳目を明らか
にし○大豆温也毒なし
筋骨を強し○小豆平にして毒なし
渇を止膚を潤し腫を消し大便
氣を下し内を寛し○黒豆平にして毒なし
と通ず多く食へば氣を壅ぎ痰を生ず
○黒豆平にして毒を調へ氣を
通じ水を利し熱をさり食を消し
諸毒をけす○小豆平にして毒なし
熱を去渇を止小便を通じ酒毒を
解す多く食へば膚燥くことをおす
○豇豆平なり毒なし中を理め氣を
ほし渇を止胃を健ほし精を生ず

○緑豆 寒にして毒ほし氣をくだし
食を消し熱を去毒を解すと○豌豆
平なり毒なし寒熱を治し小便を
通し渇をやめ腫を消すを多く食へば
氣病を生ず○蠶豆 平なり毒なし
胃を快し藏府を和す○刀豆 平なり
もて毒ほし中を溫め氣を下し腸胃
と通ず○茄子 寒なり毒なし熱
と去腸を寛くし血を散し痛を止め
労氣にはし多食へば氣を動し人
と損ず○越瓜 寒にして毒ほし熱
と去渇をやめ小便を通し酒毒を解
し多く食をゝず ○胡瓜 寒也
小毒あり熱を去渇をやめ小便を
通ず諸病に害あり小児ふかく用ゆ

べからず○冬瓜 微寒にして毒なし小便
を通し腫を治し熱と去渇を止多
く食へば人を疲しむ○甜瓜 寒也
小毒あり熱を除き渇を止小便と
通ず多く食へば黄疸と病眼病と
發す○西瓜 寒にして毒ほし熱と去
渇と止中を寛し氣を下し小便を
通し酒毒を解す○千瓢 平なり
毒なし熱を去渇とやめ悪瘡を治し
水道を通し心肺を潤す○松茸 平
みして毒ほし小便濁つまた或ひは頻には
○麦蕈 松茸と同し○磨菰蕈 寒
なり毒なし氣を理め痰を化し腸
胃とほし多く食へば氣と動し病と
發す○糙菌 平にして小毒あり

中を温め積を消し痛をやめ虫を治す
○椎茸 温ふそく毒あり氣を塞き
虫を生ず多く食べば裏の黒き
に毒有○木耳 平也小毒あり氣と
益志さゝを強を多く食をべうず
冬瓜乃汁みて木耳の毒を消す○
石茸 平にもて毒るゝ精を益目を
明らかにと多く食へば大小便を通らん
○昆布 寒ふう毒るゝ積を破り水と
通じ悪瘡を治をす多く食へば人を疲む
○海帯 寒也毒なし風を去水を下す多
食をべからず○帯菜 寒ふゝて毒なし
遺精を治し女の帯下よし○崎蘆
温ふう毒るゝ中を温め食を消し胃
乃氣を強らす○紫菜 寒にもふく毒

うゝ熱を去咽を利し氣の滞を消
去○苔菜 寒ふう毒なし氣とゞ結
塊を消し痰を去多く食へば脾を破
○水松 寒にして毒なし水腫を治し
溪毒を去○海藻 寒ふう毒るゝ
結核積聚を消と多く食をべからず
○柑子 寒にして毒なし腸胃乃熱
を去渇を止小便を通ず○橘 温也
毒るゝ肺を潤し渇をやめ胃を開き
胸を利を多く食へば痰を生ず○柚
寒みて毒なし腸胃の悪氣をさう
食を消し酒毒を解○金柑 温ふう
毒なし氣を下し膈を快くし渇をやめ
酒毒を解す○石榴 温ふゝて毒る
ゝ渇をやめ虫を去痢病腹痛よし

多食へば肺を傷つて齒を損ず○梨寒ありて毒は熱を去渇をやめ痰を消し咳を治ず一大小便を通じ噦毒酒毒を解す○林檎温ふして毒は氣を下し痰を消し咳を治し渇をとゞむ多く食へば氣を塞ぎ瘡を生ず○柿平ありて毒は渇を止む多く食へば齒を損じ腸胃を厚し腎氣を補ひ腰脚筋骨を強す○梅平也毒は渇を止む多く食へば齒を損じ筋を傷る○桃熱ありて毒は渇を止む多く食へば齒を損じ肺ふ病ある者にはし○杏熱ありて小毒あり多く食へば心ふ病ある

ものにはし多く食すべからず○棗平ありて毒は脾に病ある者にはし多く食へば齒を損じ生にて食へば痰を生ず○蒸るに脾氣を養ひ津液を生ず○枇杷平也毒は氣を下し胸を利し熱を去渇を止む多く食へば痰を生ず○脾を傷る○葡萄平にして毒は筋骨を養ひ濕痺を治し氣を補ひ力を強し小便を通ず○楊梅温ありて毒は渇を止腸胃を通じ痰を去食を消す○榧平にして毒は痔を治し虫を去食を消し筋骨を助け目を明らかにす○菓蘿平也毒は精を益目を明らかにし骨節を強し腰脊の痛ふを除き肝腎を補ふ○鴈粉平にして毒は熱を去

渇とやめ胃を開き食を下し酒毒を
解す○小麥　微寒毒なし熱を除き
渇を止小便を通ず心の病ある者は
よし○大麥　微寒毒なし氣を益中を
調へ食を消し一渇をやめ氣を下し積を
消す○蕎麥　寒にもそ毒なし風熱
と去積滯を化し氣を下し腸胃を實
○穅　寒也毒なし氣を益熱を除き脾
胃を養ふ多く食へば冷病を發す○粟
微寒毒なし腎を養ひ虚を補ふ渇を
やめ熱を去小便を通ず多く食をれば
氣と滯とを生ず○餅　温めて
氣と滯とを益大便を堅くし小
毒なし中を温め氣を收む小兒病人みな共
便を縮め自汗を止む○豆腐　寒也小毒有
よくこれを忌べし

中を寛し脾胃を和し大腸の氣を
下す多く食をべからず大根　辛く豆
腐乃毒を解す○蒟蒻　寒冷
毒あり渇をやめ下血を治し腫毒を
消す多く食をべからず人ゐ益のび
○麩　冷うろ毒なし熱を除き中を
寛し氣力をまし○味噌　冷やや
毒なし氣を和し諸毒をけし腸
胃を潤し大小便を利し五臓血氣
を調へ養ふ○醤油　冷也毒なし熱
と除き大便を通じ一切の毒をけを
多く食へば痰と生じ氣と動す○酢
温和して毒なし水氣と散じ邪毒
と殺し魚肉及び菜草の毒をけを
○酒　大熱やや毒あり風寒湿と去

邪毒を除き氣を行らし血を養ひ腸胃を厚し皮膚を潤す飲と過たゞしび諸病を生じ壽を失ふ○鯛温也毒なし腫を消し小便を通じ積を破て痔を治し虚労は○鱸平にして小毒あり腸胃を和し筋骨を養ひ水氣を治すを多く食へば病を生ず○鮸平也毒なし氣を調へ脾を助け食を進め五藏を利す○鱈平にして小毒有風を去水腫を治し小便を通ず多く食をべからず○比目魚平にして毒なし虚を補ひ氣力を益す○鰈温也小毒あり腎と清し脾胃を調ふ多食へば血を動ず○鶏魚平にして毒なし小便濁を或ハ澁て痛みはし多食をべからず○比目魚平にして毒なし虚を補ひ氣力を益す○鰈温也小毒あり腎と清し脾胃を調ふ多食へば血を動ず○鯨平にして小毒あり氣を正し陰を補ふ頭風みはし多食をべからず○魚師性味形色いまだ知ず小兒病人みだりに忌べし○鯖温也毒なし胃と温め中と和し多食へば風熱と動ず癢を生ず○鱒温にして毒なし胃を暖め中を和し多食へば風熱と動ず癢を生ず○鮭平也毒なし氣力を補ひ人と肥し健ふ○鮀温にして毒なし胃と温め中と和し多食へば癢を發す○鯖性味能毒いまだ知ず小兒病人みだりに忌べし○鯆

温ニして毒ハ胃と暖め痢を治す
多く食へば風熱をもて
鱮温也毒ハ中と温め氣と益多く食
そべうず○鮀平ニして毒ハ中と補
ひ氣とます多く食へば瘡と生ト脾湿と
動と○援魚温也毒ハ積と治ー虫
と殺ー氣力と益肌と潤す○鯵平ニ
もて毒ハ水腫と治ー痢病と治す
多食べうず○文鰩毒ハ難産かは
狂と治ー痔と愈す○鱠残魚平ニ
もて毒ハ中と寛し胃と健なす○
鱖平也毒ハこれと食へば疫病と辟
多く食をべうず○鮒平ニもて毒ハ
五藏と通と多く食へば内熱と
と生ず○銀魚平也毒ハ胃と補ひ
脾と健ハ水と利ー肺と潤す○鯽
魚平ニもて毒ハ中と和ー氣と益
○鯉平也毒ハ氣と下し渇と止水腫
と治ー小便と通ど多食へば内熱と
生す○鮒温ニして毒ハ胃と補ひ
食と進め痔と愈ー痢病と治す○
鯔温ある毒なー胃と温め冷瀉と
治す○鯵鰯平ニもて毒ハ人か益
めど多く食をべうず○海鰻平也
毒ハ悪瘡と治ー痔と已す多く食
をべうげ補養の功ハし○江鰻平ニ
もて毒ハ虚羸と補ひ労熱と去
虫と殺ー血と益○鯊温也毒なー
補養の功多ー諸病か害あーず
○鰌魚平ニして毒ハ中と温め氣

と益渇とやめ酒毒と解す○烏賊
平也毒ㇾ氣と益志ㇾと強くし經
水と通ず多食へ風氣と動す○章
魚寒れもつく毒ㇾ血と養ひ氣と
益此ものの消化しがたく多く食をぐ
うべし○海蛇溫也毒ㇾ女の勞損積
血帶下と治し小兒の風痰丹毒に
よし○海參平尓して毒ㇾ元氣と補
ひ臟腑と潤し三焦の熱と去○海
蝦平也毒ㇾ虫と殺し諸瘡ふはし
○鰕溫みて小毒あり風痰と去
積と消し陽道と壯くし乳汁と通
を○石決明平也毒ㇾ目の病を
治し精と益風熱と去勞虚と補
ひ漱病と治を○魁蛤平れもそて毒

ㇾ胃と強くし食と進め渇と止五
臟と潤し痢病と治し腰脊冷或へ
痿痺さるれは○車渠大寒毒ㇾし
渇とやめ五臟と潤し痢病と治す
○牡蛎溫みて毒ㇾ中と補ひ虛
損と治し渇とやめ酒毒と解す○
文蛤平也毒ㇾ渇と止小便と通ど
痔と已し血と止めて氣と行し痰と
消を女の崩漏よはし○蜆冷みて
毒ㇾ熱と去胃と開き渇とやめ小
便と通じ濕熱脚氣と治し酒毒
と解す○馬刀寒也毒ㇾ熱と除さ
渇とやめ目と明らかにし酒毒と解す女
乃勞損下血ふはし○海蜘寒にて
毒ㇾ癖氣と散じ瘰癧と治す脾

胃弱き者ハ多く食をべからず○蓼螺平ゑう毒ある一労虫と去蟲毒と治す多く食をべからず○海嬴冷ハして毒ある一目乃痛とやめ心痛と治と○田螺大寒毒ハ熱と除き渇とやめ目赤く腹中冷痛ひ○蟹寒にして小毒ある熱をさう心乃痛と治一面の腫口喝と治す○石亀温にもて毒ある一氣と益智と助け食と進め筋骨乃痺ゑと痛と治す○鼈平也毒ある一氣と益不足と補ひ血熱と去陰虚と補ふ○鶴平にもて毒ハ氣力とハし虚と補ひ風と去肺と補ふ○鷹平也毒ハ筋骨と壮ハし藏府と利一痺と治と多食へ氣と動す○鴨冷和一食と消と中と補ひ氣とハ胃と中と補ひ氣力と益と○雉微寒毒ある一虚損と補ふ○鷽平にもて毒ハ脾氣とハし人ゑ益ある功ハし多く食をべからず○班鳩平也毒ハ氣と益虚と補ひ目と明ゑハし陰陽と和一喧病と生ぜず○鶉平にもて毒ハ五藏と補ひ氣と益筋骨と壮ハし熱と消と小児の疳及び下痢ゑハし○鷃温也毒ある一虚と補ひ中と煖む○雲雀温ゑり内損と治と一痢病ゑハし○雀温ゑり

毒は氣をほし陽を壯は腰膝を暖め小便を縮め精をほし虚を補ふ女の崩漏帶下ひよし多食へ氣を動ん○雞溫めて毒は中を溫め虛を補ひ邪を遁去○雞卵平也毒は拙を除き陰を補ひ風を去痺を治し腎を溫め肺を潤す痢病よし○兎平にて毒は氣を益中を補ひ渴をやめ热毒を解し血を涼し大腸を通し脾を健ふかし○犬溫也毒は五藏を安し虛勞を補ひ腰膝を溫め精髓を益腎を補ひ腸胃を厚す○鹿溫にして毒なし氣力を益虛を補ひ血脉を調へ五藏を強む○牛溫也毒は氣を益中を安し脾胃を養ひ腰脚を補ひ渴を止唾涎を止

鍼灸の要論

○撚鍼の手法

鍼を行ふ時は先我心ざしを正しくして病人の心をうけ念を鍼に移し外を見ることなく人と言語ふべし慎み行ふべし病人の左の脇へ居て先左の脚をもち右の膝を立て鍼を口にふくみ左の手を以て病人の腹を窺ひて針せんと思ふ穴を先左の大指の角にて五六呼程の間その穴を按てさそく穴れ上に置右の肘を膝の上にのせ鍼を取て穴のそ左の中指を以て鍼を推へ食指大指と上下して針を以て輕く撚下し病人の呼氣に隨て左右の食

指大指にて和ふ押下ること必ず急よひねり急よ下すべしかくして痛て忍へざるときの也鍼を留ること元氣弱き者は五六呼もして鍼を出すを針のぬきやう先火ー針を出して扱右の手を持みぎてにて引離す左の中指かて針の跡をおさへひしと是を穴を閉るといふ

○鍼法乃補瀉

手法乃補瀉のう虚實の補瀉あり手法の補瀉と云へ先針芒を口に含て針を温め右乃肘向ふへ出ー手さきを内へ屈め大指の先を前の方へ向へて病人の出る氣に隨て針を納食指を添て大指おて和らかに撚を刺し針を入ること二三分留ること五六呼ちく經う隨ひ病ふ隨ひて撚を下し追退けて動搖ーめ氣を至らしめて手を振ひ針をそゝき徐々と抜病人吸氣に隨ひて針を出ー針のあとを按摩つそ孔と閉ることし手法乃補と云瀉へ針を入ること二三分留ること五六呼ちく經う隨ひ病ふ隨ひて撚を下し氣至ると温ぞ其後ちも右の肘をさげて我前へ引付て手さきを向へむけ大指とさゝへ向ふへ病人の吸氣に隨て針を内へ大指と食指おて撚り刺し針を入ること二三分留ること五六呼しつて撚を下し氣至經う迎ひ病ふ迎ひて撚つて左の手にて針の口と開き病人の呼氣に隨て針を出す針あとの孔と閉ざる也ーと手法乃瀉と云婦人乃補へ婦人乃瀉を

うう婦人の補男子は瀉ふる○虚實
乃補瀉ふとも不足を補ひ有餘を瀉す經
氣に迎て針をは實を接これを迎と
云瀉ふとも又經氣に隨ひて針をは虚
と濟ふこれを隨ひ補ふとも此の補
瀉迎隨と知をもんべ鍼法を論ずる足
ずよく愼と詳うべし○迎とは縱べ
足れ三陽の經の頭より起つて足の至る
此經の針を刺べ針師の指をもて經脉て
摩り上せて針を刺の經まで至の經氣
と盛かせをも針芒を上へ向て經脉の進
ふ逆て針を刺て其實と拔左の手にて
針の孔を開き疾く針を出し徐に是を
按迎て奪れ義也瀉ふとも○隨とは縱べ
足の三陽の經ふるべ針師の指をもて

その經と摩り下して針を刺の穴まで
至ら針芒を下へ向て經脉の後ふ隨て
針とをして其虚を濟ふ左乃手にて針
乃穴を閉て徐ふ針を出して疾く是
と按こし隨て濟ふの義也補ふとも○虚
し氣と氣弱く痩と痩りのかへる
補法を用ひ肥實し堅く硬く痛む
ものふかへる瀉法を用べし

○大推を定る法

大推を定るには先項乃髮際より推
尋まべ項骨の三推ふて大推ふり上
ふ小推三ツあり或は二ツ或は一ツ又るき
をあり此三推を去て四推目を大推こ
す三推め骨の大成りの有大推をすべ
うべ又手を肩と平き大骨節をもて

大推と定む或ハ頭と振動して動ぐる骨を大推へ云ふも云ふ共ゐ考合て定べし

○分寸と定る法

分寸と定るハ同指寸同身寸と二ツ有

○同指寸と云ハ男ハ左女ハ右の手を用ひ中指と三ツ小折届て大指小折へ中指の上乃折目れと下乃折目乃とし乃間と取これと一寸ころ共此寸法ハ人乃肥痩みろて違ひあり用べうず

○同身寸と云ハ頭の穴ふハ腹乃寸と用ひ乃寸と用ひ横ふハ横のすと用ひ竪ふハ竪のすと用ゆべし

○頭の竪のすハ此寸法の正しき用ひ様ハ斜心と用ひて両の眉の正中ようり巔を經て大推まそのすに折その一つと二すハ肩ようり肘まそのすに用ゐ又肘の内裏の横文ようり腕そびの横文まそのすを取て其一ツと一寸し肘ようさそのすに用ゐ

○胸腹の竪のすハ鳩尾まそ九すこれと用ひ又鳩尾ようり脐まそハ脐の竪のすこれ是と腹の竪乃すこれ

○胸腹の横のすハ両の乳頭の間と八すこれ是に胸腹の横のすに用ゐ

○脇ようり肋骨乃

取その稗心と十八ふ折て其一ツ分と一すこれ頭面の横乃すハ内角ようり外角まそ乃すと取てあると一すこれ面部の穴と求るハ竪横共ふ此すと用ゐ

○手れすハ曲池ようり肩髃まそハすとろそれと十に折その一つと二すと一肩ようり肘まそのすに用ゐ又肘の内裏の横文ようり腕そびの横文まそのすを取て其一ツと一寸し肘ようさそのすに用ゐ

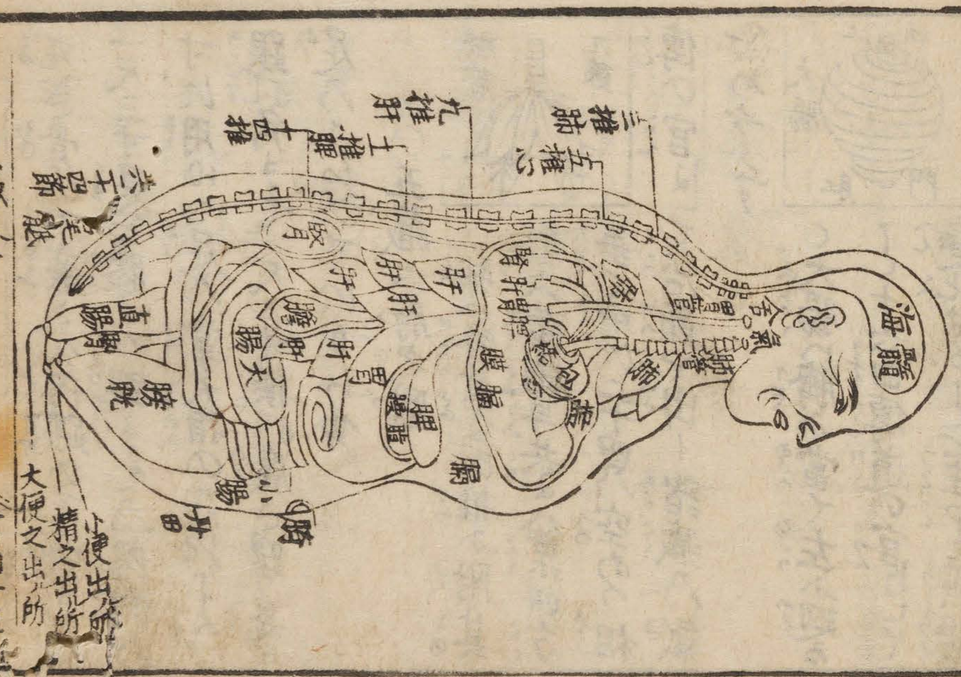
○胸腹の竪のすハ鳩尾まそ九すこれと用ひ又鳩尾ようり脐まそハ脐の竪のすこれ是と腹の竪乃すこれ

○胸腹の横のすハ両の乳頭の間と八すこれ是に胸腹の横のすに用ゐ

○脇ようり肋骨乃

くづまでまさぐ一尺二寸こんと脇のすぢ肋骨の終ようの股と腰との関節の横の紋までそ六寸こんと弱腰のすに用ゆ○背のすぢ大推ようの下長強の終までそ二十一節長さ三尺こんと背のすに用ゆ○横のすぢ両乳の間と八寸にて是と用ゆ○股脛のすぢ法に腰と股との関節乃横紋ようの膝髕の外角折目の横の紋までそ一尺九寸こんと外股のすに用ゆ又陰毛の生際に横ふ大骨あり横骨と云とんでもようの膝髕の内角の丸き骨の上廉までそ一尺八寸こんと陰股のすに用ゆ又膝髕の外角の折目の横文ようの外踝の下廉までそ一尺六寸こんを膝ようの踝まで乃外側のすぢに用ゆ又膝髕の内

○五臓六腑内系之圖



丸き骨の下廉より内踝の下廉まで
一尺三寸是を膝より踝までその内側の
寸に用ゆ○足の掌大指のさきより
跟の角まで一尺二寸横れ廣さ四寸是を
足のさゝのすいらゆ

○五藏六府之圖



○肺ハ脊第三の椎ノ附其
形六葉兩耳共ニ葉四方
垂て中ニ二十四ノ空あり相
傳の官ハして治節を出ー諸藏ノ氣

直腸と經て肛門より大便を出ス

○大腸ハ臍ノ當て左ノ廻る
こと十六曲傳道の官ハして
變化すること主つと廣腸

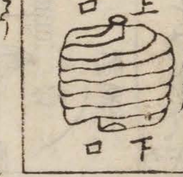


○脾ハ胃と膜を同うして
胃の上ノ左ノ附その形刀
鐮の如く十一ノ椎を推れ下に當る倉廩
乃官ふして五味を出ー水穀氣血
て四藏を養ふ

○胃の上口を賁門といふ上
脘ふ當て下口を幽門といふ
下脘ふ當る中ハ中脘に當る
倉廩ノ官ハして五味を出ー水穀氣血
乃海ふす

○心ハ肺管の下膈膜の上ふ
あつて脊の第五ノ椎ふ附
其形尖圓はして蓮蕊の如
その中に竅あり多少同ーからず四ノ
系ありて四藏に通ず君主の官ふ

神明と出ゝ衆れ理をそる〻万事を應ず



○小腸の上口へ胃の下口の右へ曲りて上二寸ばかり
あり則ち胃の下口より小腸の下口へ則ち大腸の上
口ゟこれと關門ともゝ云ふへ背の附
前へ膀の上に附左ゟ廻つて畳積こと十六
曲受盛の官はして化物と出ゝ大小
便とをかち出をつかさどる



○膀胱へ十九乃推ゟ當る腎
の下大腸の前にあり下口
あつて上口へ入〻小腸の下
口へ則ち膀胱の上際也州都の官は
て津液と藏し小腸ゟ別ち出を承
乃水液膀胱の上際ゟ滲き入と小便
とあり出る也下口へ前陰ゟ〻りて



○腎へ両牧みて十四の推
乃下両方にあり其形豆
の如くにして相並び曲つゝ
脊の両傍に附作強の官はして伎巧と
出ゝ精神ゟ舎るところなり

○心包絡へ心と包乃膜なり
心下横の膜ゟ上竪の膜の下
ふあうとその形細き筋膜有
て絲のゝ心肺と相連る位相火はして
その所擅中に當る臣使の官はして喜樂
と出ゝ君に代て事と行ゝ

○三焦へ人の三元乃氣也總て
五藏六府営衛經絡内外左
右上下れ氣を主どる決瀆ゝ

上焦	中焦	下焦
胃の口の	胃の中脘の	關門の下
乃上	當	起
出		
上焦	中焦	下焦

乃官ふーで水道の出るところなり

膽

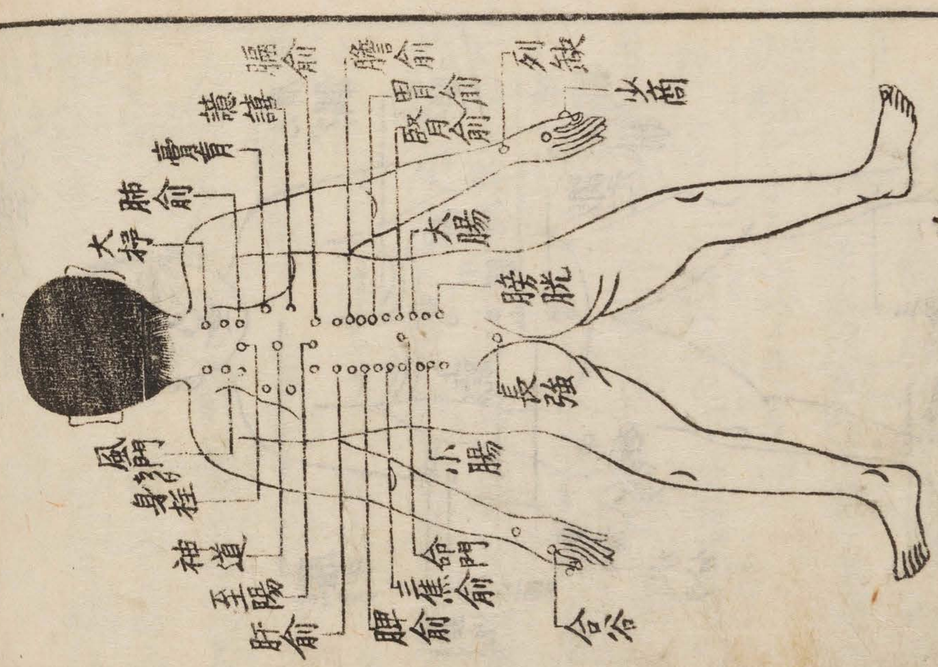
○膽は肝乃短葉の間にあり中正の官はして物をさだむる決斷をつかさどる

肝

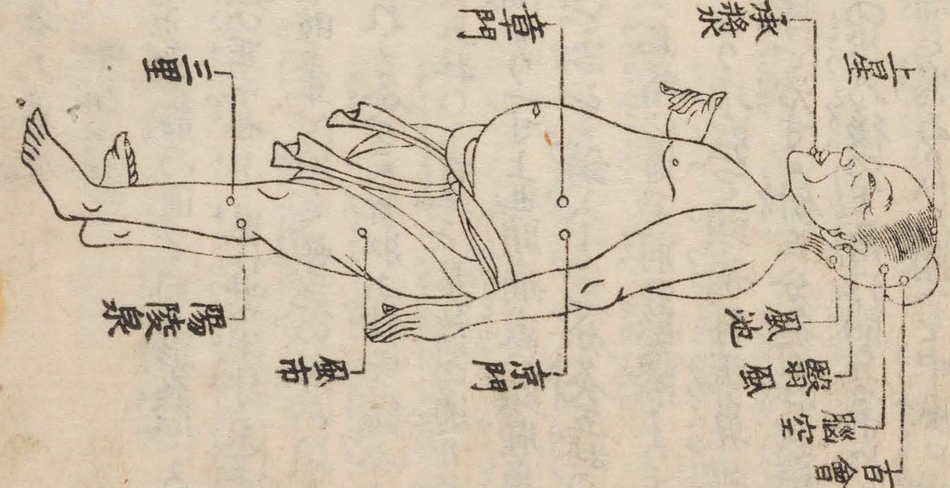
○肝は胸の下に有上脊乃九の推乃下に附左三葉右四葉凡て七葉その系上肺と絡人將軍乃官はして謀慮を出す藏也夫五味は口に入胃ふ納るといへ共是を ところに消して脾ふ渡せば則ち是を五藏六府ふ散ずる也五藏もまたその味ふよりてこれを受る也肝は酸を好む心は苦きを好む脾は甘きを好む肺は辛きを好む腎は鹹きを好む此のごとく病者の嫌ひ好む味ふ因て五藏乃病の發処を知へし

○仰人之圖

○伏人之圖


列缺
尺澤
膀胱俞
胃俞
膽俞
肺俞
膏肓俞
譩譆
大杼
大腸
膀胱
長強
小腸
風門
脊柱
神道
至陽
肝俞
脾俞
三焦俞
命門
合谷

○側人之圖


手三里
曲池
承漿
手五里
風池
京門
陽陵泉
完骨
風池
譩譆
丘墟
曼早

○鍼灸乃要穴

○頭面の部

百會一穴鼻筋乃通ず前の髪際より五寸巔の正中也・中風口噤半身遂ず或ハ頭痛眩暈を治を頗死の者ハ灸をどこれも灸を・脫肛ハ妙也○鍼入ること三分灸五壯○上星一穴鼻筋の通り前の髪際より一寸上也頭痛耳鳴鼻衄目乃痛を治を・鍼入ること三分灸五壯○腦空二穴烏晴の通ず前の髪際より五寸半上にあり項強ず頭痛耳鳴鼻衄目眩心悸を治す・針五分灸三壯○腎風二穴耳の尖乃後の下角れ陷る中にあり耳痛み鳴あるひハ聞へざる中風口喎を頬腫痛を治す・針入ること七分灸七壯○

風池二穴耳の下面乃通ず腦空れ穴の後陷る中にあり・腦痛項強ず面腫目昏眩耳目痛頭痛鼻血を治す・針七分灸七壯○承將水一穴下唇の赤肉の火ー下れ正中をそらぐ也・中風口眼喎を面腫口齒ふ瘡と生ぜるを治す虫齒にハ・針三分灸七壯より七七壯至べし

○胸腹乃部

檀中一穴兩乳の間正中れ通ず陷る中みあり・肺癰咳嗽上氣不食胸中氣塞ると治す・針ハ禁穴・灸七壯○巨闕一穴鳩尾乃下一寸にあり・上氣咳逆一切乃心痛痰飲腹滿痛と治す狂証を主どる・刺六分灸七壯より七々壯二至る

○幽門二穴巨闕乃兩傍各五分にあり

●吐逆泄瀉痢病膿血を下し腹脹氣逆して食下らざるを治す●針五分灸五壯○上脘一穴巨闕乃下一寸にあり●心中煩を熱し腹脹食すること能ず霍乱吐利し腹中鳴泄瀉嘔吐心悸し積聚あるを治す●刺八分灸二七壯ようす百に至る○中脘一穴上脘の下一寸臍ろ四寸上なり●飲食化せざれば腹脹痛こと吐逆泄瀉痢病心痛霍乱瘧疾疝氣積を治す●針八分灸二七壯ようす百壯ふ至る○水分一穴臍の上一寸にあり●水腫淋病腹痛こと小腹鳴痛脹こと治す●針五分灸七壯ようす百壯ふ至る○神闕一穴臍の正中なり中風卒に倒れそ甦らざれば或ハ臍の廻りを大ひいくこと

水腫脹滿腸鳴こと治し小兒の驚癇疳脫肛を治す●針ハ分禁穴●灸七壯ようす百壯ふ至る○氣海一穴臍乃下一寸五分にあり●藏氣虛し憊こと腹脹痛疝氣積聚婦人の崩漏帶下一切元氣乃虛脫こと治を●針五分灸百壯○關元一穴臍の下三寸にあり●小腹痛こと小便通ぜざれば淋病或ハ小便白く濁こと或ハ小便頻く泄瀉痢病久しく愈ず腹乃痛こと積塊こと疝氣及び婦人の帶下月經通ぜざるを治す●針八分●灸百壯ようす三百壯ふいたるを○中極一穴臍の下四すにあり●淋病小便赤くして痛こと臍の下れ積塊こと腹脹小便通ぜず婦人乃帶下月經通ぜざれば或ハ産後胎衣

下らず或ハ悪露止ざるを治す・針八分灸百壯○天柱二穴腎の正中を去事左右各二寸にあり・泄瀉痢病嘔吐霍乱瘧疝氣積聚腹痛腹脹食化せず婦人の崩漏帶下血堀を治す・針五分灸百壯○章門二穴腎の上一寸八分兩旁へ去ること各八寸五分肋骨の末にあり下足と伸上足と屈てこれをとる・腸鳴食化せざる脇腹痛と腰脊痛と嘔吐喘息水腫泄瀉積聚疝氣を治す・針六分灸百壯○京門二穴俗ふ後章門と云・章門の後季脇の本陷る中に有・腰脊痛と腹脹腸鳴小腹痛と小便澁肩脊痛むを治す・針三分灸三壯

○背腰の部

○身柱一穴俗ふこれを散氣と云・三の推乃下四の推乃上にあり・癲狂胸熱口渇喘息頭痛嘔して物出ず并に小兒驚癇を治す・針五分灸七壯ろ百壯み至る○神道一穴五の推乃上にあり・頭痛ふ目昏く腰脊攣ると強り寒ゑ熱往来熱ふ喘瘧驚風を治す・針ハ禁穴或ハ三分灸七壯より七々壯み至る○至陽一穴七の推の下八の推の上にあり・熱病瘧ゑ出ず腰脊痛と胃寒ゑて食せざると治す・針五分灸三壯○命門一穴十四乃推乃下十五の推れ上にあり・頭痛破るが如く身熱をる事火乃如く労熱小児の驚癇と治を・針三分・灸三壯○長強一穴亀乃尾の推端大便道乃

上陷る内にあり・腰脊強て痛と下
血泄瀉痔漏脫肛を治す・針三分灸三
十壯より二百壯に至る○大抒二穴一の推
乃下脊の正中より左右へ去て各二寸
陷る中にあり頭痛と項強て脊痛と
目眩喉痺脇滿咳嗽傷寒汗出ざるを
治す・針三分・灸へ禁穴急証ふ一五壯○
風門二穴一の推乃下左右へ各二寸
・頭痛項強て鼻塞つまり目昏血咳嗽
喘息呕逆胸背痛及び表弱くして
風と受やすきを治す・針五分灸五壯ろ
三七壯に至る○肺俞二穴一の推乃下
左右へ各二寸にあり俗にくゝと狹膏肓
とゝ胸滿痛と脊倦て脊強て嘔
吐不食癆黃疸咳嗽喘息骨蒸労

瘧を治す・針三分・灸百壯○瞤俞二穴
七の推乃下左右各二寸にあり・心痛と
不食吐逆痰飲脇肩痛と治す・針三分
灸三壯○肝俞二穴九の推の下左右各二
すにあり・脇痛と支滿不食眼病吐血
肩腰痛と黃疸目眩疝氣筋攣手て怒
やすきを治す・針三分灸七壯○膽俞二
十の推乃下各二寸にあり・頭痛目黃と
心脹咽痛痰飲吐逆食下てめくく食
化せず労熱を治す・針五分・灸七壯○
脾俞二穴十一の推乃下左右各二寸に有
・黃疸水腫吐瀉一瘧劇病積聚腹痛
よく食すれ共もとゝと瘦或い食化せ
ず或い不食をを治す・針三分灸五壯
○胃俞二穴十二の推乃下左右各二寸有

・脇滿脊痛腹脹鳴痛こ嘔吐不食霍乱吐瀉筋攣るを治と・針三分灸五壯○三焦の俞二穴十二の推乃下左右各二すにあり・腰脊痛こ強つ腹脹痛こ吐瀉食化せず積聚痢病腸鳴こを治と・針五分・灸五壯○腎俞二穴十四の推乃下左右各二すにあり・腎虛淋病小便濁つ耳聾目昏腰膝急つ痛こ手足冷つ泄痢遺精小腹痛こ骨蒸労熱こを治す・針三分・灸百壯○大腸の俞二穴十六の推乃下左右各二すにあり・腹脹痛こ腸鳴二便通ぜず或ハ泄痢不食腰痛こ脊強るこを治と・針三分灸三壯○小腸乃俞二穴十八の推乃下左右各二すにあり・小便澁つ赤く大便通ぜず或ハ泄痢膿血痔漏疝こ氣腰痛こ脊強り婦人乃帶下こを治と・針三分・灸三壯○膀胱俞二穴十九の推乃下左右各二すにあり・淋病遺精泄瀉痢病或ハ大便通ぜず腰痛こ婦人の前陰痒きこを治と・針三分・灸七壯○膏肓二穴四の推の下脊ハ正中より左右へ去こと各三寸五分にあり即五の推ハ近く四八推ハ遠くくるなり俗廣膏肓こゆ兩の臂尾こを合させてこゝぐ・五労七傷虛損労瘵遺精夢遺咳逆痰火癲狂健忘男女一切の病こを治と・灸百壯より二百壯ハ至る灸こて後ハ足の三里に灸し火實こを引下すべし○譫語二穴六の推乃下左右各三寸五分ハ

・目眩鼻血肩背痛喘急腹脹脇痛く瘧とらず・針六分・灸二七壮より百壮
以つとる

○手ㇾ部

肩髃二穴肩乃端の肩骨と臑骨とのつぐひめ臂と伸て上ぐれば陥むところ・中風半身遂ㇾ肩臂乃筋骨痿き痛こそ挙らさるを治ㇾ・針一分灸三壮より七壮に至る○曲池二穴肘を屈て折め横紋乃頭こ曲る骨との間ふかう大指の通つか當る・中風半身遂ㇾ肘痩痛て挙らず筋緩つく伸屈のらず腋肩痛こ或ハ身ハ小瘧あるを治す・針七分灸七壮○手三里二穴曲池乃下二すこしと按べ肉起る所乃手先と下とへ・霍乱中風半身遂ㇾ口噤こ手臂痿ㇾ痛こ拘攣伸ず歯痛こ頬頷腫瘰癧を治す・針三分灸三壮○合谷二穴手ㇾ大指と食指との岐骨乃間陷る中按べ臂ふこゆる処あり・頭痛面腫目痛こ鼻血耳鳴舌裂歯痛こ喉痺小児の驚風婦人乃經閉を治と・針三分灸三壮○列缺二穴腕ろひの上の側大指と食指との岐と両ㇾ手七入交て食指乃頭の當る処あり則ち筋骨の解めるり・中風半身遂ㇾ口眼歪こ口禁め或ハ肘痛こ項強こ喉痺咳嗽小兒の驚癇と治と・針二分灸三壮○少商二穴大指乃内の側髪の生際乃角と去こと一分

ぐめうにあう小指の方を外こう大指の方を内こいつ・胸中に気満咳嗽喘息肩背の痛瘧を治を喉痺かへ此穴より血を出すべし妙こゝ・針一分・灸ハ禁穴

○足八部

風市二穴身を正直おゐして立て両手を外腿へ垂正中指の頭乃當る処両筋の間陷ある中にあり・腰腿疼痛こ足脛直こ痺ま脚気中風半身かなゐざると治す・針五分・灸二十壮よう百壮ゐ至る○陽陵泉二分膝を屈て外側膝圊の折目の頭ゐ假に墨と付さそ足と伸してもる乃墨より下一寸にあろ・膝強く或へ伸て屈らず痺ま痛こ脚氣中風半身遂へず一切の筋の病と治す・針八分・灸七壮よう七々壮ゐいつさる○足三里三穴骭骨乃外側膝蓋の下三寸骭骨こ筋との間陷なる中にあろ俗ゐ上三里こ云●頭重く目眩膈症腹脹水腫便血上氣咳嗽泄瀉痢病霍乱積聚瘧心腹痛小便通ぜず食こ進めず食こ消ど胃乃氣虚弱五労七傷こ治を上ゐ灸しなる時ハかゝるべし三里に灸をゞ二十以後い此灸こ欠べらず・針五分・灸七壮よう百壮或ハ二百壮ゐいつさる○三陰交二穴内踝の上三寸脛骨の内乃側ら骨こ筋との間陷ある所にあり俗ゐ下三里こ云

膝乃内角痛こ小便利ぜゞ身重く足痿腹脇つさみ泄瀉食化せず疝氣陰萎ゐ並ひさこ婦人の血朋漏帯下こ治す・針

三分・灸三壮かくのごとう湧
泉二穴足乃掌め裏足を仰て指を捲
屈むまべ足乃心に自かう脳むところ有
こんと究こん・腰痛こと大便結一心痛
こと目眩喉痺こと治を・鍼三分・灸三壮
右針灸こと行かくの風にあうべうず
窓隙こともふさぐべし

○加減乃例

諸病こと治をするにかく寒熱虚實こと弁
ほく寒こと各主方こと擇こと用めべし或
い雑証こと兼るりのかな本方乃茶品と
考へ兼証こと治をるのカ必るき時ハ其
証よ隨つてこれこと加へて其カこと添又
その証よ於て反どる茶味あるべき是
と去べし然もども猥つふ加減して
古人法こと立乃意こと失ひ或ハ君臣
佐使の義奇偶の數こと乱ることるうまじ

●頭痛かい川芎・白芷こと加ふ
兩の鬢痛かい柴胡・黄芩・川芎
額乃正中痛ハ外痲・葛根・石膏・白芷
頭項乃邊痛かい川芎・羌活・蔓荊子
頭頂痛かい藁本・細辛こと加ふ
眉の稜骨痛かい羌活・白芷・黄芩
左一方痛かい柴胡・生地黄・川芎
右一方痛かい黄芪・葛根・白芷こと加ふ
血虚の頭痛かい當皈・川芎・地黄
氣虚の頭痛かい人參・黄芪・天麻
氣鬱乃頭痛かい川芎・白芷・香附子
風痰乃頭痛かい荊芥・天南星
痰厥の頭痛かい半夏・茯苓・木生姜

風熱の頭痛ふかなるに荊芥・薄荷を加ふ
濕熱の頭痛ふかなるに甘菊花・黄芩を加ふ
頭風ふかなるに細辛・薄荷・荊芥・防風を加ふ
●發熱のごとき柴胡・黄芩を加ふ
實熱ふかなるに黄芩・黄連・大黄を加ふ
虚熱ふかなるに人參・黄芪・生甘草・白朮
肌肉の熱ふかなるに升麻・葛根を加ふ
血熱ふかなるに生地黄・牡丹皮・芍藥
心火と去ふかなるに黄連・生地黄を加ふ
肺火と瀉とるふかなるに黄芩・桑白皮
脾火と去ふかなるに芍藥・黄連を加ふ
肝火と瀉とるふかなるに柴胡・山梔子・龍膽
腎火ふかなるに知母・黄柏・地黄を加ふ
火鬱ふかなるに升麻・葛根・羌活・芍藥
鬱熱ふかなるに香附子・山梔子を加ふべし

勞熱汗あるふかなるに黄芪・地骨皮・知母
勞熱汗なきふかなるに牡丹皮・地骨皮
骨蒸ふかなるに知母・牡丹皮・地黄を加ふ
咽渇ふかなるに熱より因ずるに葛根・天花粉・麦門
津液乾て咽渇をるふかなるに人參・烏梅
心煩して渇ふかなるに茯苓・烏梅・天花粉
酒熱にうて渇ふかなるに葛根・黄連・烏梅
●惡寒○風寒表ふわりしべ麻黄・防風
濕ふうて惡寒あるふかなるに桂枝を加ふ
熱より因ずる柴胡
寒にげざる慄ふかなるに麻黄・杏仁
●咳嗽○風寒にうるふかなるに麻黄・杏仁
風熱にうしべ杏仁・桑白皮を加ふ
肺熱ふかなるに黄芩・桑白皮を加ふべし
肺寒ふかなるに五味子・乾姜を加ふべし

久數止ざるふハ五味子・烏梅を加ふ
痰ふよくべ濕痰ふハ半夏・燥痰ふハ瓜蔞・貝母・風痰ふるふハ枳殼・肺虛ふハ人參・黃芪・勞熱ふハ紫菀・阿膠・款冬花・肺氣を扶むるふハ五味子・烏梅・柯子
●咽痛ふハ桔梗甘艸・風熱ふハ桔梗・荊芥・薄荷を加ふ
風痰ふハ羌活・桔梗・天南星とくふ
風熱腫毒ふハ牛旁子・黃芩・桔梗・甘艸相火乃上るふハ玄參・黃栢と加ふ
●胸痞塞ふハ實するにハ枳實・厚朴虛ふハ芍藥・陳皮・濕熱ふハ黃連・澤瀉痰ふハ前胡・半夏・痰熱ふハ半夏・黃連痰氣ふハ枳殼・檳榔子ととゝふ

氣滯るふハ青皮・木香・香附子・枳殼食ふハ蒼朮・神麯・麥山査子・枳實
●嘔吐○寒ふハ子子・陳皮・半夏と加ふ
熱ふハ黃連・葛根○痰ふハ半夏・生姜胃寒ふハ子子・陳皮・白朮・縮砂・烏梅胃虛ふハ人參・白朮・縮砂・青皮と加
●飲食消ぜざるふハ縮砂・青皮・肉食ふハ山査子・草東○魚類ふハ撥攢穀食ふハ神麯・麥芽・麵類ふハ杏仁瓜菓の類ふハ青皮・乾姜・肉桂
酒毒ふハ黃連・葛根・烏梅・枳實水煉ふハ破胡紙・杜仲・牛膝
●腰痛・腎虛ふハ肉桂・龜甲○濕熱ふハ知母・茯苓冷ふハ肉桂・乳香・青木香と加ふ

血滞るゝ延胡索桂心桃仁

●腹痛みゝ熱にゟりて痛ゝ黄芩芍薬

寒ゝ良姜肉桂吳茱萸を加ゝ

食積ゝ神麹山査子麥芽をくゝ

瘀血ゝ肉桂延胡索紅花を加ゝ

氣痛ゝ香附子木香くゝ

血痛ゝ當皈川芎延胡索

虫痛ゝ莪朮青皮蕪荑仁檳榔子

●泄瀉○濕熱ゝ蒼朮黄連を加ゝ

濕ゝ茯苓蒼朮沢瀉猪苓

食ゝ蒼朮神麹縮砂山査子

水の如ゝ瀉ゝ滑石を加ゝ

脾胃の虚ゝ白朮山薬茯苓人参

腎瀉ゝ吳茱萸五味子をくゝ

久く瀉元氣脫るゝ柯子肉豆蔻

烏梅益智蓮肉○寒ゝ乾姜

●胸痛の寒に因て痛ゟ乾姜肉桂

熱ゝ山梔子黄連の痰ゝ枳殻半夏

氣滞ゝ烏薬木香香附子枳殻

冷氣にゝ茴香藿香黄芪をくゝ

血氣ゟゝ乳香沒薬を

瘀血ゝ桃仁莪朮延胡索を加ゝ

虫ゝ五霊脂檳榔子苦楝根使君子

●脚痛ゝ風濕ゟゝ檳榔子木瓜

濕熱ゟゝ木通防已蒼朮黄柏

寒濕にゝ吳茱萸生姜蒼朮肉桂

腎虚ゟゝ牛膝杜仲を加ゝ

●小便澁るの滞ると通ずると利とる

ゝ瞿麥車前子木通滑石

下焦乃濕熱ゝ知母黄柏茯苓澤瀉

氣の下陷こへ升麻柴胡を加ふ
轉脬こへ附子澤瀉或へ沉香木香
●大便結○實熱ふへ大黄牽牛子
血虚ちこ燥ふへ當皈麻仁桃仁
氣を導くにへ枳殻枳實を加ふ
虚ふへ黄芪陳皮人參枳殻を加ふ
●眩暈○風虚ふへ天麻白朮
風痰ふへ天南星半夏 ・血虚ふへ
燥痰ふへ貝母阿膠瓜蔞仁とくゝ
痰壅るにへ枳實厚朴桔梗とくゝ
氣痰ふへ拌柳子枳殻陳皮を加ふ
●喘急○風寒表ふわ〳〵べ麻黄杏仁
痰ふへ半夏桑白皮枳實茯ゝ
肺氣を瀉るふ
虚ふへ人參阿膠五味子とくゝ
●健忘○痰熱ふへ茯神黄連半黄
心氣を補ふへ遠志當皈石菖蒲
●物ふ驚くれ○心と鎮ふへ黄連辰砂
心氣ハ虚ふへ遠志酸棗仁茯神
●怔忡へ心血の虚ふへ當皈生地黄
心氣を補ふふへ遠志茯神とくゝ
●汗証○氣虚ふへ桂枝芍薬黄芪
血虚ふへ當皈芍薬桂枝とくゝ
盜汗○氣虚ふへ牡蛎酸棗仁○
血虚へ當皈生地黄虚労ふへ牡蛎黄芪
●小便頻きへ○虚熱にへ黄柏茯苓
虚寒にへ益智蓮肉五味子とくゝ

腎虛ふハ破胡紙茴香山茱ど加ふ
●小便赤きにハ黄栢知母をくふ
濕ふハ猪苓沢瀉茯苓虛へ麥門冬
●筋ひきつるハ寒に因へ木香呉茱萸
筋脉を緩ゑるハ木瓜薏以仁
●脇痛ハ肝火ふハ山梔子柴胡を加ふ
肝乃積ふハ青皮柴胡龍膽どくふ
血積ふハ當歸大黄の氣ふハ木香
●積塊實ふハ三稜莪朮枳擗子
虛とる者にハ枳殻陳皮當歸尾
左ゑ有て血乃塊ハ牡丹皮延胡索
右ハ食積神麹麥芽枳殻山査子
正中に有て痰氣こんハ枳實半夏
塊ゑ脇ゑめぐべ青皮枳擗子
●腹脹ゑ脾胃和せざるハ白朮陳皮

食滯にハ枳實山査子蒼朮厚朴
氣と行をたにハ香附子枳擗子
●身冷るふハ乾姜肉桂當歸を加ふ
手足冷上るふハ附子乾姜肉桂
上氣するにハ香附子陳皮山梔子
●身痛にハ羌活蒼朮防風を加ふ
●風邪めぐべ紫蘇羌活防風
●寒邪ふハ乾姜肉桂甚しきニハ附子
●暑氣にハ香薷白扁豆厚朴
●濕ハ身重羌活蒼朮防已用木通
●脾胃乃濕ふハ半夏茯苓蒼朮
●不食ふハ木香白朮縮砂
●足ふかるくハ牛膝杜仲防已を加ふ
●足かめくふハ知母黄栢をくふ
足冷るふハ沉香肉桂をくふ

●菜と上へ行をひへ升麻柴胡防風
●諸菜と下へ行かへ黄柏木通防己と
加ふ○頭額へやるかへ川芎○面へやるかへ
防風○胸の間へ行かへ桔梗○腰膝の
分へ行へ牛膝兩の手へ行かへ桂枝を
加ふ○菜を麁腫物乃所へ行かへ
皂角刺を加ふ〳〵右加味の大概と記
すのみ宜く氣血の虛實風寒濕熱を
つくら明らめてこゝと用ゆべし又前か
出と疋の菜性とよく覺へ諳ずる時ハ
何ん証と治ずるふも通ぜざると云てこゝろうべし
此加減の例元小兒門の次ゟ記をとしのとぢる
煎劑調合のこと雜發門の末ゟ今卷尾
小著して撰用ゐ使と

醫道重寶記　終

初學和歌式　七冊　有賀長伯
歌のしおり　二冊
字鏡きやう　三冊
連歌至要抄　二冊
連哥あさゐ　一冊
清輔初學抄　五冊
同　奥儀抄　八冊
貫之新撰髓腦　一冊
和字正濫抄　五冊　契仲
類字假名遣　一冊
温故日録　五冊　牧村元春
碧玉和歌集　四冊　内裏四百首　一冊
古来風躰抄　五冊　後成卿

東野州聞書　徹書記より伝来の奥秘を一しるす　五冊
俳諧片相手　芭蕉翁の発句をあげ其句の上下を付る事也　一冊
同續片相手　右同断　一冊
和漢朗詠集　　二冊
俳諧蛙の海　其時々の景色を感じ名所の古事を付る事也　一冊
醫道重宝記　薬の雑病の要穴本方の料理禁忌小児の療治方を教訓のために図をもてくわしくやさしくとく　一冊
神珍醫書袋　醫方を記とめたり　一冊
袖珍醫便　平かなを以て療治をしるす　一冊
日用濟民記　平かなのつゞきにて書うちかへる　一冊
療治重宝記　古今方書を考へて病源より治方を集めて書うつす　一冊
小兒調法記　小児一切の療治のうつくしくやさしくとく　一冊
瘡疹大成　疱瘡そうろうの書うつし　明江若源　一冊
同良方　右同断　一冊

本草和解　薬性八綱に分ち各別法の仕やう　四冊
本草辨明　薬種の功のうすきあつきを考へ食物歌本州食物のうへにつくりのようすを記す　一冊
食物歌本州　一切食物の功能を歌にしるす　一冊
食物和解　日用食性ともふ　一冊
同　平かな　日用食性ともふ　一冊
日用食鑑　食物のこまかにその功能を記す　三冊
和名集　薬種の功能をいろはにわかち和名を附　五冊
藥種名寄帳　薬種のおもなる和名を出す　一冊
同後集　右名寄帳の和名外両所　一冊
本州藥種目録　右名寄帳の本草綱目を引　一冊
同藥名備考　薬名のいろはにわかち和名を附　五冊
藥品辨惑　薬品の功能和漢有之の説のあやまりをしるす　二冊
針灸要歌集　灸の穴を示しその治法をとく　五冊
万病回春　半切本　四冊
和劑醫方　半切本　四冊

格致餘論 一冊
傷寒二百問 二冊 晋葛洪 五冊
肘後方
遂生雜記 中山三柳 三冊
養要論 三冊
道三脈論 サスノミコ 一冊

繪本寶袋
同 通寶志
同 直指寶
同 清書帳

大成論 一冊
局方發揮 一冊
汪石山醫案 七冊
万病殺酉通 一冊
聖意無盡藏 梅井舟山 一冊
按摩道引圖 一冊

押繪手鑑
繪本艷哥帳
同 草源氏
同 心持種
同 野山草
同 野草後編
同 忘草
同 福良雀
同 深山鹿

五冊
三冊
一冊
五冊
五冊
三冊
一冊
三冊
二冊

繪本西かく孫　二冊
同手帳綱目　二冊
武勇繪鑑　畫馬のぐり武者弦ろく　三冊
筆勢武者硯　六冊
畫筌　五冊
畫英　法眼周山筆　和漢名畫の圖とあつめ　七冊
畫寶　和漢名畫の圖を撰ぶ　六冊
運筆鹿畫　墨龍のかきやう　三冊
畫本拾葉　和漢名畫をあつめ　三冊
同吉野草　三冊
同和字なぐり　一冊
同千代の春　二冊
同琵琶の海　同乘合船
繪本武家百人一首　二冊
萬物繪本大全　二冊
同主生狂言　二冊

雛形鶴の声　三冊
同天の橋立　三冊
同祇園林　三冊
同都の春　三冊
同児ざくら　三冊
雛形紅葉の山　二冊
同菊の苗　一冊
同菊の井　三冊
同宿の梅　三冊
萬載雛形　三冊

本願寺由緒記　五冊
叢林集　十一冊　惠空
十二冊
年中故事要言　七冊
故事文選　八冊
合科阿弥陀經　一冊
和讃科　四冊　惠空
同十之巻　二冊　惠空
勧化標樓章　六冊
讃佛慈悲集　二冊　惠空
御傳視聽記　六冊
疑問解　五冊　惠空
観音冥應集　十三冊
本淨
愚迷發心集　一冊
同歌諺註　一冊　春鶯
順礼歌功徳　一冊
同詠歌奥儀　三冊　慥誉

選擇集 二冊 御一流点
聖漢辨會録 六冊
彼岸辨疑 二冊
拾遺古德傳 五冊 覺如上人
勸化大旨 一冊 蓮如上人
報恩講式抄 二冊 惠海
孝道勸化故事 七冊 春嶌
行基并仲創記 二冊 本良
御文章隨問釈義 五冊
真宗文與抄 八冊 一名来意抄
誓古和讃 一冊
同改正 一冊
十六ケ条 廿四ケ条 答問 三冊 知空
和讃披雲録 二冊 鳳洲
親鸞聖人御法語 一冊
浄土真宗鎮解問荅 一冊 真宗
實教 二冊 實如上人
浄土真宗亀鑑 二冊
親鸞聖人御法語
大谷遺法纂彙 一冊
生還廻向文類 御抄言書
御消息
護得信心
帖外和讃
迎接曼陀羅由来
示門弟九一通口傳
同弟此三通口傳
浄土二教門圖
二十一ケ條誡

三部經大意 五冊
運如上人本願文前書
覺如上人真宗銘文鈔
存覺上人決疑問荅
六物圖依釈 二冊 慧叔
利益和讃抄 五冊 慈賢
同考畧 二冊 慧淑
大原鈎隱 五冊 素習
末二門指要指會本 二冊
淨名自圖見閻頭書 三冊
鎮勸用心管解 二冊 惠空
浄土名目圖見閻頭書 三冊
正信偈科 一冊
四教義集解 三冊
蓮窓塵壺 三冊 知空
御傳便蒙 一名私記 五冊 親鸞上人御法語
宗行儀鈔 三冊

法華會義 十七冊 智旭
同引據 四冊 通玄
同講録 二冊 霊空
同倫貫考証 一冊 金龍道人 蓮如上人御法語
小部集要
安心用意集
女人最要集
安心定得抄
念佛明要抄
持要抄
真宗持要抄
真宗意得之支
袖中抄
安心次得抄
頭浄土真宗抄
持得抄
閑信抄

實悟記拾遺 二冊
證如上人御消息 一冊
御文與要 五冊 惠林
真宗文義林 六冊

役民集要 一冊
真宗玄疑鈔 五冊
同 拾遺筌 三冊

五

本朝通記　神武天皇より百八代後柏原院に至る　二十二冊
十二朝軍談　一天地開闢乃始より三皇五帝殷の紂王七年に至る　十四冊
武王軍談　周の敬王元年より二十六年に至る　九冊
呉越軍談　周の威烈王廿三年より二世帝三年に至る　十八冊
戦國策　隋の煬帝より六十代の帝を　十五冊
唐太宗軍談　唐の僖宗帝より後唐の五代を記す　廿冊
五代史軍談　後唐の明宗の二年より宋の太祖八年に至る　廿冊
宋史軍談　晋より六十代の帝を　五冊
通俗晉陽傳　字五代より六十代の帝を　九冊
前々太平記　百八十九年の事を記す　十二冊
義經興廢記　九帝十帝の伝記　十二冊
曽我物語　治暦二年より四巻三冊　十二冊
北条九代記　天正十九年の事を記す　十二冊
殘太平記

續太平記　九十九代文和年中より　廿冊
百七代文明の頃までを
鎌倉九代記　九十七代より百七代の帝　十五冊
天正のすゑまでを
豫陽盛衰記　一名河野軍記　十六冊
伊豫の国主
武田三代記　甲斐源氏信虎信玄　十二冊
勝頼三代の始末を記す
織田軍記　百六代天子正親町帝　廿二冊
天正の頃までを

御伽文庫　いろ〳〵のおもしろき　廿二冊
物語
百人一首　半切本　文章双紙　三冊
錦かづき　三冊　双六手引　一冊
女用文章大成　三冊　古今伊勢物語　一冊
女用智恵鑑　女儀礼式つゝしみ　一冊
女文庫高時繪　女中ふみづかひ　一冊
女童子往来　百人一首をやさしく　一冊

女重法記　女一生の手紙の書法　一冊
女ろん今川　一冊　薄雪物語　二冊
伊勢物語　二冊　百葉伊勢物語　一冊
貝原先生述
女大學寶箱　百人一首絵抄　その外一冊
女大學太字手本　一冊　琴の組　一冊
万宝百人一首　一冊　大嘉百人一首　一冊
万福百人一首　一冊　万載百人一首　一冊
拾遺百人一首　一冊　万徳百人一首　一冊
短冊百人一首　一冊　寶玉百人一首　一冊

女文選料紙箱　一冊
恩盡浦の錦　一冊
女用文章糸車　一冊

聖泰百人一首　一冊　寶菜百人一首　一冊
万玉百人一首　一冊　増玉百人一首　一冊
美玉百人一首　一冊　万物百人一首　一冊
尊圖百人一首　一冊　寸珍百人一首　一冊

小學　新板出所付　四冊　古文後集　二冊
同湯齋点　四冊　三體詩　音註　三冊
小學示蒙句解　十冊　閑際筆記　藤井懶齋　六冊
小學字引　一冊　詩法要畧　二冊
五經再校音註　十冊　經學要字箋　穂積伊助　三冊
新刻五經　十冊　和名類聚抄　源順　十冊
四書集註　新板　十冊　同大字　源順　十冊
同文子点　八冊　大學　道春点　一冊
同復齋点　十冊　批點讀ろ　一冊

四書無点大字 十冊　以呂波字考録 全長 二冊
同字引 小学入 一冊　小補韻會 附一冊
康熙字典 翻刻　助語辭 小本 大本 一冊 一冊
漢玉篇頭書 十二冊 毛刻貞斎　同頭書 一冊
和玉篇圖彙 一冊　同新板 二冊 自文府
開巻一笑 二冊 李卓吾　助字考 二冊 伊藤長胤
韻鏡 新考訂 一冊　長門戊辰問槎 三冊
同問若鈔 二冊　同癸甲問槎 二冊 瀧鶴臺
合類韻鏡 一冊　同二篇 二冊 長門諸賢
杜律趙註 五冊　人相水鏡集
貴貞志 一冊 諏訪府
文章緣起 二冊　柳莊相法 五冊
周南先生文集 六冊　寰海禪師詩集 二冊
小學題辭 石摺一冊 張即之　草書千家詩 一冊 李卓吾

積小館書則 一冊　董其昌法帖 一冊
周天球詩帖 一冊　廣澤仁亭帖 一冊
文徵明行文 新刻 一冊　夏竦千字文 一冊
同碧桐法帖 一冊　小笠家補闕千文 佚山 一冊
義之十七帖 一冊 分隷楷書叢林役牌 佚山 二冊
浪華帖 一冊 諏訪府　古象論語 佚山 十冊

和漢万寶全書 殘帙仍古篋中出 古今銘盡 後世の名りらも此書の如くなるべし 弟湯を乞刀 十三冊
和漢三才圖繪 天地人の名かあらゆる一切 八十二冊
孔方圖鑑 一冊 和漢の古銭を新舊と世に行はれたるまゝに悉く注解す 三冊
珠錢圖 一冊 あつめ注解をくわへたるもの 中山顧山
投壺令格 一冊 こゝこの法と殊なるあり 凡雅のものそのまゝと

晝夜重法記一冊 手形法之事
花押 [illegible]

看命一掌金 唐人行禮 一冊
同和解 馬場信武 一冊
雅游漫録 雅号物徳 七冊
青湾茶話 三冊
茶器辨玉集 九冊
利休茶湯集 六冊
茶湯流傳集 五冊
同 三傳集 四冊
茶席祖傳考 一冊
花道全書 四冊
立花圖編 三冊

楊弓射禮抄 二冊
將棊手鑑 宗甘 三冊
かゝり訓蒙 人形 三冊
聞書重室記 一冊 年中故實 一冊 尾刻良斎
万福壁劫記 一冊
筭学智恵海 一冊
廣益壁劫記世界全 一冊
筭学全書 一冊
寶玉雜書 一冊
四國へんろ道 一冊
同繪圖 一冊
難波九綱目 七冊
大坂町鑑、 一冊
同袖鑑後編 一冊

九章筭法記 一冊
筭法演段指南 二冊
折筭代記 一冊
四國中鑑 一冊
西國船印 一冊
國花万葉記 九冊
泉州志 四冊
東海道 西海道 細見圖 四冊

摂陽群談 十七冊 一日王鉾 四冊
八木相場帳 一冊 瀟湘八景大全 二冊
和漢船用集 十二冊 駅亭春隨筆 二冊
古今著聞集 仁義教訓 二十冊
童子訓 男女ともに 貝原先生 三冊 面影荘子 四冊
當世誰が身上 六冊 櫻陰比事 五冊
古今奇談英草紙 五冊 輕口笑哉 五冊
英草紙後編 繁野話 六冊 同浮瓢箪 五冊
當世百物語 五冊
雜謡 扇拍子 一冊 當流謡 百番 小本ニ 九冊
蘭曲大成 百番 二冊
童訓小謡 一冊 万宝小謡 百番 一冊
取者謡 一冊 ざゞんざ節 一冊
大萬節用集 一冊 大嘉節用集 一冊

立新節用集 一冊 大海節用集 一冊
万海節用集 一冊 万國節用集 一冊
廣大節用集 一冊 萬國通用要字撰 一冊
大極節用集 一冊
篆字節用集 一冊
寶暦節用集 一冊
文藝節用集 一冊

手本抜萃 弘法大師 一冊 瀧本書札 一冊
尊圓御真跡 一冊 文雜錦消息 一冊
世話千字文 空洞先生 一冊 奉納百首 一冊
書學文集 堀派永軒 一冊
壽福用文章 一冊
庭訓 一冊 今川 一冊

書林
大坂心齋橋筋
順慶町北江入
澁川繩觥堂
柏原屋清右衛門

大橋庭訓 大橋長堂 二冊
庭訓繪抄 一冊
實語教 品〻
古狀揃 品〻
同手本 長友松軒 一冊
古今銘物往來 一冊
万字盡 一冊
御成敗式目 一冊
同繪抄 一冊

今川手本 一冊 遲藤氏
今川の抄 一冊
商賣往來 うみ甘うみ江
篁歌字盡 品〻
風月往來 品〻
手習教訓狀 品〻
七つ いろは 品〻
永慶狀 一冊

安永九庚子年三月吉日

京寺町松原上ル下
菊屋 七郎兵衛

江戸通本町三丁目
西村 源六

大坂心齋橋順慶町
柏原屋清右衛門
刊行

明治

大坂心斎橋通
門脇古書屋

西村

明治三十四年

発兌

東京

明治三十三年

